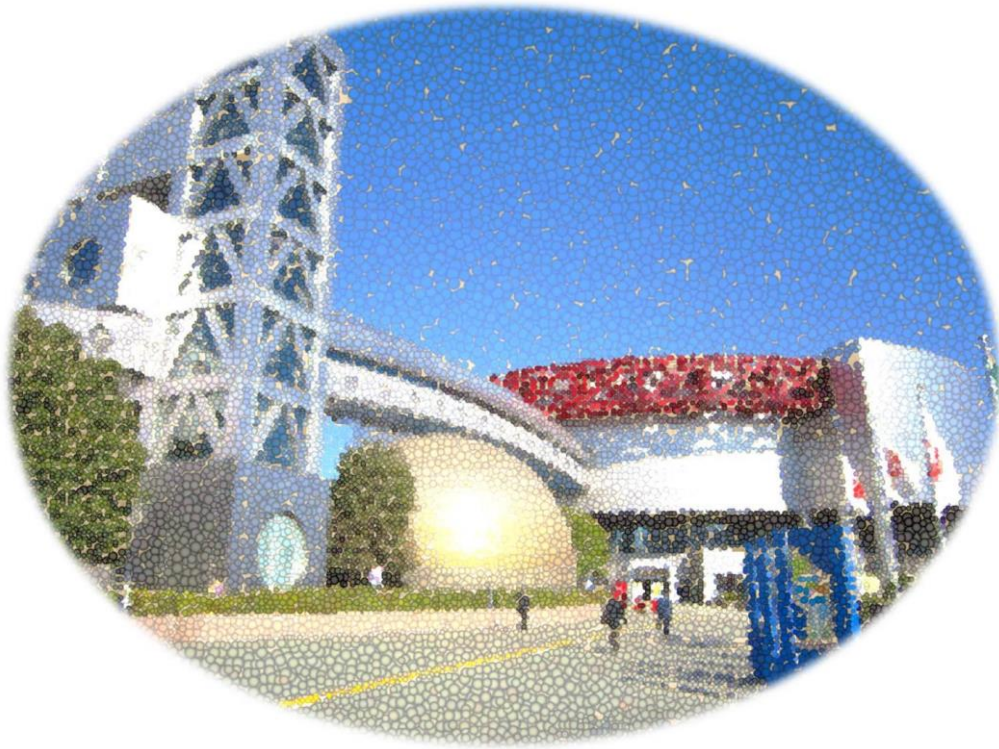


平成26年度

英語教育アドヴァンスト研修

授業改善プロジェクト 報告書

—アクション・リサーチによる高等学校英語授業の実践—



神奈川県立国際言語文化アカデミア

はじめに

神奈川県立国際言語文化アカデミア 所長
三國 隆志

英語教師にかぎらず、教師の自己研さんというものは、本来他から強制されずとも、自分自身の手で日常的に行うべきものである。今の時代は、実に多岐にわたる分野の学会や有志たちの研究会がある。インターネット時代に入ってから、それこそ玉石混交にわたる英語教育の情報を大量に取得できる。しかし、毎日のように、授業のほかにも多様な校務や生徒の生活指導、同僚教員や保護者との人間関係への配慮に心を尽くしながら教育にあたる英語教師が、困難な状況に立たされていることは容易に推測がつくし、精神衛生にも良いとは言えない。著名な研究者や優れた実践者の方々から新しい言語教育の理論や手法を学ぶことにも意義はあるが、自分の能力の研さんを自分で自由に工夫することの方が望ましいと考えるのは自然なことである。ただ、闇雲であってはならない。

こと英語教育に関するだけでも、教師がなすべき仕事は無限にある。教師として知力と体力に限界がある人間に過ぎない。超人ではない。もしも教師が自分の能力を誤解して、なんらの方法論を持たずに、この無限の仕事に邁進しようとするれば、いずれ力尽き、自信を失い、向かうべき道を見失うことになるであろう。良心的な教師であればあるほどそうなる。中井久夫氏の表現を借りるならば「小さな手漕ぎボートにひとり乗り込んで、広大な太平洋を横断するような」不安と恐怖を感じながら、教壇に立つことになるだろう。

何が大切かといえば、手漕ぎボートで広大な太平洋を渡ろうとしてはならないことである。広大な海を前にするならば、水平線を眺望して世界や人間の不可思議さを思いやることの方がよい。無限の世界をまず限定の世界にすること。太平洋ではなくて、晴れた日の芦ノ湖か山中湖ならば、手漕ぎボートでも乗り出すことができる。強い風が吹けばそれでも困難がつきまとうことだろう。湖中でボートが霧につつまれたとすれば、たとえ小さな羅針盤でも掌中にあれば、対岸に対する自分の位置を測定できる。そこに安心感が生まれる。この安心感があるとないとでは、教室における指導ぶりで天地の差が生まれると思われる。神奈川県立国際言語文化アカデミアの英語教員研修は、公立、私立を問わず県内すべての学校教員に開放されている。定評を得ている友好的な研修環境の中で、この小さな羅針盤を手に入れて、これからの自分の針路を確定できるようお手伝いすることができるなら、アカデミアでの英語教員研修を担当する者たちの最大の喜びとなるだろう。生徒の英語指導において臨症的な診断と的確な対応を行える英語教師の養成に、アカデミアはこれからも努力していきたい。成果は地道な積み重ねがあつてこそ得られるものだ。

目 次

「英語教育アドヴァンスト研修」とは	1
「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指してー授業改善プロジェクト	3
「学習意欲」にかかわる指導	
生徒の積極的な取組を促す授業デザイン	5
自律的学習者育成を目指した学習ストラテジー指導	9
生徒の積極性と主体性を育てる指導の工夫	13
ビデオ分析による生徒参加型授業への改善の試み	17
生徒中心の言語活動による指導の活性化	21
「語彙・文法」にかかわる指導	
自律的な語彙学習を促す授業実践	25
例文とペアワークを工夫した授業活性化の試み	29
文法知識の定着を目指した言語活動の工夫	33
「読むこと」にかかわる指導	
「読解とは何か」という問いから始めた授業改善	37
言い換え・要約・意見発表を活用したリーディング指導	41
和訳依存から直読直解への意識改革の試み	45
グループワークによる主体的な読解活動の推進	49
速く的確な読みを目指したリーディングストラテジー指導	53
読むことへの興味を高めるリーディングストラテジー指導	57
「話すこと」にかかわる指導	
話すことへの積極的態度を育成する指導	61
生徒の可能性を引き出すスピーキングの指導	65
対話力を高めるためのストラテジー指導	69
上達を実感させるスピーキングの指導	73
生徒の意識を変えた英語スピーチ活動	77
会話を継続させる能力を高める指導の工夫	81
即興での対話力を高めるスピーキング指導の工夫	85
「書くこと」にかかわる指導	
自己表現英作文を用いた使うための文法指導	89
ループリックを活用した英作文の指導と評価	93
書くことへの自信を育てるサマリーライティング	97
「論理的・批判的思考」にかかわる指導	
論理的思考力育成のための読む、書く力の統合的指導	101

*それぞれの実践レポートの内容については、言語活動の呼称などに関し、厳密な用語の統一はしていません。

英語教育アドヴァンスト研修とは

○ 英語教育アドヴァンスト研修のねらい

英語教育アドヴァンスト研修は、神奈川県で中核的役割を担う高等学校英語科の先生方に専門性の高い研修の機会を提供することを旨とし、県教育委員会との連携のもと、国際言語文化アカデミアで平成23年度から開講されました。

集合研修9日（前期2日，夏季4日，後期3日），勤務校での授業研究1日（前期・後期各半日，研修スタッフ訪問）から構成される合計10日間のプログラムは、「英語教師の専門知識，英語による発信力」「授業研究，授業改善」「多文化共生，異文化コミュニケーション」を3つの大きな柱としています。

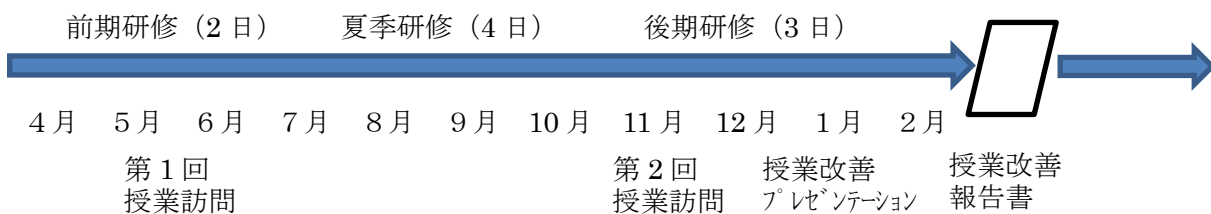
<p>Objective 1</p> <p><u>Expertise in English</u></p> <p>英語による発信力，及び英語教育・言語習得理論の実践への活用力を磨く。</p>	<p>Objective 2</p> <p><u>Reflective Teaching</u></p> <p>自らの授業を客観的に分析し，他教員の実践からも学びながら改善へと結びつける省察力を磨く。</p>	<p>Objective 3</p> <p><u>Multicultural Awareness</u></p> <p>英語教育において多文化共生，異文化コミュニケーションを扱うことの意義について意識を高める。</p>
---	--	---

平成26年度までの4年間で，計72名の参加者が，高度な言語知識・技能及びそれらを基盤とした指導力を身につけ，仲間の教員との共同による英語教育推進に貢献すべく県内の各学校で活躍しています。

毎年プログラム内容に修正を加えながら，英語運用能力向上の試みをはじめ，省察による授業実践力向上，多文化共生・異文化コミュニケーションへの意識高揚など，研修内容の改善と充実に取り組んできました。

○ 研修成果を活かす場としての授業改善プロジェクト

研修内容は教室でのよりよい授業実践，生徒の英語力向上へと結びつかなければなりません。しかし，教師であれば授業改善の複雑さ・難しさは身をもって経験しています。そこでアドヴァンスト研修では，集合研修において多文化共生への意識，英語力，英語教育に関する専門知識を高めながら，勤務校では継続的に授業改善に取り組むことができるように授業改善プロジェクトを取り入れています。



○ 振り返ることの意義

「なぜ今日の授業でこの言語活動をしたのだろうか」と改めて自問すると、その理由を必ずしも明確に答えられないことがあります。「本当はコミュニケーションに教えたいが、受験があるので文法演習をしている」という場合もあるでしょう。省察的実践の意義は、(1) 教師としての信念や英語教育の目的を再確認し、(2) 授業目標を達成するのに理に適った実践をしているか否かを見極め、(3) 実践の効果についての客観的なデータを分析することにより、恒常的な授業改善につなげることにあります。

今年度の報告書には、さまざまな手法を用いた振り返りと気づきの軌跡を見いだすことができます。

■ 英語教育の目的についての気づきの例

アンケートの結果、中学校時代に英語が苦手な自信を失っている生徒でも、将来英語が必要であり、使えるようになりたいと感じていることがわかった。

■ 授業目標と授業実践の整合性についての気づきの例

自らの授業ビデオを分析した結果、発問のテンポが速すぎるため、生徒が教師の質問を十分に聞き取れず、teacher talk が生徒の発話を促す役割を果たしていないことがわかった。

■ 実践の効果についての気づきの例

文法的な誤りはあるものの、英作文ルーブリックにおける内容、構造、正確さの各項目において多くの生徒に進歩が見られた。

日々の授業での生徒の学習状況の観察をはじめ、多様な振り返りの手法を身につけ、恒常的に省察的実践を続けることが、よりよい授業実践につながります。

○ 報告書作成の目的

本報告書の目的は3つあります。第一に、研修参加者が自らの授業改善の軌跡を記述しお互いの情報を共有することで今後の授業改善のための共同体づくりに役立てること。第二に、報告書の内容を他の英語科教員と共有することで、授業改善に関するアイデア創出に資すること。第三に、高等学校英語教育の課題やそれに対する現場の取組状況を公表することで、英語教育や教師教育にかかわる研究者の今後の研究に資することです。

お読みになる際は、以下の本報告書作成・編集方針をご理解いただけるようお願いいたします。

授業改善プロジェクト報告書作成・編集方針

1. 授業に参加している生徒の個性や尊厳を尊重し、生徒はみなそれぞれの可能性を持っているとの認識に立つ。
2. 学校や生徒の状況について、読者に参考となる情報を個人情報の保護に留意して記述する。
3. 実践報告については、理想論にとらわれず、現状認識に根ざした課題解決の軌跡を記述する。
4. 授業改善のプロセスやストーリーが読者にわかるように記述する。
5. データ処理や分析については、統計処理を含め言語教育研究で用いられる手法を積極的に取り入れる努力をする。

本研修の実施及び本報告書の作成にあたっては、過去の文献や研究成果、私たち研修担当者自身がお世話になった諸先生方から多くの知見をいただいていることを申し添えます。

「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指して－授業改善プロジェクト

○ 授業改善プロジェクトの流れ

授業改善プロジェクトは次のような手順で進められます。

1. 自分の授業スタイルの振り返り

授業で行っている個々の活動の目的と効果、活動のつながりを改めて考えることで、英語教師としての思いと実際の指導方法の整合性を確認します。これにより、自分の授業を客観的に分析するという体験をします。

2. 授業における課題の発見

現在担当している科目の一つについて、どのような課題・問題があるか、教師の思いと授業の実情にどのような食い違いがあるかなどを、思いつく限り挙げてみます。

(例) 英文読解に終始してしまい生徒に自己表現をさせていない。

音読をしっかりとさせたいが声も小さくなかなか盛り上がらない。

3. 改善すべき課題の確定

上で挙げた課題のうち、改善可能で優先順位の高いものを一つまたは二つ選びます。

4. 生徒の現状把握

確定した課題に関連する生徒の学習態度や英語力・技能などを、質的・数量的に調査します。

(質的データの例) 生徒の英語学習に関するコメント、教師による学習観察記録

(数量的データの例) 標準テストの得点、推定語彙サイズ、発話語数

5. 改善目標の設定

授業改善の目的とゴールを、「リサーチ・クエスチョン」および「改善の目安(数値目標)」として明確に言語化します。

6. 目標達成のための手だての決定

目標を達成するために、授業でどのような指導を行うかを決めます。その際、それぞれの指導事項や言語活動にどのような目的や効果があるのかを明らかにしておきます。

(例) 新出語彙の導入に画像や映像を活用すれば、記憶の助けになり語彙の定着がしやすくなるだろう。

7. 生徒の変化の検証と教師自身の振り返り

原則的に事前の現状把握で用いたものと同じ手法で、生徒の変化・向上を検証し、改善目標が達成されたかどうかを調べます。また同時に、この一連の取組を通して「生徒の見方」「授業のデザイン」「教材の扱い方」などについて、教師自身がどのように変化したかを省察します。

8. 報告

同様の課題を抱える教師仲間との情報交換、勤務校や地区での情報提供に役立てるために、レポートを作成します。ここで再度、今回の授業改善の内容・手法を振り返るとともに、今後の課題について考察します(研修最終日に英語による口頭発表も行います)。

○ “Teacher as a Researcher” の意識とスキル

「自分が教わったように教える」「目の前の教材をあるがままにこなす」「はやりの言語活動を切り貼りする」というやり方では、うまくいかないことがよくあります。教師の直観や伝統的なやり方にもよさがありますが、生徒の質的・数量的ニーズを調べ、その客観的データに基づいて、生徒とゴールを共有しながら（変化をとまらぬ）意思決定をしていくという意識やスキルは、プロである教師の成長に不可欠であると考えます。この授業改善プロジェクトに取り組んだ先生方が、仲間を増やしながら、よりよい授業を追求するプロ集団をつくり上げていくことを期待しています。

○ 過去3年間のテーマ

この3年間で受講者の先生方が取り組んできたテーマには、次のようなものがあります。

年度	テーマ	
平成24年度	学習意欲の維持と基礎的な語彙力向上	論理展開を意識したリーディング指導
	「楽しい授業」「やる気が出る授業」の工夫	速読のための学習方略の指導
	動機づけを高める学習ストラテジーの指導	速読活動によるリーディング授業の改善
	生徒が学習しやすい語彙指導の工夫	ループリックを用いたライティング指導
	音読とディクテーションで伸ばす聞く力	生徒と教師がともに学ぶ自由作文の授業
	リズムを意識して読むための音声指導	読解力向上のための英文要約指導
	生徒を励ます長文読解指導	教科書読後の5文サマリー活動
平成25年度	英語が苦手な生徒の学習意欲向上	スキーマを活用した読解・速読の指導
	言語活動につなげる文法指導	要旨と構造にかかわるリーディング指導
	学習意欲と達成感を高める語彙指導	意欲と達成感を高めるリーディング授業
	批判的・論理的思考力を育む英語授業	ループリックを活用した自由英作文指導
	話すことに自信を持たせる授業	サマリーを用いた技能統合型授業
	英文の内容理解に基づく会話活動	ループリックを活用したサマリーの活動
	生徒に達成感を与えるリーディング授業	
平成26年度	生徒の積極的な取組を促す授業デザイン	読むことへの興味を高める読解方略指導
	自律的学習者育成を目指した学習方略指導	話すことへの積極的態度を育成する指導
	生徒の積極性と主体性を育てる指導の工夫	生徒の可能性を引き出すスピーキング指導
	ビデオ分析による生徒参加型授業への改善	対話力を高めるためのストラテジー指導
	生徒中心の言語活動による指導の活性化	上達を実感させるスピーキング指導
	自律的な語彙学習を促す授業実践	生徒の意識を変えた英語スピーチ活動
	例文とペアワークを工夫した授業活性化	会話を継続させる能力を高める指導の工夫
	文法知識の定着を目指した言語活動の工夫	即興での対話力を高めるスピーキング指導
	読解とは何かを問う授業改善	自己表現英作文を用いた文法指導
	言い換え・要約・意見発表とリーディング	ループリックによる英作文指導と評価
	和訳依存から直読直解への意識改革	書く自信を育てるサマリーライティング
	グループワークによる主体的な読解活動	論理的思考力育成のためのRW統合的指導
速く的確な読みを目指した読解方略指導		

生徒の積極的な取組を促す授業デザイン

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	----------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は1学年1クラス38名（男子14人，女子24人）である。明るくにぎやかな反面，授業に集中するよう指導しなければならないような場面もある。ほとんどの生徒は大学や専門学校への進学を目指している。

解決すべき課題

全体的には明るく発言も活発である。ただし，英語に興味を持ち，前向きに学習する生徒がいる一方，苦手意識を持ち，授業に集中できていない生徒も多い。いかに彼らの関心をひきつけ，楽しくためになる英語の授業を展開するかが課題である。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・アンケート調査：授業で伸ばしたい力や知識について（7月：回答者38名）

①英語を聞く力について

ぜひ伸ばしたい	25人 (65.8%)
できることなら伸ばしたい	11人 (28.9%)
それほど伸ばしたいと思わない	2人 (5.3%)
まったく伸ばす必要を感じない	0人 (0.0%)

②英語を話す力について

ぜひ伸ばしたい	28人 (73.7%)
できることなら伸ばしたい	8人 (21.1%)
それほど伸ばしたいと思わない	2人 (5.2%)
まったく伸ばす必要を感じない	0人 (0.0%)

③英語を読む力について

ぜひ伸ばしたい	26人 (68.4%)
できることなら伸ばしたい	10人 (26.3%)
それほど伸ばしたいと思わない	2人 (5.3%)
まったく伸ばす必要を感じない	0人 (0.0%)

④英語を書く力について

ぜひ伸ばしたい	26人 (68.4%)
できることなら伸ばしたい	10人 (26.3%)
それほど伸ばしたいと思わない	2人 (5.3%)
まったく伸ばす必要を感じない	0人 (0.0%)

⑤文法の知識について

ぜひ伸ばしたい	25人 (65.8%)
できることなら伸ばしたい	7人 (18.4%)
それほど伸ばしたいと思わない	6人 (15.8%)
まったく伸ばす必要を感じない	0人 (0.0%)

⑥単語や熟語の知識について

ぜひ伸ばしたい	24人 (63.2%)
できることなら伸ばしたい	13人 (34.2%)
それほど伸ばしたいと思わない	2人 (5.3%)
まったく伸ばす必要を感じない	0人 (0.0%)

これらの数字から、ほとんどの生徒には英語を学びたいという強い気持ちがあることが読み取れる。これまでの授業中の落ち着かない様子から、英語を学ぶことにあまり関心がないのだと思い込んでいたので、これは驚くべき結果だった。彼らが楽しく積極的に参加し、学ぶ意義を見出せるような授業にしていくことが必要であると感じた。

・授業の進め方の振り返り

これまでの授業では、文法訳読式で授業を進めていた。私自身、そのように英語を教わったため、その授業形態や展開になじみがあったのである。また、英文の基本的な構造を正確に理解することが、生徒の英文理解に不可欠であり、1文ずつ教科書の英文を丁寧に読み進めていくことで、生徒の「英文を理解したい」という要求にきちんと応えられると思ったからである。具体的な流れは次のようであった。

* 導入 (5分) : あいさつ (How are you?など)

* 新出単語の学習 (5分) : 発音と意味の確認

* 本文理解 (40分) : 1文ずつ板書し、生徒に日本語に訳させる

この形態では、生徒が英語を話す機会はいいさつの5分ほどであり、その多くは“Sleepy” “Fine” “Hungry”などの単語であった。

リサーチ・クエスチョン

生徒が英語で自己表現しながら、学習に積極的に取り組むようになるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安 : ・授業中の生徒による英語での発話が増える。

・ワークシートに学習した文法や表現を使った自己表現の英作文を書けるようになる。

改善のための手だて

- 文法訳読式の授業をあらため、生徒が授業のなかで英語を使う時間を増やせば、より積極的に学習するようになるだろう。

<授業の進め方>

- ・導入 (2分) : あいさつ (How are you?など)
- ・前回の授業で学んだ重要表現(I have to)の復習 (5分) :
(例) What do you usually have to do in the morning?
- ・新出単語の導入と発音練習 (8分) : 単語の意味を理解しやすくするように、関連した表現や質問を英語で行う。発音練習は、全体で行った後、ペアで行う。
- ・本文に意味の区切りの線を入れさせる (3分)
- ・本文の読みの練習 (5分) : 全体とペアで行う。
- ・重要項目の確認 (10分) : 重要項目を板書し、既習事項については生徒にその答えを板書させる。
- ・本文理解 (5分) : 生徒の板書した答えを確認しながら、英文の意味をとる。
- ・本文の音読練習 (3分) : ペアで練習させる。
- ・本文の要約 (5分) : 日本語で考えさせ、答え合わせをする。
- ・重要表現の学習 (4分) : 例文を示し、生徒に自分のことを学んだ熟語や文法を用いて表現させる。

生徒の変化 (途中経過, 事後の検証結果など)

- ・生徒の英語による発話

やりとりの例 (目標文法 : have to)

(T: What do you usually have to do in the morning?)

S: I have to eat breakfast./I have to take a bath./I have to brush my teeth.

(T: What do you have to do at school?)

S: I have to study.

(T: What do you have to do in winter?)

S: I have to eat oranges.

授業方法を変えたことで、ところどころ日本語も含まれてはいるが、あいさつを含め合計 20 分間、英語によるやりとりをする時間ができた。

- ・ワークシートのなかの生徒の英作文

Cars is becoming popular especially in large cities.

Today, the number of people is increasing gradually.

The shower will keep me cool.

I have had this glove for many years.

Music makes me happy.

You look happy today.

Keep the advice in mind.

下線部のような文法的な誤りはあるものの、表現しようという意欲が感じられた。

・音読テストの実施

授業方法を変えたことで、一つのレッスンが終わると音読テストを行う時間がとれるようになった。生徒は試験が控えていることがわかっているのに、授業中の単語や本文の読み方の練習では、以前よりも丁寧に取り組むようになった。

・生徒の授業への取組

英語で単語の説明をしたり、既習の英文の内容を復習したりすると、期待した以上に聞き取ろうとする生徒が多くいることに気づいた。また、始業時にまだ授業の準備ができていないときなど英語で注意すると、“Yes”、“Sorry”と言いながら準備を始める生徒も出てきたのがうれしい驚きだった。

教師の変化

今回の授業改善で、授業のなかで生徒と英語で話すことを意識的に行ってみて、英語はコミュニケーションの手段であることを再認識するとともに、日常生活にかかわるより多くの英語表現を、自分も学び、生徒にも指導する必要があると感じた。これからも英語学習者として学び続けながら、生徒にコミュニケーションの楽しさを伝えていきたいとあらためて思った。

今後の課題（次の改善点など）

授業で学んだ表現がどれくらい生徒に定着したのか、今回は測ることができなかった。ただ、定期試験の結果などを見ると、くり返しの練習が必要だったことがうかがえた。例えば、授業中に口頭や英作文で自己表現をさせて練習した“be famous for”を出題したところ、“be famous”までは書くことができたものの、その後の前置詞を書くことのできない生徒がほとんどだった。一方、授業の冒頭に英語で質問した時に、少し前に学んだ表現を使って答えられた生徒が数人いた。時間の制約があるなかで、いかに既習事項をくり返し練習させ、表現の定着を目指すのかが、今後の大きな課題である。

まとめ・感想

外国語を学ぶのは、難しく根気のいることである。しかし、私は、この職業につき、英語を学び続けられることに喜びを感じている。生徒にも、授業を通して、この楽しさを少しでも伝えることができたと思う。今回、この研修に参加して、授業の組み立てについてさまざまなご助言をいただいた。なかには辛口なものも含まれていたが、ともするとマンネリに陥りがちな自分の授業形態を見直すよい機会になったと感じている。また、受講生の様子をよくご覧になり、さじ加減をしながら接してくださったアカデミアの職員のかたがたのプロ意識を強く感じ、授業では生徒の反応や理解度をしっかりと確認しなければいけないという、当たり前のことを自分が忘れがちだったことに気づいた。生徒にとっても私にとっても、よい時間を過ごすことができるよう、この研修で学んだことをこれからの授業づくりに活かしていきたいと思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

土屋澄男.(2000)『新編英語科教育法入門』研究社出版

金谷 憲・高知県高校授業研究プロジェクトチーム.(2004)『高校英語教育を変える和訳先渡し授業の試み』三省堂

自律的学習者育成を目指した学習ストラテジー指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2年生2クラス（A：文理混合・B：理系クラス，男子計40名，女子計38名）である。英語が苦手な生徒が多いが，頑張ろうとしている生徒も多い。授業に集中できない場面もあるが，人なつこく素直な生徒たちである。

解決すべき課題

英文を声に出して読んだり，そのまま暗唱したりすることは好きだが，自分で考えて英語を書いたり話したりすることが苦手な生徒が多い。それが主体的に学習に取り組む姿勢をはばんでいる一因であると思われる。中学から英語に対して苦手意識を抱えており，高校でも克服できないでいる。しかし，「英語ができるようになりたい」「英語をどのように学習すればよいのか」という前向きな気持もあるので，どのように指導（支援）したら，生徒が苦手意識を克服し，自律的に学習に取り組めるようになるかが課題である。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・アンケート調査：生徒による学習ストラテジーの使用状況（6月実施）

学習ストラテジーの研究者である Oxford が考案した質問紙*を使い，生徒の英語学習におけるストラテジーの使用状況を調べた。「単語を書く／口頭で言う」「難しい単語の意味を推測する」「学習した内容を復習する」など50のストラテジーについて，「1. まったくまたはほとんど自分にあてはまらない」「2. 普通は自分に当てはまらない」「3. 少し自分にあてはまる」「4. 普通は自分に当てはまる。」「5. いつもまたはほとんど自分にあてはまる」の5段階で自己分析させ，すべての回答（例：クラスAなら50項目×39人＝1950個）に占める1～5の出現割合を算出した。その結果，6割または7割の回答が（ストラテジーの使用は）「自分にあてはまらない」となっていることがわかり，多くの学習ストラテジーが少なくとも意識的には使われていないということがうかがえた。

*Strategy Inventory for Language Learning (SILL) EFL/ESL Version 7.0

学習ストラテジーの使用状況

クラスA(回答者数：39人)

選択肢	1	2	3	4	5
全回答に占める割合(%)	29	31	22	11	7

クラスB(回答者数：38人)

選択肢	1	2	3	4	5
全回答に占める割合(%)	31	39	20	8	2

リサーチ・クエスチョン

生徒が英語のリーディングおよびリスニングに対する苦手意識を克服し、自立的かつ主体的に学習に取り組むようになるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・「リスニングとリーディングに対する苦手意識が減った」という生徒の割合が 7 割程度以上になる。

・「リスニングとリーディングへの具体的な取り組みかた（勉強のしかた）がわかった」という生徒が 7 割程度以上になる。

改善のための手だて

○ ストラテジーを意識しながら言語活動に取り組むようにさせれば、自立的学習が促され、成功体験も期待されるため苦手意識が軽減されるだろう。

・リスニングまたはリーディング活動の前に、その活動をするうえで自分が使おうと思うストラテジー（「英語を 1 語 1 語訳そうとしない」「集中して聞く」など）をリストから複数選ばせる。

○ 自分自身の達成度や理解度とともに学習過程について振り返らせれば、学習の目的と方法を明示的に意識することで自律性が高まるだろう。

・活動終了後、活動前に選んだストラテジーについて、役に立ったか立たなかったかを振り返らせ、それぞれの理由を書かせる。

・授業の最後に「わかったこと」「できたこと」「わからなかったこと」「できなかったこと」について自由に記述させる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・授業中のリスニング、リーディング活動

① 生徒が選択したストラテジーの数の推移

表 1 はリスニング活動（6・11 月）、リーディング活動（9・10 月）のそれぞれにおいて、生徒が選択したストラテジーの数の平均を習熟度別に見た結果である。1・2 学期の定期テスト計 4 回の素点の合計により、生徒全体を A(Advanced:352-259 点), UI(Upper Intermediate:245-200 点), LI(Lower Intermediate:197-173 点), B(Basic: 168-71) の 4 つのグループに分けた。人数は、それぞれ 19 人, 18 人, 20 人, 21 人である。各層の生徒が選択したストラテジー数の平均は、時間の経過とともに減少傾向にある。リスニングとリーディングではその傾向に若干の相違があるようにも見受けられ、今後の指導とその分析では使用頻度だけではなく、使用方法という質的側面や言語使用のモード（リスニング・リーディング）にも留意する必要性を感じた。

表 1 選択したストラテジーの数の平均

Mode	Date	A	UI	LI	B
リスニング	June 11	5	4	4	4
	Nov. 12・14	3	2	3	2
リーディング	Sep. 8・9	4	3	4	3
	Oct. 8・9	3	3	3	3

② 振り返りシートの自由記述

『知らない単語をとばす』と知らない単語が多すぎて文章の意味がわからなくなった」「単語を覚えなないといけない」「this が指すものはそれより前にあるかなとか予想できた」「トピックセンテスを見つけたらわりと（内容が）わかった」など、英文理解のプロセスにおいて自分に欠けていることや必要なことに気づいている記述がほとんどで、自分を客観視できていることがうかがえた。

・事後のアンケート< 1 2月実施, 回答者: 69名>

期末試験後の授業において、アンケートを行った。質問は7問で、自由に意見・感想を書く欄を最後に設けた。

Q1. 英文の読み方の具体的な方法がわかったか Q2. リスニングの具体的な方法がわかったか
 Q3. 英語を読むことにたいする苦手意識は減ったか Q4. 英語のリスニングにたいする苦手意識は減ったか
 Q5. 自分で英文を読もうとする姿勢は身についたか Q6. 自分で英語を聞こうとする姿勢は身についたか
 Q7. 英語を頑張ろうという気持ちは強くなったか

Qs.	1.とてもそう思う	2.そう思う	3.あまりそう思わない	4.そう思わない
1	3人 (4.3%)	48人 (69.6%)	15人 (21.7%)	3人 (4.3%)
2	5人 (7.3%)	43人 (62.3%)	18人 (26.1%)	3人 (4.4%)
Qs.	1.とても減った	2.減った	3.あまり減っていない	4.減っていない
3	2人 (2.9%)	31人 (44.9%)	30人 (43.5%)	6人 (8.7%)
4	4人 (5.8%)	25人 (36.2%)	36人 (52.2%)	4人 (5.8%)
Qs.	1.とても身についた	2.身についた	3.あまり身につけていない	4.身につけていない
5	2人 (2.9%)	36人 (52.2%)	27人 (39.1%)	4人 (5.8%)
6	6人 (8.7%)	41人 (59.4%)	19人 (27.5%)	3人 (4.4%)
Qs.	1.とても強くなった	2.強くなった	3.あまり強くなっていない	4.強くなっていない
7	5人 (7.3%)	28人 (40.6%)	32人 (46.4%)	4人 (5.8%)

ストラテジーを主体的に選び活用する活動を通して、英文の読み方・リスニングのしかたがわかったという生徒の割合はリーディングで約74%、リスニングでは約70%であり、改善の目安は達成した。一方、苦手意識の軽減については、リーディングで約47%、リスニングで約42%の生徒が減ったと回答し、改善の目安は達成しなかった。質問1・3と2・4の回答を比較すると、リーディングよりリスニングのほうがどちらも選択肢1・2を選んだ生徒の割合は低いが、質問5と6の結果を比べると、リスニングに対して主体的に取り組む姿勢が身についたと思っている生徒（選択肢1・2の回答率約68%）はリーディング（約55%）よりも多かった。リスニングへの苦手意識は減らなかったが、前向きになれたことがわかる。アンケートの自由記述回答からも、ストラテジーを意識した活動が生徒の学習に対する意識に多少なりとも影響を与えたことがうかがえる。

<自由記述回答（原文のまま）>

- *今までリスニングでは全部聞き取ろうとしていてあまり理解できなかったけど、キーワードをしっかりと聞き取ることでわかるようになった。
- *もっと単語を一つでも多く覚えてストラテジーをさらにうまく活用していけたらと思います。
- *以前は適当に文を読んで問題に答えを書き込んでいたけど少しかわってきたような気がした。
- *授業でストラテジーをやって自分で選んでうまくいくときもあれば、うまくいかないときもあり

ました。でも英語に少し興味をもつようになれたからよかったです。

*英語は苦手だったけど、なんとなく好きになりました。

教師の変化

- ・「何を学ばせるか」ということだけでなく、生徒一人ひとりが「どのように学んでいるか」を把握する必要性をあらためて感じた。
- ・振り返りシートから、一人ひとりの生徒が何につまずいているかがよくわかり、生徒たちが「わかりたい」「できるようになりたい」と思っていることがあらためてわかった。
- ・生徒の知的好奇心を呼び覚まし、生徒が達成感を感じることができるような授業の進め方を以前にも増して考えるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

- ・今回は4技能のうちリーディング・リスニングにおいてストラテジー指導を取り入れたが、今後は他技能の活動においてもストラテジー指導を取り入れたい。
- ・ストラテジーをどの程度使っているかという使用頻度だけではなく、どのように使うか、という質的側面にも注目し、「このストラテジーはこのような場合に有効である」という実感を生徒が得られるような学習体験を工夫したい。
- ・苦手な生徒にとっては、ストラテジー以前に基礎・基本の定着が不可欠であるので、生徒の基本的な語彙力、文法知識・理解の強化を、一年を通し継続して行っていきたい。

まとめ・感想

目の前にいる生徒たちに、教師として自分には「何ができるか」「何をしてあげたいか」と考えたとき、学習ストラテジーの指導が思い浮かび、今回アクションリサーチのテーマに選んだ。受動的で機械的な作業を好む姿勢から脱して、自律的な学習者になってほしいという思いで実践を始め、終えた今、その思いはさらに強くなっている。ストラテジーの活用には、基本的な語彙力・文法力の強化も必須であると強く感じた1年でもあった。生徒一人ひとりが持つ可能性を伸ばし、主体的に取り組む姿勢を育みながら「できる」喜びを感じられる授業を目指して、これからも授業改善を続けていきたい。最後に、アカデミアの先生方の熱意あふれるご指導とあたたかい人柄に対し、敬意を表するとともに、今年度この研修の機会をいただいたことに感謝したいと思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

Oxford, L.R. (1990). *Language learning strategies: What every teacher should know*. Boston: Heinle & Heinle Publishers.

Cotterall, S. (1995). Developing a course strategy for learner autonomy. *EFL Journal*, 49 (3), 211-227.

大学英語教育学会・学習ストラテジー研究会(編著). (2006). 『英語教師のための「学習ストラテジー」ハンドブック』大修館書店

生徒の積極性と主体性を育てる指導の工夫

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は35名（男子25名，女子10名）の大学進学希望者クラスである。学習意識が高く，授業にも大変意欲的に取り組んでいる。

解決すべき課題

授業中の活動には，よく声を出したり体を動かしたりして積極的に取り組んでおり，課題提出もしつかりできるが，苦手意識からか，英文読解や文法学習になると途端に受け身の姿勢になってしまう。文法訳読方式を脱し，生徒が生き生きと主体的に取り組めるような授業づくりをしたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第1回研究授業（6月）

授業後にフィードバックを受け，さらにビデオを見て自己分析をした。その結果，授業中盤以降，特に教科書本文の内容理解の部分にさしかかると，やはり生徒が下を向いて沈んだ雰囲気になってしまったということが判明した。その原因の一つは，教師が細かく指示を出しすぎたり説明の時間が長くなったりすることで，生徒が活動する時間が少なくなってしまうことにあるのではないかと考えた。

・事前アンケート（6月：回答者数32）

おもに「授業中に眠くなるか」「授業中に頭を働かせている時間があるか」についてアンケートを実施した。

1. 現在のコミュニケーション英語Ⅱの授業は眠くなりますか？眠くなりませんか？

まったく眠くならない	まあまあ眠くならない	眠くなる	とても眠くなる
7人 (21.9%)	16人 (50.0%)	9人 (28.1%)	0人 (0.0%)

<生徒からの回答例>

(眠くなるとき)

- ・説明が長いとき，説明を聞いているだけのとき
- ・前日あまり寝ていないとき
- ・午後の時間割のとき

(眠くならないとき)

- ・問題を解いているとき，問いかけや問題について考えているとき
- ・単語ワークシートを用いたペアワークをしているとき

2. コミュニケーション英語Ⅱの授業において，頭を働かせている時間があると思いますか？

たくさんある	まあまあある	あまりない	まったくない
7人 (21.9%)	23人 (71.9%)	2人 (6.3%)	0人 (0.0%)

<生徒からの回答例>

- ・教科書やワークブックの文法問題を解いているとき
- ・先生から何かを質問されて答えるとき
- ・単語ワークシートを用いたペアワークをしているとき

アンケートの結果，3割近くの生徒が「眠くなる」と感じていることがわかった。こちらが生徒の様子から感じていたとおり「説明が長いとき，説明を聞いているだけのときに眠くなる」というコメントが特に多数を占めていた。9割以上の生徒が授業中に「頭を働かせる時間がある」と思っていたことは予想外だったが，生徒の回答を見てみると，多くの生徒が文法問題演習を挙げており，英文を理解する時間は考える時間としてとらえられていないようだった。

リサーチ・クエスチョン

生徒が積極的に授業に参加し，主体的に学習活動に取り組むようにするためには，どのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
- ・授業中「眠くなる」と感じる生徒が減少する。
 - ・テキスト理解にかかわる活動で「頭を働かせている」と感じる生徒が増加する。

改善のための手だて

- テキスト理解に関わる英語でのやりとりの機会を増やせば，授業に集中させることができ，より積極的な参加を促せるだろう。
 - ・オーラルイントロダクション，口頭による前時の内容確認のいずれかを必ず毎時間実施し，生徒とのインタラクションを増やす。
- テキスト理解に必要な作業を自力でさせれば，より主体的に読解活動に取り組ませることができるだろう。
 - ・テキスト理解のカギとなる語句，文法項目が用いられている箇所を見つけてアンダーラインを引かせる。
 - ・内容理解を確認するための質問の答えの中心となる部分を見つけてアンダーラインを引かせ，適切な答えを書かせる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・事後アンケート（12月：回答者数 32）

1. 現在のコミュニケーション英語Ⅱの授業は眠くなりますか？眠くなりませんか？

まったく眠くならない	まあまあ眠くならない	眠くなる	とても眠くなる
6人（18.8%）	20人（62.5%）	5人（15.6%）	1人（3.1%）

「まったく眠くならない」と答えた生徒は1名減ってしまっただが、「まったく／まあまあ眠くならない」と答えた生徒の割合は81.3%となり、約10%増加した。「眠くなる」と答えた生徒の割合は減少したものの、「とても眠くなる」と答えた生徒が1名発生してしまっただ。おそらくこの生徒は英語が苦手な生徒で、授業方法の変化が負担となってしまったのではないかと考えている。授業中眠くなる時はいつかという問いに対して、「説明が長いとき・説明を聞いているだけのとき」という回答が激減し、単語ワークシートを用いたペアワークをしている時や、英語で質問されている時に眠くならないという意見が多く見られた。

2. コミュニケーション英語Ⅱの授業において、頭を働かせている時間があると思いますか？

たくさんある	まあまあある	あまりない	まったくない
8人（25.0%）	22人（68.8%）	2人（6.3%）	0人（0.0%）

授業中に頭を働かせている時間が「ある」と答えた生徒の総数に変化はなかったものの、「たくさんある」と答えた生徒が1人増えた。頭を働かせているのはいつかという問いに対して、「オーラルイントロダクションや前時の内容確認などの場面で、英語でやりとりするとき」や「英文のなかで、理解に必要な語句、文法が使われている箇所や質問の答えにかかわる部分を自分で探してアンダーラインを引いているとき」などこちらが意図したとおりの具体例が多く書かれていた。

「授業中眠くなる」という生徒が減少し、「頭を働かせている時間」としてテキスト理解に関わる活動に言及している生徒が増えたことから、改善の目標はおおむね達成できたと考える。

教師の変化

研修に参加するまで、教師が授業中のすべてのことについて説明し、細かく指示を与えさえすれば、生徒は意欲的に学習できるはずだと思っていたが、今回の授業改善を通して、生徒が自ら考えて挑戦する時間が大切であることを学んだ。授業の組み立て方についても、「9説明して1取り組ませる」のではなく、「2説明し、4取り組ませて、4一緒に考える」ということを意識するようになった。また、答えやすい質問は英語で発問し、英語で答えさせるようになった。それにともなって、自分自身の英語力向上にもよりいっそう努力するようになった。

今後の課題（次の改善点など）

- ・問題に答える，必要な部分にアンダーラインを引くといった理解に関わる活動だけでなく，生徒が自ら理解した内容や言語知識を活用して表現活動に取り組めるような授業を目指す。
- ・継続的に授業改善に取り組みながらコミュニケーション重視の授業をすすめるために，自分自身の英語力向上の努力を続ける。

まとめ・感想

つねに生徒の力を伸ばしたいと考えていた一方で，生徒が自ら考え挑戦する機会をつみ取っていたことに気づかされ猛省した。教師が一生懸命に頑張るのは当然だが，授業という場では生徒が一生懸命に取り組んでいることこそがもっとも望ましい。生徒主体の授業を作り上げるためには，教材や活動の準備により一層の工夫が必要となるが，そのための時間を確保し，充実した授業を作り上げていかなければならない。教師生活も3年目となり，よくも悪くも少しずつ仕事になれ始めた頃にこの研修に参加できたことを非常に有意義であったと感じている。自分の枠のなかだけでの授業改善ではなく，周りの人々から情報や協力を得ながら進める授業改善の方が効果的であるということを学んだので，今後も同僚との関係を大切にしながら，よりよい授業実践に努めていきたい。今回の研修のように，よい意味で自分の価値観を壊しながら授業を変化させていくことができれば，また次のステップへ進むことができると思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

静 哲人.(1999).『英語授業の大技小技』 研究社出版

久保田章・岩崎広貞・卯城祐司.(2001).『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』 大修館書店

ビデオ分析による生徒参加型授業への改善の試み

科目名	リーディング	学年	3	形態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------	----	---	----	----------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

男子 12 人，女子 26 人のホームルームクラスで，とてもアットホームな雰囲気である。クラスの約半数が 2 学期に推薦入試等で進路が決定するが，一般入試を控えている生徒も含めて全員が真面目に授業に取り組むことができる。

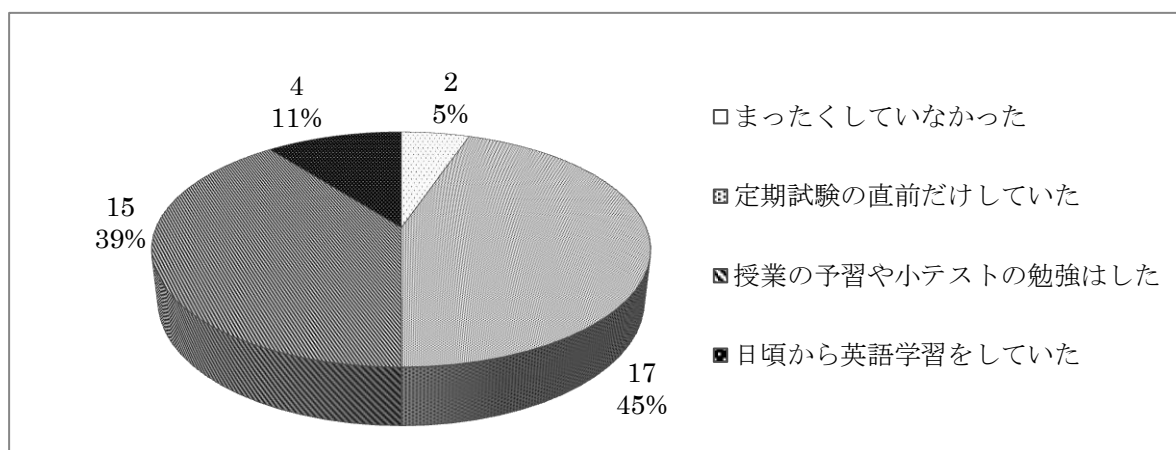
解決すべき課題

授業内のタスクには真面目に取り組むが，教師の問いかけに対して積極的に意見を発表できる生徒は少ない。また，小テストのための勉強や単語調べなどの授業外学習に対してはかなり消極的である。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・アンケート調査（6月）

「家庭での英語の学習状況はどうか。（1学期）」



日常的にあるいは授業の準備として英語の家庭学習をしている生徒はクラスの半数にとどまった。進路で英語を必要としない生徒もいるなかで，自律的な英語学習への意識づけが必要だと感じた。

・授業観察

ワークシートを使った作業など，必要な活動には真面目に取り組んでいるが，口頭でクラス全体に発問をしても，なかなか答えが返ってこない。積極的に声を上げにくい雰囲気ができてしまっているのかもしれない。

・授業ビデオ（教師の発話分析）

あらためて映像で確認すると，自分自身の発問のテンポが非常に速く，聞き取れなかった生徒や，理解にとまどう生徒も多かったのではないかと思った。また，質問自体も説明的でわかりにくいものが多かった。話すスピードを意識的に落とし，また質問を端的かつシンプルなものに工夫する必要がある。

リサーチ・クエスチョン

生徒が授業中に積極的に発話し，また自律的に英語学習に取り組むようになるにはどのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：・日常的に，あるいは授業の準備として英語の家庭学習に取り組む生徒がクラスの8割に達する。
- ・授業中の生徒の自発的な英語での発話が増える。

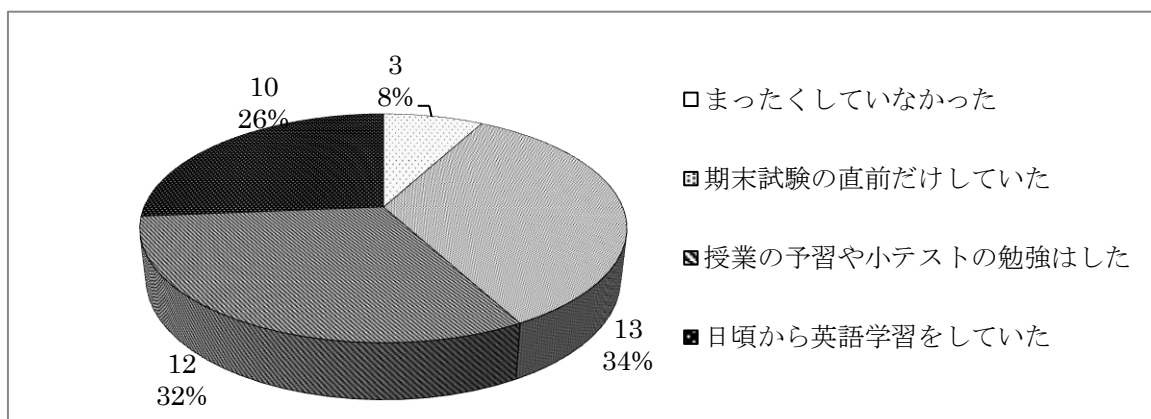
改善のための手だて

- 英語による発問のしかたを工夫すれば，生徒が質問の意味を理解しやすくなり，自発的な発話が増えるだろう。
 - ・発問の際の話すスピードに注意する。
 - ・より簡潔な言語形式を使って質問をする。
- ペアワークやグループワークをより多く行えば，生徒がより積極的に授業に参加するようになり，活動に必要な家庭学習にも積極的に取り組むようになるだろう。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・アンケート調査（12月）

「あなたの家での英語の学習状況はどうでしたか。（2学期）」



日常的にあるいは授業の準備として英語の家庭学習をしている生徒は6月のアンケートと比べると8%上昇したが，ノンパラメトリック検定（Wilcoxon の符号付き順位検定）にかけてみると，統計学的には有意な伸びは確認できなかった。

表1 (6月)	英語が 好きだ	英語が好き ではない	表2 (12月)	英語が 好きだ	英語が好き ではない
家庭学習をして いる	12	7	家庭学習をして いる	9	13
家庭学習をして いない	5	14	家庭学習をして いない	5	11

表1と表2は、6月と12月に実施したアンケートのなかの2項目の回答結果をクロス集計したものである。「英語が好きか」という質問について、「好きだ」「どちらかと言えば好きだ」の回答を「英語が好きだ」、「どちらかと言えば好きではない」「好きではない」を「英語が好きではない」とし、「英語の授業以外の学習に取り組んでいたか」という質問について、「日頃からしている」「授業の予習や小テストの勉強はする」と答えたものを「家庭学習をしている」、「テストの直前だけする」「まったくしていない」を「家庭学習をしていない」として、それぞれの回答の関連性を見てみることにした。

表1からは、英語が好きな生徒は家庭学習をしていて、英語が好きではない生徒は家庭学習をしていなかった傾向があることが読み取れる。英語が苦手な生徒が「勉強をする気が起きない」と言っているのを耳にしたことがある。逆に、英語が好きな生徒は授業外で英語に触れている様子が見えなかった。表1の結果をフィッシャーの正確確率検定を使って調べたところ、これらの回答パターンの関連性が確認できた ($p = 0.049 > 0.05$)。

しかし、表2では「英語が好きではない」けれども「家庭学習をしている」という生徒の数が多く見られた。「家庭学習をしている」生徒は少し増えたが「英語が好きだ」という生徒は減ってしまった。表面的な数からも明らかであるが、統計学的にも回答パターンの関連性は認められなかった。入試が近づいてきたことで、難解な英文に苦戦し、挫折感を感じながらも、やらなければならないという生徒の心理が影響しているのかもしれない。しかし、ペアワーク準備用の予習課題をまったくやらずに授業に臨む生徒の数は格段に減っていることから、授業の活動に多くの生徒が価値を見出しているといえるだろう。

・授業観察

授業中の雰囲気は回を重ねるごとによくなっていくように感じた。学習に対して積極的でなかった生徒が自分から発言や質問をしたり、机間指導の際に声をかけてくる生徒の数や頻度が増えたりもした。以前より指示を聞き取れた生徒が増え、少し難しい質問の場合には生徒同士が教え合うような雰囲気ができ、クラス全体が英語を聞いて理解することに慣れてきた。また、予習をしていないとパートナーが困ると考え、予習プリントを埋めてくる生徒が格段に増えた。教師から細かい説明をしなくても、ペアやグループ内で本文からヒントを探し、気づき、答えを導き出し、声を上げて喜んでいるという場面も多く見られた。

・授業ビデオ（発問に対する生徒の反応）

教師の発問に対して答えが返ってくるまでの時間が短くなった。また、問いかけに対して答えを近くの生徒と確認し合う様子も多く見られた。

教師の変化

- ・話し方の意識

授業のビデオを見返すことで、早口になる癖を自覚し、授業中に意識するようになった。特に英語での発問は、より簡単な英語で明瞭に行うようにした。

- ・ペアワーク、グループワークの活用

以前からペアやグループでの活動は重視して取り入れてきたが、今回は特に家庭学習の喚起を目的に、新出単語の確認をペアでさせるようにした。「教師が主導して正しい語彙知識を教え込む」という型を取り払うことで、生徒主体の時間が増え、教師が話している時間が減ったことも成果である。

また、今年度学校全体で取り組んでいる「アクティブラーニング」の形態の一つとして、グループワークを最大限活用し、生徒同士で道筋を見つけ、答えにたどり着くような授業構成を心がけた。このことで、6月の研究授業で指摘された「教師の話す時間が長い」という点が一挙に改善され、生徒から「わかった!」という声上がるのを直に聞くことができた。このことは教師としてのこの上ない喜びであった。

今後の課題（次の改善点など）

今回の授業改善では、「日常的あるいは授業の準備として英語の家庭学習に取り組む生徒がクラスの8割に達する」という目標は達成することができなかった。しかし、時間をかければまだまだ改善できるのではという手ごたえを感じることができた。今後、「家で準備してくることが必要かつ意味がある」と生徒が思えるような活動を授業のなかにさらに組み込む必要があるだろう。そして学習の成果・達成感を生徒に実感させることで、「英語が好き」と答える生徒をもっと増やしていきたい。

まとめ・感想

今回この研修に参加させていただいたおかげで、自らの授業を省察し改善する道筋を見つけることができた。「授業のビデオや客観的なデータから課題を発見し、授業を改善して成果を検証する」という一連の流れこそが、私にとって貴重な経験であった。今までいろいろな活動を授業のなかで試みて、試行錯誤のなかで自分自身が迷走しているのではないかという不安をつねに抱いていた。しかし、今回の研修の前半でリサーチ・クエスチョンを立てるにあたり、自分の授業を“**Problematization**”（問題化）することで、自分の授業で意識すべき点が明確になり、結果的に生徒の貴重な時間をより有効に活用することにつながったといえるだろう。

まだまだ私の授業改善は道半ばであるが、今回研修をともにした先生方の取組を励みに、次年度以降、新たな生徒たちと一緒によりよい授業を作っていけるよう、研さんを重ねていきたい。

生徒中心の言語活動による指導の活性化

科目名	リーディング	学年	3	形態	HR・習熟度・ 小集団
-----	--------	----	---	----	---

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

担当クラスは28名（女子16名・男子12名）と30名（女子7名・男子23名）の2クラスである。学年全体のおおむね7割の生徒が、大学・短大・専門学校に進学するが、AO入試や指定校・推薦入試によるものがほとんどである。調査対象である選択科目の「リーディング」は、進学で英語を必要としているか、英語が得意な生徒が対象であるので、授業中の活動への取組はよい。全体的に素直な生徒が多く、ペアワークや音読などの活動にも積極的に取り組み、協力的な雰囲気がある。

解決すべき課題

- ・ほとんどの生徒が意欲的で、積極的に授業に参加しているが、生徒自身が主体的に学習しているとはいえない。教師主導型の授業で、生徒が受け身になりがちである。
- ・生徒が英語でも日本語でも自己表現する機会があまりないので、主体的に自己表現する機会を持たせたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・第1回授業改善アンケート（7月実施 / 回答者数56）

生徒の英語学習への意識，英語への興味をあらためてアンケートで調べてみた。

1. 英語は好きですか。

非常に好き	まあまあ好き	少し嫌い	嫌い
15人(27%)	30人(54%)	10人(18%)	1人(2%)

2. 実社会での英語の必要性についてどのように思うか。

非常に必要	まあまあ必要	どちらかといえば不必要	不必要
31人(55%)	23人(41%)	2人(4%)	0人(0%)

3. 英語を話せるようになりたいですか。

自由に話したい	日常会話程度は話したい	あまりそう思わない	なりたくない
24人(43%)	32人(57%)	0人(0%)	0人(0%)

4. 授業中の「英語を使って自己表現する活動」（英作文など）について

たくさんしたい	まあしたい	あまりしたくない	したくない
11人(20%)	17人(30%)	24人(43%)	4人(7%)

5. 授業中の「英語を話す活動」(英会話)について

たくさんしたい	まあしたい	あまりしたくない	したくない
15人(27%)	29人(52%)	11人(20%)	1人(2%)

6. 授業中の「ペアワークやグループワーク」について

たくさんしたい	まあしたい	あまりしたくない	したくない
10人(18%)	31人(55%)	13人(23%)	2人(4%)

<分析と考察>

*英語が好きな生徒が8割を超えている。

*英語の必要性については9割を超える生徒が必要だと感じている。

*全員が英語を話せるようになりたいと考えている。

*授業中「英語を使って自己表現する活動」(英作文など)については半数の生徒がしたくないと回答している。

*英会話については約8割、ペアワーク・グループワークについては7割以上の生徒が参加したいと思っているが、参加したくないと回答した生徒もそれぞれ2割以上いる。

以上のことから、生徒のやる気は十分あると思われるので、授業の活動を工夫すればさらに生徒の力を伸ばすことができると感じた。

リサーチ・クエスチョン

生徒が授業を楽しみながら主体的に学習に取り組み、英語で自己表現できるようにするにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・主体的に学べたと実感する生徒が8割を超える。

・ペアで書いたり話したりする自己表現活動を楽しんでいる生徒が8割を超える。

・自己表現活動を有意義だと感じる生徒が8割を超える。

改善のための手だて

○ 授業中にペアワーク、グループワークの時間をより多く確保すれば、楽しく主体的に学習に取り組むことができるだろう。

・教科書の英文に関するプレリーディングの活動や内容理解のなかで英語による質問をし、ペアで答えを確認させる。

・学習した文法項目を使った自由作文をペアで発表させる。

・グループで教科書の英文の要旨を日本語でまとめて発表させる。

○ 学習した文法項目を使って継続的に自己表現の英文を作らせれば、英語を書くことに自信が持てるようになるだろう。

・特定の文法項目を使って最低1文を書かせるようにし、できればさらに1, 2文書き加えて内容を深めるよう指導する。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・生徒の取組状況

① ペアワーク，グループワーク

授業中に必ず取り入れることによって、授業に活気が出てきた。以前は受け身で消極的な生徒も積極的に意見を言うようになった。個人でわからないところをペアやグループで確認したあとで、全体発表を行ったので、自信を持って発表することができたようである。徐々に生徒も慣れて活動がスムーズに行えるようになった。

② 文法項目を使った自由英作文

各課で学習した文法項目を使い、生徒に自由に英文を作らせた。1人1文以上は必ず書くように伝え、ペアワークでのやりとりしたあと、全体発表させた。生徒が作る英文のなかにはとてもおもしろいものもあり、全体発表のときにはみな、関心を持って聞いていた。

・第2回授業改善アンケート（12月実施／回答者数49）

1. 自分の今年の英語の授業への参加状況はどうでしたか。

積極的に参加した	普通に参加した	あまり積極的ではなかった
20人(41%)	27人(55%)	2人(4%)

2. 今年の英語の授業において、主体的に英語を学べましたか。

主体的に学べた	以前と変わらない	あまり主体的ではなかった
31人(63%)	17人(35%)	1人(2%)

3. 授業中、「英語を使って自己表現する活動」（英作文など）をしてみてどうでしたか。

楽しかった	まあ楽しかった	あまり楽しくなかった	楽しくなかった
18人(37%)	27人(55%)	4人(8%)	0人(0%)

4. 授業中、「英語を話す活動」（英会話）をしてみてどうでしたか。

楽しかった	まあ楽しかった	あまり楽しくなかった	楽しくなかった
22人(45%)	23人(47%)	4人(8%)	0人(0%)

5. 授業中、「ペアワークやグループワーク」をしてみてどうでしたか。

楽しかった	まあ楽しかった	あまり楽しかった	楽しくなかった
24人(49%)	17人(35%)	7人(14%)	1人(2%)

6. 今年の英語の授業において、「英語を使って自己表現する活動」（3）や「英語を話す活動」（4）や「ペアワークやグループワーク」（5）などは有意義でしたか。

有意義だった	まあ有意義だった	あまり有意義ではなかった	有意義ではなかった
27人(55%)	21人(43%)	1人(2%)	0人(0%)

<分析と考察>

*授業への積極的参加を自覚していた生徒は約4割であった。

*主体的に学習したという自覚があった生徒は6割を超えた。

*英語を使って自己表現する活動や英語を話す活動を楽しいと感じた生徒は9割を超えた。

*今年の授業を受けてみて、授業が楽しく、有意義だと感じる生徒は9割を超えた。

7月のアンケートでは、「英語を使った自己表現活動」（英作文など）や「ペアワーク・グループワーク」などを積極的にしたくないという生徒がいたが、実際にやってみると楽しかったようである。生徒の感想のなかには「グループワークのおかげで楽しく学べたため、一人でやるより記憶に残り、自分の知識の向上にプラスになった」「グループで協力して答えを考える場面が多く、安心して取り組めた」「ペアワークによって、実際に相手に向かって英語で話す訓練は大切だとわかった」などペアワーク・グループワークに好意的な意見が多かった。

教師の変化

今年1年間かけて授業改善を行ってみて、何より変化したのが授業を受けているときの生徒の表情である。とても生き生きした彼らの表情を教壇から見ることができたことがうれしかった。今までの授業は、文法訳読が中心で、教師が一方的にエネルギーを使っているような状況であった。しかし、改善後の授業では、「以前よりも心に余裕がある」と感じられるようになった。生徒の活動を授業の中心に据えることによって、生徒の取組状況や理解度にも気を配れるようになり、あらためて、教師の役割は生徒の学習を促すことなのだということを実感できた。

今後の課題（次の改善点など）

改善の目安として、「主体的に学べた」と実感する生徒が8割を超えるようにするという目標を掲げたが、実際には6割を超えるにとどまった。今後はさらに生徒が主体的に学べる活動を取り入れていきたい。今回、今までの授業を根本から見直すことができ、ある程度改善することができたと自負しているが、これで終わりということではなく、科目の到達目標を生徒と共有しながら、生徒の自己表現活動を充実させることを中心に、今後も継続的に授業研究を行い、改善していきたいと思う。

まとめ・感想

今回の研修に参加するにあたり、最初は不安もあった。しかし、研修に参加し、国際言語文化アカデミアの先生がたから具体的かつ有効な授業改善の方法を学ぶにつれて、やってみようという意欲がわいてきた。実際、研修に参加して、とても有意義であったし、本当に楽しかった。これは、私の目指す授業と同じである。授業が生徒にとって「有意義でかつ楽しい」ものになるように今後も努力していきたいと思う。最後に、いつも楽しい研修を提供してくれた国際言語文化アカデミアの先生がたに感謝を申し上げたい。

自律的な語彙学習を促す授業実践

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	---------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

担当クラスは、29名（男子：9名，女子：20名）である。英語に苦手意識を持つ生徒が多く，授業中も進んで発言することは少ない。およそ8割の生徒が大学・短大・専門学校への進学を希望しているが，AO入試や指定校・一般推薦入試での受験を考えている。

解決すべき課題

新出語句が覚えられないために英文理解が進まない。自力で内容を理解しようとせず，日本語訳に頼る生徒が多い。また，基礎的な既習語の定着不足も理解をさまたげている。教科書語彙のテストでも低い正答率の状態が続いている。語彙学習への意欲を高め，より自律的に学習させることが必要である。

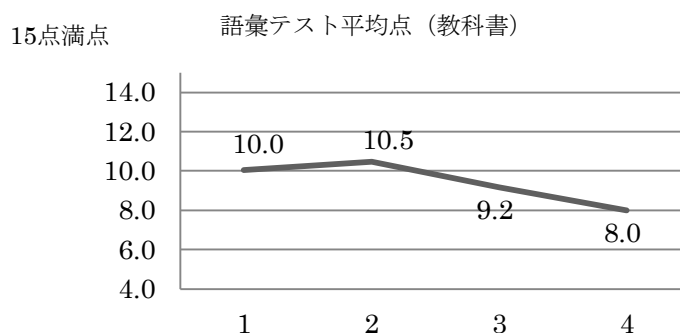
事前調査（アンケート，テストの結果，文献研究など）

・生徒の取組状況

フラッシュカードによる新出語句の導入では声を出して発音しているが，次の授業では語彙の再確認が必要となる。また，既習語彙が定着不足から英文理解に苦しむ生徒が多い。基礎的な語彙に多く触れさせながら，新しい語彙知識の増強のための活動や家庭学習課題に取り組みさせる必要がある。

・語彙テストの結果

① 教科書語彙テスト



平均点が下降傾向にあることがとても気になった。語彙の定着不足から，英文理解や活動に支障をきたし，学習意欲もさらに低下してしまう。それが苦手意識や英語嫌いを助長することは絶対に避けたい。語彙指導によりいっそうの改善が必要であることに気づかされた。

② 単語集に基づく語彙テスト

6月に実施した第1回のテスト（250語のなかから50語を出題）では，平均点が50点満点中20点，7割が50%未満の正答率であった。このテストは基礎的な語彙力を補い，教師がその定着の状況を把握して次の指導に役立てるために継続実施している。

③ 生徒の受容語彙サイズ

生徒は一般知識としてどれくらいの数の単語（の意味）を知っているかを把握するために、語彙サイズテスト（望月テスト）を7月に実施した。平均は1219語であったが、このテストの「中学校卒業時1000語程度」の目標値に達していない生徒もいた。新たな語彙知識を積み上げると同時に、基礎的な語彙に触れさせる必要があるとあらためて思った。

・事前アンケート「英語、語彙学習に対する生徒の意識」（7月：回答者28人）

1. 英語の好き嫌い ①非常に好き：10% ②まあまあ好き：32% ③少し嫌い：29% ④嫌い：29%
2. 一番伸ばしたい力 ①話す力：40% ②書く力：37% ③読む力：19% ④聞く力：4%
3. そのために一番必要な知識 ①文法：18% ②語彙・熟語：78% ③文化的な背景・知識：4%
4. 語彙学習法 ①書いて覚える：50% ②声に出して覚える：14% ③見るだけ：25% ④その他：11%
5. 語彙学習の楽しさ ①非常に楽しい：0% ②まあまあ楽しい：25% ③あまり楽しくない：46% ④まったく楽しくない：29%

一番伸ばしたい英語の技能として「話す」「書く」という「発信力」を挙げた生徒が8割近くおり、それを身につけるには語彙力が不足していることに生徒自身も気づいているようである。また、語彙の大切さは認識しているが、語彙学習は楽しめていないことがわかった。「発信力」を高めるには、英語を使う活動を増やす必要があるが、そのためにも基礎的な語彙の定着は不可欠であると考えた。

リサーチ・クエスチョン

生徒が自律的に語彙学習に取り組みながら、基礎的な語彙力を身につけられるようにするためにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：教科書語彙テストの得点率90%を超える生徒の割合がクラスの7割以上になる。

改善の手だて

- 新出単語の読み方に語呂合わせを用いれば、語彙学習に興味を持てるようになるだろう。
 - ・プレゼンテーションスライドで視覚的イメージを与えながら新出語句を導入する。
 - ・語呂合わせを使って、発音練習をさせ、ペアワーク等で定着を図る。
- 語彙にかかわる家庭学習課題を取り組みやすくやりのあるものにすれば、自律的に語彙学習に取り組むようになるだろう。
 - ・『JACET8000』の2000語レベルを基準に受容／発表語彙に分け、発表語彙を使った英作文を家庭学習課題にする。
 - ・オリジナルの語呂合わせを家庭学習課題にし、グループ内やクラスで発表させる。
- 教科書よりも語彙レベルがやさしめの英文を読ませれば、基礎的な語彙知識が定着するだろう。
 - ・Oxford Reading Tree (ORT)の英文を多読教材として使い、基礎的な語彙に出会う機会を増やす。
 - ・プレ／ポストリーディングの活動として、ORT教材の挿し絵について英語でやりとりをする。
 - ・速読教材を読ませることで、基礎的な語彙の理解を確認させる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・授業のなかでの生徒の取組状況

*ワークシートに語彙関連のイラストを描いたり、関連情報をメモしたりするなど、記憶に残るよ

うな工夫を生徒自身が楽しみながら行うようになった。

*休み時間などでも語呂で覚えた語彙を確認し合う姿が見られ、語彙学習への関心の高まりがうかがえた。テストでの成果に大きく結びつくことに気づき、少しずつ自信を持ち始めたようだ。

*多読、速読の活動については、教科書の進度を気にかける生徒もいたが、自主的に語句の意味を調べたり、教材の貸し出しを希望する生徒が出てきたりと、積極的な取組が見られた。

・語彙テストの結果

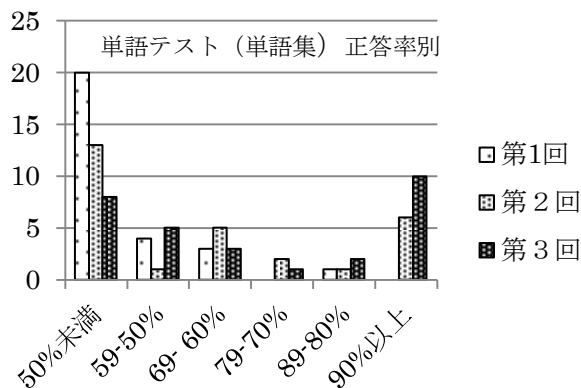
① 教科書語彙テスト

語呂合わせによる語彙学習を始めた第5回の得点が大幅に伸び、その後も徐々にではあるが正答率が上昇した。第12回には正答率90%以上の生徒が8割を超え、改善の目標を達成した。



② 単語集に基づく語彙テスト

正答率50%未満の生徒の数が順調に減ってきていることは、語彙学習への意識を高めることができた一つの成果かもしれない。しかし、単語集の語彙は依然教科書の英文とはかかわりが薄いため、今後の活用法を再検討する必要があるだろう。



③ 語彙サイズテストの語彙数の変化

平均語彙サイズは1219語から1332語へ、5か月間で100語程度伸びている。今後も随時測定することで、生徒の語彙学習への意欲を持続させるためのツールにしたい。

・事後アンケート (1月: 回答者28人)

- 英語の好き嫌い ①とても好きになった: 7% ②好きになった: 61% ③変わらない: 32% ④嫌いになった: 0%
- 一番大切だと感じている知識 ①単語力: 68% ②文法力: 18% ③読解力: 11% ④文化的背景・知識: 3%
- 語呂合わせの単語練習 ①とても楽しかった: 32% ②楽しかった: 54% ③あまり楽しくなかった: 11% ④楽しくなかった: 3%

4. スライドによる語彙の導入 ①とてもわかりやすかった:21% ②わかった:47% ③あまりわからなかった:25% ④わからなかった:7%
5. 多読・速読の振り返り ①単語が大事:75% ②文法・構文が大事:14% ③問題なく読み切った:0% ④読むのが遅い:11%
6. 授業中の語彙学習(複数可) ①楽しくなった:14% ②興味がわいてきた:21% ③自主的に学習したい:11% ④覚えやすくなった:4% ⑤大切に気づいた:32% ⑥使えるようになりたい:25% ⑦楽しくなかった:11%
7. 語彙学習への取組の変化 ①自主的に学習するようになった:11% ②授業や課題はしっかりやった:36% ③特に変わらない:43% ④あまり時間をかけていない:10%

7 割近い生徒が今回の授業改善によって「英語が好きになった」と感じてくれたことがうれしく、励みになった。授業中の活動についても多くの生徒が肯定的にとらえてくれていたようである。一方、家庭学習を含めた単語への取組については改善の余地があり、自律的学習を促す手だてを今後も考えていく必要があることがわかった。生徒が家庭学習で習得した語彙を積極的に使える場面を増やし、より前向きに活動できるような雰囲気を作っていきたい。

教師の変化

- ・アンケートで生徒の意識や気持ちを確認することの大切さを認識した。
- ・客観的なデータに基づいて、改善策を講じていく必要性を知った。
- ・生徒と一緒に授業改善に取り組めたことへの充実感を得られた。

今後の課題(次の改善点など)

- ・基礎的な語彙の定着, 使用を目指した言語活動や家庭学習課題を充実させたい。
- ・暗記用の語呂合わせとは別に, 正しい発音, アクセントを身につけさせるための指導を考えたい。
- ・多読活動を続けながら, 語彙知識を確認させるとともに, 英語を読む楽しさや自信を感じさせたい。

まとめ・感想

生徒たちが教師である自分を信じて新しい取組についてきてくれたことが大きな支えとなった。これまで、多忙であることを言い訳にし、生徒の側に立った授業改善ができていなかったのではないかと自責の念にかられている。本研修は、教えることの楽しさや英語に触れる喜びをつねに感じさせてくれた。学んだことを活用しながら、生徒とともに授業を作り上げることができた。この経験を忘れることなく、自己研さんに努めていきたい。最後に、温かい雰囲気のなかで熱心にご指導いただいたアカデミアの先生がたと多くの励ましやアイデアをくださった他の受講者の先生がたに感謝を申し上げたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

- 相澤一美・望月正道(編). (2012). 『英語語彙指導の実践アイデア集』大修館書店
- 相澤一美・石川慎一郎・村田 年(編). (2014). 『JACET 8000英単語』桐原書店
- 金谷 憲・阿野幸一・久保野雅史・高山芳樹(編). (2013). 『英語授業ハンドブック』大修館書店
- 藤井秀男. (2004). 『英単語呂源 (1)』エコー・セザム
- Nation, I.S.P. (2009). *Teaching Vocabulary: Strategies and Techniques*. CENGAGE Learning.
- Day, R. R. & Bamford, J. (1998). *Extensive Reading in the Second Language Classroom*. CUP.

例文とペアワークを工夫した授業活性化の試み

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	---------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は1年生1クラス39名（男子19名，女子20名）である。英語に苦手意識を持つ生徒が多く，定期テストの結果などからも基本的な語彙・文法知識を欠いている状況がうかがえる。クラスの雰囲気は静かであり，英語を声に出して読んだり，積極的に相手とコミュニケーションを取ったりするような意欲があまり感じられない。実際にこのような活動は苦手であろうと思われる。

解決すべき課題

- ・多くの生徒が，中学校既習のものをはじめとする基礎的な語彙や文法にかかわる学習に積極的に取り組んでいない。
- ・多くの生徒が，新出の語彙・文法の定着のための授業中の言語活動に積極的に参加していない。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・生徒の英語力の状況

基礎レベルの語彙を補完する目的で，教科書で扱った単語の他に，1学年共通で取り組む単語リストを使って語彙学習をさせている。中学校既習の語から始まり，段階的に高校で学習する基礎的な語をカバーしている。生徒は，授業で発音の確認を行った後，家庭学習課題としてつづりの練習をしていくことになっている。1学期中間テストにリストからの語を出題したところ，得点率のクラス平均は61.3%であった。文法については，初歩的な疑問文・否定文の作り方も理解できていない生徒が目立つ。

- ・生徒の授業への取組状況

授業で学習した語彙・文法の定着を図るための言語活動への参加意欲が低い。黒板を見てノートをとることなどはきちんとできるものの，既習事項の確認のための問題演習やペアワークなどでは，取組が思わしくない生徒が目につく。

リサーチ・クエスチョン

基礎的な語彙力を高めながら学習活動に積極的に取り組ませるためにはどのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
- ・語彙学習の効果を肯定的にとらえる生徒の割合が 8 割以上になる。
 - ・定期テストにおける語彙に関する問題の得点平均が上昇する
 - ・授業中の観察でペアワークに意欲的に参加する様子が見られる。

改善のための手だて

- 学習語彙リストに、生徒の生活に関わる話題の例文を組み込めば、学習意欲と定着が高まるだろう。
 - ・ALT の協力を得ながら、従来の語彙リストに生徒にとって身近な話題の例文を付ける。
 - ・例文には 1 人称を使用し、内容が自分にあてはまるものにチェックを入れさせ、個人化要素を付与する。
 - ・チェックにしたがって、生徒の名前を入れた例文のリストとして再編集し、現実感を高めるようにする（プライバシー保護に十分配慮する）。
(例) <be good at> I am good at dancing.
→ Miho is good at dancing.
- 生徒の興味がわくようなペアワークを行えば、積極的に発話するようになるだろう。
 - ・席順でペアを決めるのではなく、復習を兼ねた言語活動を通してペアを決める。
(例) カードを見せ合わずに、「新出単語と(やさしい英語による)その単語の定義」「2 分割した教科書中の英文の前半と後半」などの組合せの片方を持った相手を探し、ペアを組む。
 - ・自分のことについて話し合ったり、書いたものを読み合ったりする活動をさせる。
 - ・会話や作文のなかで、学習した文法項目が使えるように内容を工夫する。
 - ・ワークシートには生徒の興味を引くようなイラストを載せる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・定期テストの語彙問題（つづりと訳語）の得点平均の推移

	1 回目（5 月）	2 回目（7 月）	3 回目（10 月）	4 回目（12 月）
平均点 (30 点満点)	18.4	20.3	9.6	14.6

平均点が低かった 3 回目と比べてかなり難しいと思われた 4 回目のテストにおいて、クラス平均点を上昇させることができた。

- ・アンケート調査—例文つき語彙リストの効果（12 月実施：回答数 37）

この取組が有効だったと思いますか。

	思う	少し思う	あまり思わない	思わない
人数 (%)	23 人 (62.2%)	10 人 (27.0%)	4 人 (10.8%)	0 人 (0.0%)

感想を自由に書いてください（複数回答があった内容に限定）。

- * 単語（熟語）がどのような状況で使われるかがわかった。
- * 単語（熟語）が日常生活と結びついて覚えやすかった。
- * 友だちの行動と結びついて興味がわき、単語（熟語）を覚えようと思った。
- * おもしろかった。
- * 今まであまり話さなかったクラスメイトと話すきっかけができてよかった。

新しい語彙リストの学習効果について、「有効だったと思う／少し思う」と回答した生徒は 89.2% になり、改善の目標を達成することができた。また感想からは、この取組が、新たな友人づくりにもつながったことがうかがわれ、コミュニケーションが苦手な生徒にプラスの効果をもたらすという思いがけない収穫もあった。

・ 生徒の活動の取組状況

生徒の様子を観察すると、以前よりも積極的に活動する様子が認められた。予想通り「自分について表現する内容」「自分の興味のあることに関して書かれた内容」にはすすんで取り組み、特に、星座占い、血液型占い、自己分析と職業診断、今までに見た映画のタイトル、などのテーマが生徒の興味を引いたようである。特に星座・血液型占いを使った活動は、教室を自由に歩き回って同じタイプの相手を探して、占いが書かれた英文を協力し合って読むといったものでやや難しめの内容であったが、ペアで協力して英文を読もうとする意欲がうかがえた。「占い」については、その記述が必ずしも真実ではないこと、それによって相手や自分に偏見を持つてはいけないことをくり返し指導した。これらの言語活動について、生徒たちからは次のような声が聞かれた。

- * ペアを自分で探すのは楽しかった。
- * 自分一人だけの勉強の時間も必要だと思うが、相手と一緒に何かを学ぶことで勉強しようという気持ちが増した気がする。
- * 少しだけ英語が使えた気がした。
- * もう少し単語がわかれば英語を読めると思った。

最後の「～すれば、～ができる」、という課題意識は次の学習への意欲につながるものであり、大切にしたいと考えている。

教師の変化

今回のリサーチを通して、以前よりも授業中に生徒に英語を使わせる機会を増やす手だてを考えるようになった。また実際に英語を使う活動に入るときは、生徒に何をするのかをはっきり示すこと、またできるだけ説明は短くすることを心がけた。またそのためには、効果的なデモンストレーションが成否の鍵を握っていることもわかった。また、もちろんこれまでも生徒の理解度を確かめたり、意欲的に学習に向わせたりするような働きかけは重視してきたが、観察や直感だけでなく、アンケートで生徒の意識を確認することの大切さを理解することができた。生徒のニーズを正しく理解することが次の授業改善への第一歩につながることを再認識した。

今後の課題（次の改善点など）

今回は生徒へのアンケートをもとに、「語彙指導」「ペアワーク」という 2 本の柱を立てて授業改善を行ったが、基礎文法力の構築や読解力の向上への働きかけも必要であろう。また、今後は授業にグループワークや発表形式の内容を取り入れたりすることも検討し、英語のいろいろな技能を向上させていきたい。

まとめ・感想

今回のリサーチを通し、生徒にどのような力を身につけさせたいか、何ができるようになってほしいのか、という視点の大切さを改めて意識することができた。また、これまで以上に英語教育関係の文献を積極的に活用し、結果として多くの本からたくさんのことを学ぶことができた。

授業改善にあたって参考にした資料等

木宮暁子.(2007).『英語 3 文日記 ドリル 4 2』明治図書

川村光一.(2014).『生徒熱中 英語力が抜群に伸びるコミュニケーション活動&ゲーム 中学 3 年』明治図書

佐藤一嘉.(2012).『新しい英文法指導アイデアワーク 中学 3 年』明治図書

阿原成光.(2003).『英語の授業づくりアイデアブック 3 中学 3 年導入と展開』三友社出版

文法知識の定着を目指した言語活動の工夫

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象生徒は2年生3クラス（男子53名，女子64名）である。落ち着きがあってまじめなクラスや、活発で元気なクラス，グループ学習になると元気に活動し出すクラスとさまざまなクラスがあるが，全体的に英語に対して苦手意識を持つ生徒が多く，その多くが中学校の段階でつまづいた経験があるようである。3分の1が4年制大学への進学希望だが，そのほとんどは指定校推薦での進学を目指している。

解決すべき課題

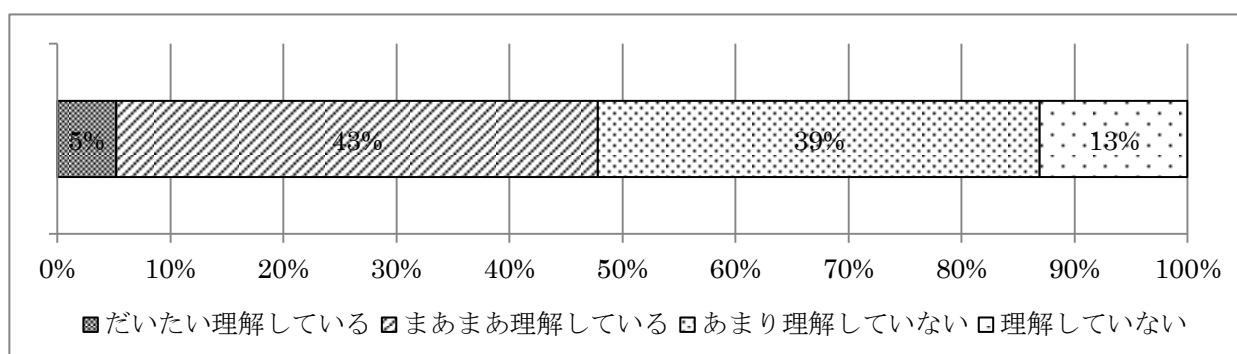
- ・生徒が英語を使う時間が少ない。
- ・基本的な文法事項が定着していない。
- ・英語に対する苦手意識が強い生徒が多い。
- ・文法問題が多すぎると飽きてしまう，あきらめて取り組まないという生徒が少なからずいる。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・第1回英検3級テストの結果（9月実施：受験者数114）

文法の知識を含む中学校レベルの英語の力がどれくらい身についているかを調べるために，英検3級の筆記問題25問を出題した。1問1点とした平均点は15.0点で，3級合格点とされる60%以上の正答率に達している生徒は65名（全体の59%）であった。

- ・文法事項の理解度（7月アンケート：回答数115）



この結果から，「だいたい理解している」「まあまあ理解している」をあわせると約48%の生徒がこれまでの学習した文法事項を理解していると感じていることがわかるが，半数以上の生徒が理解していないと感じていた。

リサーチ・クエスチョン

文法知識の理解を実感させながら基礎的な英語の力を伸ばすにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・英検 3 級の筆記問題（大問 1～3）で、6 割以上正解する生徒が全体の 8 割以上になる。

・アンケートで、既習の文法事項を「理解している」と回答する生徒が 7 割以上になる。

改善のための手だて

- 言語活動をとまなう文法学習に取り組みせれば、英語を使いながら学ぶことで文法知識の理解が深まるだろう。
 - ・現在完了、分詞構文などを取り上げ、リスニングやリーディングのグループワークのなかで、文法事項の形式や意味、用法に気づかせる。
- 授業で扱う文法の演習問題を精選すれば、飽きさせずに取り組ませることができ、結果的に定着が高まるだろう。
 - ・文法説明の後、参考書や問題集から 20 問程度の練習問題を選んで与えていたが、教科書内容に準拠した少数の問題を使って練習させる。
- 授業の進め方を改善すれば、文法知識定着のための言語活動の時間を確保できるだろう。
 - ・次の①～③の手法を活用して効率的なテキスト理解を促し、言語活動にあてる時間を増やす。
 - ① 内容理解の前段階として概要理解活動を取り入れる
 - ② 重要なフレーズに線を引き内容を確認する
 - ③ ほとんど訳読をせずに、内容を整理させる

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・言語活動とあわせて行う文法指導について

活動内容はすこし難しかったようだが、生徒からは、分詞構文の意味の違いに気づくことができたことで「わかった」や「なるほど」などの声が聞かれ、「もっとこういう活動をしたい」というコメントもあった。しかし、生徒が英語を使うということに関しては、不十分であったと思う。実際に、アンケート（後述）の自由記述には「英語を話す機会がもっとほしい」というコメントも見られた。

・精選した文法問題による演習について

以前は問題数が多くてあきらめてしまう生徒や、教科書内容と関連がなくテストに直接かかわらない問題にやる価値を見いだせない生徒がいたが、問題の質と量を変えることでより多くの生徒が積極的に取り組むようになった。

・言語活動の時間を確保するための授業スタイルの変更について

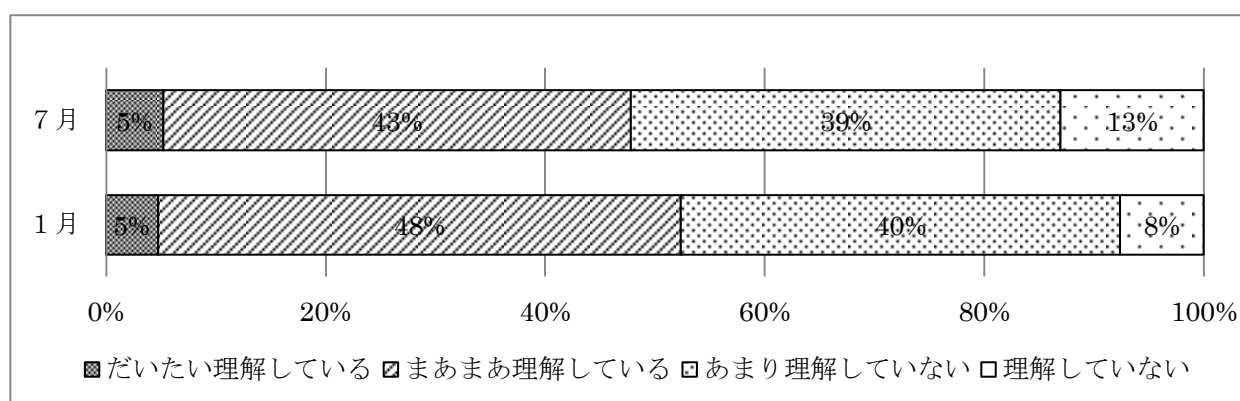
授業改善を始めた当初のアンケートでは「授業のやり方を変えないでほしい」という意見が少なからずあったが、1月のアンケートでは、授業の進め方に対してマイナス意見は上がってこなかった。これまでも生徒の「変化に対する抵抗感」を感じていたので心配だったが、活動の内容・目的・効果を丁寧に説明し、無理なく徐々に導入したことで、その抵抗感を軽減することができたのではないかと思う。

・第2回英検3級テストの結果（1月実施：受験者数 110）

	第1回	第2回
平均点	15.0点	14.4点
6割以上得点した生徒の割合（数）	59%（65人）	55%（57人）

平均点、6割以上得点した生徒の割合ともに下がってしまった。3クラスそれぞれのクラスの様子を見ると、1クラスでは41%から47%と割合が高くなったが、他の2クラスは72%から69%、73%から51%と大きく下がってしまったクラスもあり、「6割以上正解する生徒数が全体の8割以上になる」という目標を達成できなかった。目標を達成できなかったもっとも大きな原因としては、時間を有効に使うことができず、改善の手だてを十分に実行できなかったことが挙げられる。また、第2回では別のテストの直後に実施したため、「またテストか」という声も聞かれ、取組が消極的だったことが考えられる。

・文法知識の理解度（1月アンケート：回答数 105）



「だいたい理解している」「まあまあ理解している」を合わせて53%の生徒がこれまで学習した文法事項を理解していると感じていることがわかった。7月の結果と比べると48%から53%と割合自体は増加したが、目標である7割以上を達成することはできなかった。

教師の変化

指導案にその日の授業のよかった点と反省すべき点を記録するようになった。毎時間の授業の振り返りをこまめに行い、次の授業に生かすよう心がけた。またコミュニケーション型文法指導に関する書籍を読み、教材研究を行い、以前より授業の準備に使う時間が増えた。授業の空き時間だけでなく入浴中などにも授業について考え、イメージすることが普通になってきた。はじめは新しいことを授業で試してみることに恐怖感があったが、今は生徒がどのような反応するかなどを想像しながらチャレンジすることに楽しさを感じ始めている。

今後の課題（次の改善点など）

言語活動とあわせた文法指導について、授業中の個々の活動だけでなく家庭学習課題も含めながら、さらに単元指導計画のなかでの位置づけも視野に入れて、その内容や方法を考え直していきたい。今回、言語活動が十分に実施できなかった原因として、高校で新しく学習する文法事項を使った、生徒が取り

組めそうな活動をなかなか見つけられなかったことがある。文献(卯城編,2014;佐藤編,2012)を参考にしていくなかやってみようとしたが、実践例を実際に行うのは思いのほか難しく、生徒の実態に合わせて工夫する必要がある、実践する際にかなり苦戦した。レベル別のESL教材なども参考にしながら、生徒の力に合わせた言語活動を取り入れ、英語が苦手な生徒でも楽しさ・達成感を得られるような授業ができるよう努力していきたい。

まとめ・感想

アドヴァンスト研修に参加する前までは、生徒の「変化への抵抗感」を感じ、授業改善にあまり積極的に取り組めずにいた。これまで他の研修で学んだことを実際に授業で取り入れようとしたことが何度もあったが、日常のいろいろな仕事に追われるなかで、どこか自分で何かを言い訳にしながらあきらめてきたところがあった。今振り返ると、自分自身のなかにも生徒と同じく変化に対する恐れがあったと思う。しかし今回はアカデミアの先生方の厳しく温かいご指導のおかげで失敗してもいいから一歩踏み出してみようと思えた。改善の目安とした目標を達成することはできなかったが、生徒がアンケートに寄せてくれた正直な回答を見ると、彼らが求めていることが実際の数字に表れていたり、意外なところが変化していたりして、分析するのが楽しく、アンケートの有益さを知ることができた。また生徒が楽しむ授業、笑顔が見られる授業をすることの大切さをあらためて感じた。指導に自信が持てないまま授業をすると、それが生徒にも伝わりうまく進まないことがあった。逆に生徒が楽しそうに笑顔になった場面を考えてみると、自分自身もわくわくしながら取り組んでいたことに気がついた。こちらが楽しんで一生懸命に伝えようとする生徒もそれに応えてくれた。そんな生徒たちの貴重な時間である1時間1時間の授業を無駄にしないように、またこの経験を忘れずにアクション・リサーチを続けていこうと思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

卯城祐司(編著).(2014).『英語で教える英文法―場面で導入、活動で理解』 研究社出版

佐藤一嘉(編著).(2012).『フォーカス・オン・フォームでできる！新しい英文法指導アイデアワーク高校』
明治図書

佐野正之(編著).(2009).『はじめてのアクション・リサーチ―英語の授業を改善するために』 大修館書店

「読解とは何か」という問いから始めた授業改善

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	----------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2クラス，計80名である。クラスの雰囲気は対照的であり，一方はにぎやかで授業へ積極的に参加し，教師の問いかけに対し反応を示す生徒が多数いるが，もう一方のクラスの生徒は比較のおとなしく，落ち着いて学習活動に取り組む態度をもった生徒が多い。多くの生徒は大学進学を目標としているが，学習事項の定着や英語の基礎学力面で課題がある。

解決すべき課題

教科書英文の読解を文法訳読式で行うと，それまで活動的であった生徒が，内容理解の場面になると退屈してしまう。授業が沈滞した雰囲気になり，生徒が英文を理解しているという手ごたえが教師の側にも感じられない。生徒に授業を楽しく感じてもらうと同時に，わかりやすい英文理解活動の工夫をどうしたらよいかつねづね考えていた。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・アンケート（7月：回答数75）

生徒の授業に対する理解度や，各活動への取組をみるため，アンケートを行った。

1. 授業は楽しいですか？

楽しい	どちらかといえば楽しい	どちらかといえばつまらない	つまらない
33人 (44.0%)	33人 (44.0%)	6人 (8.0%)	3人 (4.0%)

2. 授業は理解できていますか？

だいたい理解できている	まあまあ理解できている	あまり理解できていない	理解できていない
21人 (28.0%)	47人 (62.7%)	5人 (6.7%)	2人 (2.7%)

3. 授業について頑張って取り組んでいますか？

よく頑張っている	まあまあ頑張っている	あまり頑張れていない	頑張れていない
12人 (16.0%)	47人 (62.7%)	14人 (18.7%)	2人 (2.7%)

4. ペアワークは好きですか？

わりと好きだ	嫌ではない	あまり好きではない	嫌いだ
34人 (45.3%)	38人 (50.7%)	3人 (4.0%)	0人 (0.0%)

5. グループワークは好きですか？

わりと好きだ	嫌ではない	あまり好きではない	嫌いだ
34人 (45.3%)	38人 (50.7%)	3人 (4.0%)	0人 (0.0%)

授業は楽しく、理解できていると感じている生徒が大半であるとわかった。しかし、授業中の生徒の様子を見ていると、本当に楽しく感じているのか、どの程度授業内容を理解できているのかについて、アンケートの結果と矛盾する様子も感じられた。

リサーチ・クエスチョン

英文理解活動において、生徒がより積極的に授業に取り組むようになるには、どのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
・「授業に頑張って取り組んでいる」と実感する生徒の割合が増加する。
・英文理解活動に意欲的に参加していると認められる生徒が増加する。

改善のための手だて

- オーラルイントロダクションにより英文の内容を導入すれば、生徒の注意が語彙・文法よりも本文の内容に向けられ、内容理解が深まるだろう。
 - ・ パートごとにオーラルイントロダクションを行い、本文に書かれている内容を予想させるなど、生徒が授業内容に興味を持てるようにする。
- 英文理解活動にペアワーク、グループワークを多く取り入れ、助け合いながら共に学ぶ経験をすれば、理解が深まり活動に対する達成感が高まるだろう。
 - ・ 内容把握のための英問英答を、個人で取り組ませる代わりに、ペアワークでの会話練習にアレンジして行う。
 - ・ 登場人物の心情の変化や成長に焦点をあてた質問についてグループで話し合い、その後発表させる。
- ワークシートを工夫すれば、英文の流れの全体像を理解しやすくなり、英文理解活動への生徒の積極的参加を促すだろう。
 - ・ 本文読解パートのタスクを充実させ、本文の内容について自分の意見をまとめる設問や、登場人物の心情の変化を問う設問など、単なる日本語訳を求める活動にならないよう工夫する。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・ アンケート（12月：回答数 76）

生徒の授業に対する理解度や、各活動への取組の変化をみるため、7月と同様のアンケートを行った。（設問 1,4,5 については回答数がそれぞれ 74, 75, 74 であるため割合の合計は 100%とまらない）

1. 授業は楽しいですか？

楽しい	どちらかといえば楽しい	どちらかといえばつまらない	つまらない
20人 (26.3%)	37人 (48.7%)	17人 (22.4%)	0人 (0.0%)

2. 授業は理解できていますか？

だいたい理解できている	まあまあ理解できている	あまり理解できていない	理解できていない
15人 (19.7%)	51人 (67.1%)	10人 (13.2%)	0人 (0.0%)

3. 授業について頑張って取り組んでいますか？

よく頑張っている	まあまあ頑張っている	あまり頑張れていない	頑張れていない
9人 (11.8%)	42人 (55.3%)	21人 (27.6%)	4人 (5.3%)

4. ペアワークは好きですか？

わりと好きだ	嫌ではない	あまり好きではない	嫌いだ
18人 (23.7%)	41人 (53.9%)	13人 (17.1%)	3人 (3.9%)

5. グループワークは好きですか？

わりと好きだ	嫌ではない	あまり好きではない	嫌いだ
34人 (44.7%)	36人 (47.4%)	3人 (3.9%)	1人 (1.3%)

7月のデータと比較してみると、各項目とも結果は後退してしまった。改善の目安とした「授業についてよく／まあまあ頑張って取り組んでいる」と感じる生徒の割合については、78.7%から67.1%に下がっている。アンケートの自由記述欄には、「プリントを使用する授業より、ノートを使用するほうが、文章をたくさん書くので覚えやすかった」「『絵を見て内容を予想してみよう』などの活動をするよりも、もっと他の活動に時間をあてたほうがよかった」などの意見がいくつかあり、新たに取り入れた授業活動について、生徒の賛同を得ていないと思われる点があることがわかった。また、ペアワーク、グループワークがあまり好きではない生徒が一定数おり、その原因について適切な手だてを講じないまま活動を続けた結果、より否定的な印象を持つ生徒が増える結果になったとも考えられる。この点については、さらに調査・分析する必要を感じた。

・生徒の取組状況の変化

- *写真・イラストを提示したりすることにより、生徒は毎回楽しんで取り組んでいるようであった。学習内容を大まかに先取りし、背景知識を学ぶことがその後の内容理解を助けている様子が、授業中の教師と生徒とのやりとりからも推察された。
- *イラストや図を盛り込むことにより、視覚的にわかりやすいワークシート作成を心がけた結果、生徒はおおむね積極的に取り組んでいた。タスクをワークシートに段階的に設けることで、英文理解活動に無理なく取り組むことができ、英文全体の流れをより把握しやすいようであった。

課題が残った活動もあることがアンケートからわかったが、少なくとも以前の文法訳読式の授業で見られた退屈な様子や沈滞した雰囲気は改善されたことから、より多くの生徒が意欲的に英文理解の活動に取り組んでいたと思われる。

教師の変化

まず、「読解とは何か」を考えることから始まり、「この本文のなかでもっとも伝えたいことは何か」を研究することに多くの時間を費やした。また各パートでの活動を考えるにあたり、「どのような活動を行えば理解度が高まるか」「この活動は生徒のレベルに合っているか」を自問しながら授業を組み立てていった。教師が「何を教えたいか」だけでなく、生徒が「何を教わりたいか」をしっかりと認識したうえで、パートごとやレッスンごとの目標を設定し、中・長期的な目線で授業を組み立てることが少しできるようになり、またその楽しさを認識することができた。

今後の課題（次の改善点など）

アンケート結果では大きな改善をみることはできなかった。授業内容が進むにつれ、内容が難しくなることを加味しても、少しでもよい結果が出なかったことは、残念である。しかし、ペアワーク、グループワークを楽しそうに行っている生徒もおり、訳読式の授業内容を最小限に抑えることができ、生徒が退屈そうにしていない姿をより頻繁に見ることができたことは、数字には現れない大きな収穫であった。今後も、自分の授業の見直しを続け、「教師主体」から「生徒主体」への授業の変換を進めていきたい。

まとめ・感想

この研修を受けるまでは、自分の授業をもっとよくしたい、もっと生徒に活動させたいと思っていても、日々の多忙感を理由に実行に移すことができないでいた。この研修を受講することができると決まったときも、そのような余裕があるかどうか、正直不安であった。

この1年間の研修を受け続けることは大変であったが、毎回の研修で、他校の先生がたと悩みを共有したり、教授法についてのヒントをいただいたりしながら、少しずつ成長することができた。また、もっとも大きな収穫であったことは、私だけでなくどの先生も悩みを抱え、その解決のために日々努力をしているということを知ることができたことである。

最後に、いつも楽しい研修にしてくださり、また自分のことのように親身になって相談に乗ってくださったアカデミアの先生がたと、ともにこの研修に参加した先生がたとに感謝申し上げたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

金谷 憲・青野 保・太田 洋・馬場哲生・柳瀬陽介.(2009).『英語授業ハンドブック』大修館書店

言い換え・要約・意見発表を活用したリーディング指導

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	---------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は1学年2クラス（79名：男子35名，女子44名）である。1クラスは明るく活発で，男女の仲がよい。もう1クラスは，ホームルーム担任のクラスであり，おとなしくやや消極的ではあるが，ペアワークやグループワークなどには積極的に取り組む姿勢が見られる。全体で約8割の生徒が，大学・短大などの上級学校への進学を希望している。

解決すべき課題

英文を読む時に，日本語訳を介さないと「理解できた」と感じられない生徒が多く，時間を制限して読ませても読み終えることができない。また，多くの生徒が，日本語訳以外の，内容に関する質問に答えられず，内容を深く理解しているかどうか疑問である。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第1回授業改善アンケート(抜粋)[9月実施：回答人数 計78名]

- 1：楽しい／だいたい理解できた／ぜひ伸ばしたい／かなり効果的だ／すらすら読めた(英検)
- 2：どちらかといえば楽しい／まあまあ理解できた／できれば伸ばしたい／まあまあ効果的だ／抵抗なく読めた(英検)
- 3：どちらかといえばつまらない／あまり理解できなかった／それほど伸ばしたくない／あまり効果的ではない／なんとか読めた(英検)
- 4：つまらない／理解できなかった／伸ばす必要を感じない／まったく効果的ではない／思うように読めなかった(英検)

	1	2	3	4
授業の楽しさ	11名 (14.1%)	45名 (57.7%)	17名 (21.8%)	5名 (6.4%)
学習内容	19名 (24.4%)	52名 (66.7%)	6名 (7.7%)	1名 (1.3%)
聞く力の必要性	55名 (70.5%)	20名 (25.6%)	2名 (2.6%)	1名 (1.3%)
話す力の必要性	53名 (67.9%)	20名 (25.6%)	4名 (5.1%)	1名 (1.3%)
読む力の必要性	51名 (65.4%)	24名 (30.8%)	2名 (2.6%)	1名 (1.3%)
書く力の必要性	52名 (66.7%)	23名 (29.5%)	2名 (2.6%)	1名 (1.3%)
日本語に訳す活動	25名 (32.1%)	48名 (61.5%)	3名 (3.8%)	2名 (2.6%)
内容理解(英検)	12名 (15.4%)	40名 (51.3%)	22名 (28.2%)	4名 (5.1%)
読みの速さ(英検)	8名 (10.3%)	28名 (35.9%)	37名 (47.4%)	5名 (6.4%)

コミュニケーション活動を十分に行えなかったこともあり、「授業の楽しさ」に関しては、3・4 合わせて 30%近い生徒が「つまらない」と感じている。4 技能の必要性を強く感じている生徒は多く、すべての技能において 90%を超えている。その他の質問に対する回答や自由記述を見ると、ペアワークやグループワークなどの活動を好み、ワークシートを使った授業はおおむね受け入れられていると判断できる。また、90%以上の生徒が「初見の長文を読むために効果的なこと」として、「日本語に訳す活動」を選んでいる。実際に英検の問題を解答してからの感想を見ると、「内容理解」については、1・2 合わせて 66%以上の生徒は「理解している」と答えているが、「読みの速さ」に関しては、3・4 合わせて 53.8%の生徒が読む際に何らかの抵抗を感じ、スムーズに読んでいないことがうかがえた。

リサーチ・クエスチョン

日本語訳を介さず英文を的確に理解できるようにするにはどのような指導をすればよいか。
改善の目安：英検準2級の長文読解問題で5割正答できる生徒がクラスの8割以上になる。

改善のための手だて

- パートごとに区切らずにレッスン全体を通して読む活動をさせれば、長い英文を読むことに対する抵抗感が軽減するだろう。
- キーワードのパラフレーズや英語でパートごとのタイトルをつける活動を導入すれば、内容理解の程度を自分で再確認できるだろう。
- 日本語や英語でのサマリー作成活動を導入すれば、自分の考えと比較して英文を読むことになり、批判的に内容理解ができるだろう。

<活動計画>

9月～ レッソンの最初の時間に、導入として各レッスンの通し読みを行い、大意をつかむ。

- ・ 9月 ① キーワードを抜き出し、平易な英語で言いかえる。
② パートごとに英語でタイトルをつける。
③ パートごとの内容について、英語で自分の意見を書き、発表する。
- ・ 10月 ① 段落ごとに日本語でサマリーを作り、ペアで発表する。
② パートごとに英語でタイトルをつける。
③ パートごとの内容について、英語で自分の意見を書き、発表する。
- ・ 11月 ① 絵や写真に合わせて、段落ごとにキーワードを抜き出す。
② 段落ごとに、キーワードを参考に英語でサマリーを書き、ペアで発表する。
③ パートごとの内容について、英語で自分の意見を書き、発表する。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

○ 第2回授業改善アンケート(抜粋)[12月実施：回答人数 計77名]

- 1：楽しい／だいたい理解できた／かなり効果的だ／すらすら読めた(英検)
 2：どちらかといえば楽しい／まあまあ理解できた／まあまあ効果的だ／抵抗なく読めた(英検)
 3：どちらかといえばつまらない／あまり理解できなかった／あまり効果的ではない／なんとか読めた(英検)
 4：つまらない／理解できなかった／まったく効果的ではない／思うように読めなかった(英検)

	1	2	3	4
授業の楽しさ	8名 (10.4%)	50名 (64.9%)	19名 (24.7%)	0名 (0.0%)
学習内容	17名 (22.1%)	48名 (62.3%)	12名 (15.6%)	0名 (0.0%)
日本語での要約	17名 (22.1%)	51名 (66.2%)	8名 (10.4%)	1名 (1.3%)
英語での要約	19名 (24.7%)	50名 (64.9%)	6名 (7.8%)	2名 (2.6%)
レッスンの通し読み	21名 (27.3%)	45名 (58.4%)	10名 (13.0%)	1名 (1.3%)
英語で意見を言う	20名 (26.0%)	46名 (59.7%)	10名 (13.0%)	1名 (1.3%)
英語で言いかえる	29名 (37.7%)	44名 (57.1%)	3名 (3.9%)	1名 (1.3%)
内容理解(英検)	17名 (22.1%)	40名 (51.9%)	18名 (23.4%)	2名 (2.6%)
読みの速さ(英検)	6名 (7.8%)	35名 (45.5%)	30名 (39.0%)	6名 (7.8%)

9月の調査と比べて、授業が「楽しい」と感じる生徒の割合が若干増えた。また、「つまらない」と答えた生徒が一人もいなかったことはうれしい結果であった。しかし、学習内容については、「理解できた」と答えた生徒の割合が減ってしまった。これは、9月からさまざまな新しい活動を取り入れたが、それぞれの活動の目標が十分に達成されていなかったためであると思われる。新しく導入した活動の目的をくり返し説明し、取り組みやすい方法を工夫する必要があると感じた。

一方で、新しい活動についての項目では、「日本語で要約する」、「英語で要約する」、「レッスンの通し読みをする」、「英語で意見を言う」、「英語で言いかえる」のすべての項目で、「効果的だ」と答えた生徒が85%以上になり、特に、「英語で言いかえる」活動は、94.8%の生徒が肯定的にとらえている。これは、定期試験に英検準2級の長文問題を出題するなど、初見の長文に触れる機会を多くしたので、「日本語に訳す」ことよりも「大意把握」が重要であることが生徒に認識されたためと考えられる。

英検の問題に関しては、「内容理解」について、74.0%の生徒が「理解できた」と答えており、9月よりも増加した。また、「読みの速さ」については、読む時に何らかの抵抗を感じている生徒は、46.8%で、若干減少した。これは、各レッスンでの通し読みや定期試験での出題を通して、長文に慣れたため、抵抗感が減ってスムーズに読めるようになったのではないかと考えられる。基準（8点中4点）に達した生徒の割合は、9月実施で72.0%だったが、12月実施で83.1%になり、改善の目標を達成できた。平均点は、9月実施が4.3点、12月実施が5.0点であった。この2回の平均点の差についてt検定を行ったところ有意差が見られた ($p < 0.05$)。

英検準2級長文問題実施結果(2点×4問)

	人数	平均	標準偏差	最大値	最小値
9月実施	75	4.3	2.15	8	0
12月実施	77	5.0	1.87	8	2

(得点ごとの人数分布)

	0点	2点	4点	6点	8点
9月実施	5人(6.7%)	16人(21.3%)	23人(30.7%)	24人(32.0%)	7人(9.3%)
12月実施	0人(0.0%)	13人(16.9%)	25人(32.4%)	28人(36.4%)	11人(14.3%)

教師の変化

・単元指導計画の充実

アクティブラーニング型の授業実践に学校全体で取り組んでいることもあり、なるべくペアワークやグループワークを、各パートに1回は取り入れ、各レッスンに1回、スピーチやプレゼンテーション活動を行ったりするようになった。また、生徒の自己表現活動について、それに必要な言語知識を定着させるための活動や、そのもとになる読解活動とあわせて計画することで、より効果的な単元指導計画ができるようになった。

・協力体制の確立

学年の教科担当者間でのコミュニケーションが活発になり、指導法や教材の共有など、協力して指導する体制ができた。これは、教科全体にも広がり、学校全体で共通の目標を持って生徒の指導にあたることができるようになった。

今後の課題(次の改善点など)

- ・一つひとつの活動を、メリハリをつけてテンポよく行い、生徒の主体的な活動時間を増やしたい。
- ・生徒が自分の考えを英語で表現する活動を充実させ、英語を運用する機会をより多く設けたい。
- ・生徒の英文理解を助けるために、デジタル教科書などのICTツールを活用したい。

まとめ・感想

新学習指導要領の施行以来、新しい科目である「コミュニケーション英語」をはじめて指導することになったとき、従来どおりの指導方法でよいのか悩んでいた。この研修に参加して、さまざまな指導法や教材を学んだが、それらはとても具体的で理解しやすかったので、「まずは、やってみよう」という気になり、実践することができた。その結果、今まで変えられなかった自分の指導スタイルを知らぬうちに変えることができた。なによりも、よりよい授業を目指して日々努力している他の受講生の先生方と触れ合えたことは、今後の自分の取組への大きな刺激となる貴重な体験であった。このような機会を与えていただいたことに心から感謝している。

和訳依存から直読直解への意識改革の試み

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・ 小集団
-----	--------------	----	---	----	---

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

34名（男6名，女28名）のクラスで，活発な生徒が多く明るい雰囲気である。中学校の英語の理解が不十分なため，半ばあきらめてしまっている生徒も少なくない。大半の生徒は上級学校への進学を希望しているが，その多くが推薦で進学しようとしている。

解決すべき課題

日本語訳に依存しきって授業を受けており，日本語訳がなければ何も理解できないと話す生徒も少なからずいる。生徒には英語で英文を理解する力を身につけてほしい。初見の文章でも日本語訳に頼らずに内容理解ができるようにすることが課題である。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・前期中間，期末テストの読解問題の得点状況

（5月実施：受験者34名，7月実施：受験者34名）

	配点	平均点	正答率	標準偏差
前期中間	34点	15.3点	44.9%	5.91
前期期末	35点	15.4点	44.0%	6.15

- ・アンケート（7月実施：回答者30名）

1. 授業内での日本語訳は必要か

ぜひ必要	どちらかといえば必要	どちらかといえば不要	不要
20人(67%)	8人(27%)	2人(7%)	0人(0%)

2. 学習内容は理解できたか

だいたい理解できた と思う	まあまあ理解できた と思う	あまり理解できなかった と思う	理解できなかった と思う
2人(7%)	19人(63%)	9人(30%)	0人(0%)

- ・英検3級読解問題（7月実施：受験者30名）

定期テストではなく熟達度テストにおける読解力を調べるため，英検3級の読解問題に取り組みさせた。もともとの設問（5問）に加えて，各パラグラフの要旨を選択させる問題（4問），パッセージ全体の要旨を記述させる問題（1問）を独自に設定した。結果は以下のとおりになった。

もとの設問 (1点×5)	パラ要旨 (1点×4)	全体要旨 (1点×1)	合計点平均 (10点中)	合計点の 標準偏差	合計点の 最大値	合計点の 最小値
2.8点	1.9点	0.3点	5.0点	2.75	10点	1点

<考察>

アンケートからは9割の生徒が日本語訳は必要だと考えていることがわかった。また7割の生徒が学習内容を理解していると回答している一方、定期テストの読解問題の正答率は5割に満たない。英検のテストでは特にパラグラフの要旨やパッセージ全体のメッセージを読み取る問題の正答率がよくないことから、英文をまとまりとして理解するスキルが身につけていないことがわかった。

リサーチ・クエスチョン

生徒が能動的に英語を読み、読解力を身につけられるようにするにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・英検3級の読解問題の正答率が6割を超える生徒の割合が半分を超える。

・日本語訳を必要と考えない生徒の割合が増える。

改善のための手だて

○ 英文を日本語訳に頼らず、さまざまなタスクを通して能動的にくり返し読ませれば、内容理解が深まるだろう。

<ワークシートを用いた授業の流れ>

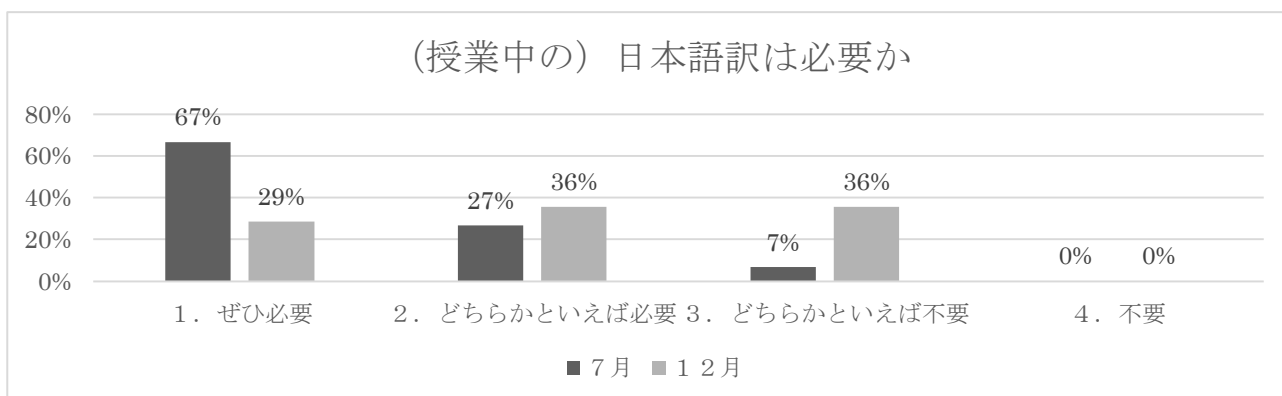
pre-reading (①キーワードによる内容の推測, ②リスニング, ③新出単語の確認)

while-reading (④板書, ⑤重要語句の再確認, ⑥日本語のQ&A, ⑦英語のQ&A)

post-reading (⑧自分のことばでの要約, ⑨本文のタイトル, ⑩パラフレーズした本文の読解)

生徒の変化 (途中経過, 事後の検証結果など)

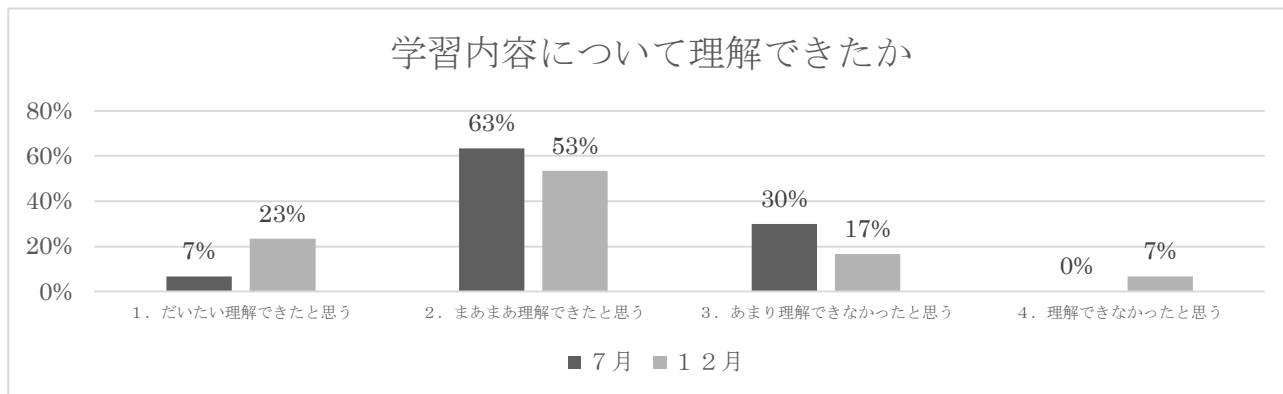
・アンケート (12月実施: 回答者30名)



日本語訳は必ずしも必要でないという生徒は7%から36%に増えた。しかし、依然として65%の生徒が日本語訳の必要性を感じていることがわかった。授業中の日本語訳については生徒の考えは大きく変化し、日本語訳に依存しないで読み取ろうとする生徒が増えた。

自由記述として、「時間はかかるが、授業の活動を通して理解できている」「日本語訳がないので、

自分で単語を調べる回数が増えた。なんとなく理解できているので日本語訳がなくてもいいと思う」という肯定的なコメントがある一方、「テストに日本語訳が出題されたときに、前もって正しい訳を確認できないと困る」「日本語訳がないと読む気にならない、照らし合わせながら読みたい」という否定的なコメントも見られた。読解スキルを身につけることの意義をしっかりと理解させることと、テストの問題形式について再考することが必要だと感じた。



学習内容を「だいたい理解できたと思う」と答えた生徒の割合は3倍以上に増えたが、「まあまあ理解できたと思う」という生徒と合わせると6%の微増となった。一方で7月には0%であった「理解できなかったと思う」という生徒が7%出てきてしまった。自由記述にもあった「教科書英文のトピックが難しかった」ということも理由の一つかもしれないが、授業の進め方を変えたことに対応しきれなかった生徒がいたということも考えられる。自由記述には「ワークシートにしたがってくり返し読むことで英文の内容を理解できるようになった」とようなコメントも見られた。

・英検3級読解問題（12月実施：受験者30名）

	もとの設問	パラ要旨	全体要旨	合計点平均 (10点中)	合計点の 標準偏差	合計点の 最大値	合計点の 最小値
7月	2.8点 (5)	1.9点 (4)	0.3点 (1)	5.0点	2.75	10点	1点
12月	2.5点 (5)	1.3点 (3)	1.0点 (2)	4.8点	2.51	9点	1点

*データの()の数字は問題数

ともに英検3級の長文問題を活用したが、2回のテストで読ませた英文の段落数が異なっていたため、問題数を調整した。各テストの問題数は()内に示してある。点数がわずかに下がってしまった原因として、12月のテストの英文内容が生徒にとって親しみがないものであったことが考えられる。英検の読解問題の正答率が6割を超えた生徒は14人(46.7%)となっており、改善の目安とした目標値の達成には至らなかった。

・後期中間テスト（12月実施：受験者34名）

	配点	平均点	正答率	標準偏差
前期中間	34点	15.26点	44.9%	5.91
前期期末	35点	15.40点	44.0%	6.15
後期中間	38点	17.26点	45.4%	9.56

テストごとに配点異なるので、正答率で比較をした。テストの結果が①正規分布を示すとは考えにくいこと、②サンプル数が34と少ないことの2点より、ノンパラメトリック検定 (Wilcoxon の符

号付き順位検定)を採用した。前期期末から後期中間にかけて正答率が伸びているが、検定の結果有意差は認められなかった、($p = 0.24 > 0.05$)。

<考察>

アンケートの結果からは、生徒の英文読解の際の日本語訳の依存はある程度解消できたと言えそうだが、読解力の向上までは確認することができなかった。学習内容の理解度(アンケート)から見ると、内容理解の新しいタスクの形式に生徒が慣れきらなかつたことや英文内容のトピックが難しかったことが原因かもしれない。

今後の課題(次の改善点など)

生徒の意欲をさらに高めていき、達成感を感じさせながら、日本語訳を介さなくても理解できるという自信を持たせることができるようにする。そして、より確かな読解力を生徒に身につけさせる。

- ・ Small steps や Scaffolding を意識して、つまづく生徒に対する支援を今まで以上に丁寧に行う。
 - 達成感, 意欲
- ・ 現在の言語活動や授業の進め方を見直して、よりの確に内容理解ができるように授業を展開する。
 - 読解力
- ・ 教科書で扱った内容と類似したトピックの初見の英文に触れる機会を増やす。
 - 達成感, 意欲, 読解力

まとめ・感想

生徒が英語そのものを好きになることが一番のポイントだと考えている。そのため、生徒に「わかった」ということを実感してもらいたいということから、先に日本語訳を渡したり、読解教材にも過度に日本語による解説を施したりした。本校の生徒なら日本語訳がなくても何とかなるとは信じつつも、生徒の反応を見て日本語をあまり介さないことに対して躊躇し、生徒を甘やかしてしまっていた。

今回の授業改善で生徒が日本語訳に依存しきっている状況であったことを痛感して反省した。後期では授業中に日本語訳を配布せず、pre-reading や while-reading, post-reading を意識して何回も本文に取り組みせるようにしたところ、生徒の日本語依存は少しではあるが解消してきたことが実感できた。

今年度このような貴重な研修に参加させていただき本当に感謝したい。これで終わりとするのではなく、学んだことを大いに生かしながら、さらに研さんを重ね、生徒の指導と英語科全体の指導力向上に貢献していきたいと思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

卯城祐司. (2009). 『英語リーディングの科学 — 「読めたつもり」の謎を解く』 研究社出版

Cris, T. (2000). *I read it, but I don't get it: comprehension strategies for adolescent readers*

Portland, Maine : Stenhouse Publishers

グループワークによる主体的な読解活動の推進

科目名	リーディング	学年	3	形態	HR・習熟度・ 小集団
-----	--------	----	---	----	---

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は3学年，32名（男子29名・女子3名）と29名（男子17名・女子12名）の2クラスである。単位制の選択授業のため，ホームルームの異なる生徒が混在する。習熟度も幅広く，英語を学ぶ意欲，動機も異なる。生徒の9割以上は，大学，短期大学，専門学校等への進学を希望している。進学方法の割合は，一般受験が約3割，AO入試，推薦入試が約7割である。まじめであるが，全体として，英語の理解度は低く，特に集中して英文読解に取り組むことが苦手な様子が見られる。

解決すべき課題

- ・授業が文法訳読中心で，主体的に英文読解に取り組ませることができていない。
- ・生徒は英文を読むことに自信がなく，いざ読もうとするとかなりの時間がかかる。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・英文読解に関するアンケート（7月実施：回答者75名）

問1. 教科書の英文のようなまとまった英文を読むことに自信がありますか？

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
2人 (2.7%)	11人 (14.7%)	33人 (44.0%)	29人 (38.7%)

問2. テストなどでまとまった英文を読むとき，どれくらい時間がかかっていると感じますか？

十分早く読めている	まあまあ早く読めている	やや時間がかかりすぎている	時間がかかりすぎている
0人 (0.0%)	14人 (18.7%)	39人 (52.0%)	22人 (29.3%)

問3. 英文を読むとき，1語ずつではなく意味のまとまりを意識しながら読んでいると思いますか？

そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
6人 (8.0%)	32人 (42.7%)	28人 (37.3%)	9人 (12.0%)

問4. 英文を読むとき，つなぎことば (however, in addition など) を意識しながら読んでいますか？

そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
21人 (28.0%)	37人 (49.3%)	14人 (18.7%)	3人 (4.0%)

問5. 英文を読むとき，パラグラフ（段落）ごとの要旨を理解しながら読んでいますか？

そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
7人 (9.3%)	27人 (36.0%)	35人 (46.7%)	6人 (8.0%)

問6. 日本語訳なしに、英語のまま、まとまった英文を理解できるようになりたいと思いますか？

そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
48人 (64.0%)	19人 (25.3%)	8人 (10.7%)	0人 (0.0%)

問7. まとまった英文をできるだけ速く読んで理解できるようになりたいと思いますか？

そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
47人 (63.5%)	24人 (32.4%)	3人 (4.1%)	0人 (0.0%)

<分析と考察>

8割以上の生徒が、まとまった英文を読むことに自信がない、まとまった英文を読むとき時間がかかりすぎている、と感じていた。また、およそ9割またはそれ以上の生徒が、英文を逐語訳して読むのではなく英語のまま理解して読みたい、英文を速く読んで理解できるようになりたい、という希望を持っていることがわかった。しかし、実際の読み方については、「つなぎことばを意識している」生徒は8割近くいたものの、パラグラフの要旨を意識している生徒は45.3%、意味のまとまりを意識して読んでいる生徒も50.7%にとどまった。

授業中の生徒の英文を読む様子を見ると、多くの生徒が、1文1文について、調べた1語1語の意味を組み合わせて意味を取ろうとしており、コロケーションやパラグラフなど、まとまりとしての理解に意識が向いていないように思えた。意味のまとまりとして語句をとらえながら、パラグラフの要旨、文章のメッセージを理解するような読み方を指導する必要があると感じた。

リサーチ・クエスチョン

英文を主体的に読み、要旨をとらえながら、速く読めるようにするには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：実用英語技能検定準2級の長文問題で、正答率7割以上の生徒が7割を超える。

改善のための手だて

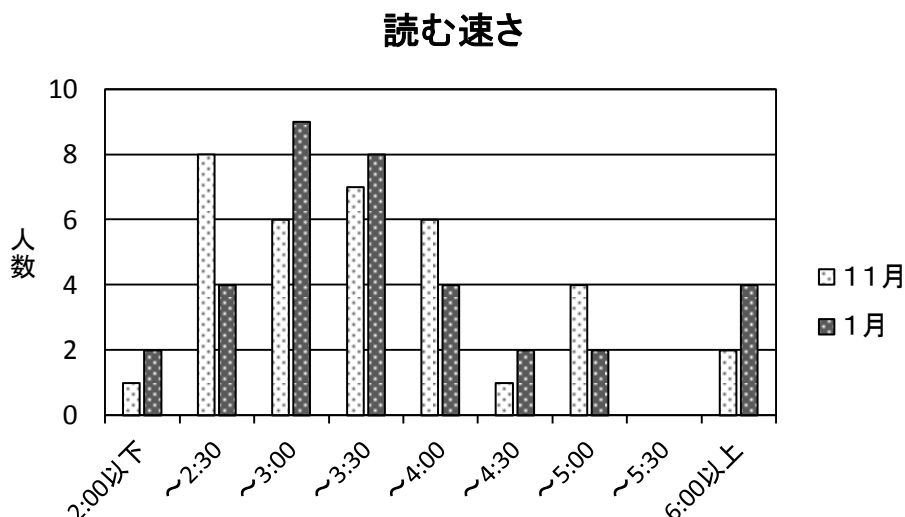
- まとまった英文の要旨や情報検索読みにかかわる読解課題を与え、グループワークとして取り組ませれば、より主体的、意欲的に英文を読むようになるだろう。
 - ・ 一人ひとりを指名する文法訳読をやめ、グループワークとして読解に取り組ませる。
 - ・ 読解課題（ワークシート）として、パラグラフの要旨、パッセージ全体のメッセージ、内容の正誤問題などを与える。
- さまざまな英文を、意味のまとまりを意識して音読させれば、逐語的な理解のしかたを脱し、より速い読解ができるだろう。
 - ・ 帯活動としての長文読解問題演習のあとで、意味のまとまりを意識した音読練習を行う。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・ 実用英語技能検定準2級の長文問題（11月、1月実施：受験者数35）

英文（11月320語、1月316語）を読むのにかかった時間を記入させ、実際に出題されている英文の内容理解を問う4択問題の4問に自作の2択正誤問題を6問加えた、合計10問を出題した。

<結果1：読む速さの変化>



実施間隔が短いので、指導経過を記録するデータにとどまっております、数値的な大きな変化はまだ見られない。しかし、生徒の読んでいる様子から、読みの質が少し変わってきたように感じた。

1回目では、とにかく早く読み進めることに注意が行って時間を気にする生徒が多かったが、2回目では、設問に正解するためにじっくり読んでいる生徒が増えてきたように思われた。

<結果2：読解問題の得点結果>

実施時期	11月	1月
人数	35	35
平均点 (10点満点)	4.9	6.7
標準偏差	2.49	2.41
最大値	10	10
最小値	0	0

設問の得点平均は上昇している。検定 (対応のある標本の t 検定) にかけたところこの2回のデータの有意差が認められた ($p = 0.00 < 0.05$)。テストの形式に慣れたこともプラスに働いていると思われるが、パラグラフの要旨や英文全体のメッセージをつかませる授業中の読解活動により、生徒の英文読解のしかたが改善してきているのかもしれない。実用英語技能検定に確実に合格できる正答率7割に達する生徒の割合は、11月では20%であったが、1月では62%になった。クラスの7割という目標値には達しなかったが、かなりの向上が見られた。

・読解活動の取組状況

生徒一人ひとりを指名し、日本語訳をしていた時は、教師とその指名された生徒との間のやり取りに時間を取られていた。グループワークを取り入れると、グループ内での生徒同士での話し合いや、一人ひとりの発言の機会もあり、教室内の雰囲気は大変よくなった。生徒同士が教え合うことによって個別指導の時間が節約でき、活気も生まれた。グループワークに取り組んでいるときは、主体的に英文を読もうとする態度がうかがえた。

音読活動については、はじめのうちはなかなか声を出せない生徒もいたが、徐々に慣れて、全体的に声が出るようになってきた。不自然な箇所ポーズが入ることもなく、意味のまとまりを意識して読んでいるように感じられた。

教師の変化

グループワーク中に机間指導をするなかで、生徒の思いがけない発言が聞こえたり、生徒の個性や考え方が見えたりし、生徒の実態をより理解できるようになった。生徒の発言や考えを他の生徒に問いかけると、授業が盛り上がるため、授業中の発言を指導の材料として活用するようになった。その結果、授業が活気づき、自分自身も授業を行っていて楽しいと感じる場面が多くあった。

授業改善の前は、英文読解とは、生徒を指名して1文ごとに日本語訳を言わせ、教師が文法説明をしながら正しい訳を伝えるという、いわゆる文法訳読をすることであると思い込んでいたが、グループワークによる要点把握などの読解活動を取り入れてみて、その考えが変わった。パラグラフの主旨やパッセージ全体のメッセージを読み取ろうと、生徒がより主体的・自律的に取り組める読解活動が有効なのだということを実感できた。授業準備の際には、指導のポイントをより明確に考えながら、扱い方の軽重を意識するようになった。概要を把握する問題を、ワークシートと定期試験で取り入れるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

グループワークを年度途中から取り入れるようになったため、授業方式の変更に戸惑う生徒がいた。くじを使ってグループ分けをしていたが、組合せによってはグループの会話が盛り上がりなかつたり、基礎レベルの生徒が集まってしまうと問題に取り組むのに苦労している様子も見られたりした。席順などである程度グループを固定するなど、グループ内での協力を促進する工夫の必要性を感じた。

ワークシートの構成を、メインアイデアをつかむタスクから詳細情報を検索するタスクへというように、論理の流れに則したものにするなど、より適切な英文理解を導くものにしたい。

生徒の英文読解の能力を測るテストに関しては、今回は期間も短く、2度しか実施をしていないので、年度当初から複数回実施をして、生徒に学習の成果を随時確認させるとともに、より迅速で的確な授業改善に役立てたい。

まとめ・感想

生徒の事前のアンケート結果から、多くの生徒が英語を読むことに自信がないことを知り、驚いた。その結果、まずは、生徒が英語を読むことに慣れること、英文を読むことを楽しむことから始めようと考えようになった。これまで自分が指導していた文法訳読形式では、指名された生徒以外は、正しい日本語訳が確認されるのをただ待っていて、その後も文法説明を聞くだけ、という受け身の授業になってしまっていた。授業改善の一環としてグループワークを取り入れてからは、一人ひとりの生徒がグループ内で自由に発言しながら、生き生きと読解活動に取り組む様子が見られ、手ごたえを感じてうれしい気持ちになった。

今回のアドヴァンスト研修では、4技能に関する指導例や改善のヒントを得ることができ、自分はリーディングの活動で改善を実行することができた。また、アンケート調査や、データの検証により、指導の効果や生徒の成長を判断、評価することの大切さも学んだ。今後、他の技能についても、今回の研修で学んだことを活かして、授業を改善していきたいと思う。

速く的確な読みを目指したリーディングストラテジー指導

科目名	リーディング	学年	3	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

担当クラスは、42名（男子27名・女子15名）の理系クラスである。ほぼ全員が一般入試で難関大学への進学を目指している。全体的にまじめでおとなしい雰囲気がある。

解決すべき課題

日頃生徒と話をするなかで、彼らが英語長文問題を苦手としていることを感じていた。英文が速く読めない、速く読もうとすると内容が十分理解できないという生徒が多いことがうかがえた。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・英文読解力テスト（7月：受験者数41）

大学入試センター試験第6問を使って、正答数と解答時間を調べた。9問の設問の平均正答数は6.9問（正答率76.7%）、解答所要時間の平均は14.4分であった。時間についてはそれほど悪くないが、引き続き速読の意識は持たせておく必要がある。正答率については、多くの生徒が希望するような大学の合格可能性を考えると、80%以上（9問中8問以上）ほしいところである。

- ・これまでの授業の振り返り

これまでは、英文のなかに出てくる重要な単語や熟語、文法を確認したり、複雑な構造の文が出てくればそれを解説したりする授業であった。つまり、授業で扱う英文が理解できればよいという指導であった。リーディングストラテジーをいくつか紹介したことはあったが、明示的、体系的な指導はしていなかったし、リーディングストラテジーを使うことで英文を効率的に読めるという体験も十分にさせていなかった。

- ・リーディングストラテジーについてのアンケート（7月：回答者数：41）

（A：よくあてはまる B：あてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない）

質 問	A	B	C	D
英文読解に必要なリーディングストラテジーを理解している	5人(12.1%)	25人(60.9%)	8人(19.5%)	3人(7.3%)
リーディングストラテジーを使って英文を読んでいる	7人(17.0%)	21人(51.2%)	9人(21.9%)	4人(9.8%)

<センター試験第6問に関して>	A	B	C	D
パラグラフごとの要旨をつかみながら読むことができた	11人(26.8%)	24人(58.5%)	5人(12.2%)	1人(2.4%)
キーワードを拾うことを意識しながら読むことができた	12人(29.3%)	19人(46.3%)	8人(19.5%)	2人(4.9%)
重要な部分とそうでない部分を意識しながら緩急をつけて読むことができた	10人(24.4%)	20人(48.8%)	8人(19.5%)	3人(7.3%)
ディスコースマーカーに注目して読むことができた	11人(26.8%)	19人(46.3%)	8人(19.5%)	3人(7.3%)

<考察>

大学入試センター試験第6問の結果、特に解答時間に関しては、それほど悪くない結果が出た。しかし、アンケートを見てみると、「英文読解に必要なリーディングストラテジーを理解している」に（あまり）あてはまらないと回答した生徒は26.8%、「リーディングストラテジーを使って英文を読んでいる」に（あまり）あてはまらないと答えた生徒は31.7%と、3割近くまたはそれ以上の生徒が否定的な回答をしている。明示的な指導が不足していたせいも、リーディングストラテジーについてその効用を実感し、意識的に使うまでに至っていない生徒もまだ多くいるようであった。

リサーチ・クエスチョン

英文をできるだけ速く読んでの確に理解できるようにするにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・センター試験第6問の平均正答数が8問以上になり、平均解答時間が14分程度を維持する。

- ・アンケートで、「リーディングストラテジーを理解し、意識的に使っている」と回答する生徒の割合が80%を超える。

改善のための手だて

- リーディングストラテジーを体系的にくり返し指導すれば、英文をすばやく読んで、的確に理解できるようになるだろう。
 - ・ディスコースマーカーの指導
 - ・トピックセンテンスやキーワードを探し出す練習
 - ・パラグラフの要旨を把握しながら読む練習
 - ・グラフィックオーガナイザーによる論理構造の把握
- 読解に要する時間を計測して英文を読ませれば、速読への意識が高まり、速く読めるようになるだろう。
 - ・目標解答時間の設定
 - ・解答所要時間の記録（生徒によるセルフモニタリング）

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・英文読解力テスト（12月：受験者数 38）

ふたたび、大学入試センター試験第6問の正答数と解答時間を調べた。9問中の平均正答数は6.7問（正答率74.4%）、平均解答時間は14.3分であった。

- ・リーディングストラテジーについてのアンケート（12月：回答者数：38）

（A：よくあてはまる B：あてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない）

質 問	A	B	C	D
英文読解に必要なリーディングストラテジーを理解している	10人(26.3%)	21人(55.2%)	5人(13.1%)	2人(5.3%)
リーディングストラテジーを使って英文を読んでいる	10人(26.3%)	19人(50%)	7人(18.4%)	2人(5.3%)
＜センター試験第6問に関して＞				
パラグラフごとの要旨をつかみながら読むことができた	16人(42.1%)	12人(31.6%)	8人(21.1%)	2人(5.3%)
キーワードを拾うことを意識しながら読むことができた	20人(52.6%)	13人(34.2%)	4人(10.5%)	1人(2.6%)
重要な部分とそうでない部分を意識しながら緩急をつけて読むことができた	9人(23.7%)	21人(55.3%)	7人(18.4%)	1人(2.6%)
ディスコースマーカーに注目して読むことができた	10人(26.3%)	18人(47.4%)	7人(18.4%)	3人(7.9%)

＜考察＞

7月の結果と比べて、解答所要時間は変わらず、平均正答数も伸びず、改善の目標値には届かなかった。しかし、リーディングストラテジーの理解・意識的使用に関するアンケートの回答にはよい変化が見られ、6項目中5項目において「(よく) あてはまる」と答えた生徒の割合が増え、全体的にはより多くの生徒がリーディングストラテジーを理解して意識的に使えるようになったことがうかがえる。特に、「キーワードを拾うことを意識しながら読むことができた」については、2回ともアンケートに回答した38名のデータをノンパラメトリック検定（Wilcoxonの符号付き順位検定）にかけたところ、有意な伸びが認められた（ $p = 0.033 < 0.05$ ）。つまり、この項目については全体的に肯定的な回答をした人数が増えたというだけでなく、一人ひとりの個人レベルで見てもその意識が高まったといえる。アンケートの自由記述欄には、「ただ個々の英文をひたすら速く読み進めるのではなく、英文の論理構造を整理しながら読むことができるようになってきた」というコメントや、「英文の読み方がわかって自信がついてきた」などというコメントがあった。

教師の変化

・授業の目標への意識

改善前の授業では、英文のなかに出てくる重要な文法や構文などのポイントをすべて解説することに重点を置いていた。しかし今は、授業で扱う英文の解説に終始するのではなく、その読解を通して、他の場面でも応用できるスキルを身につけさせることを目標にして毎回の授業を行っている。

・自己研さんへの意識の向上

アカデミアの先生方と、一緒に研修に参加している先生方に毎回刺激を受けて、もっと英語力や指導力をつけなくてはと強く感じた。そして英語の勉強を今まで以上に力を入れてやるようになり、英語教育に関わる文献も読むようになった。今後もよりいっそう自己研さんに励んでいきたいと思う。

今後の課題（次の改善点など）

・早い段階からのリーディングストラテジーの明示的な指導

今後はまとまった英文を読むための、リーディングストラテジーの指導を早い段階から明示的に行い、家庭学習課題等で練習の機会を十分に与えたい。

・コミュニケーションの機会

今年度の授業は長文問題を解くことがメインになり、教師と生徒、あるいは生徒同士のコミュニケーションの機会がどうしても少なくなってしまった。スキーマの活性化・構築のためのプレリーディングの時間にもっと英語でのインタラクションを行ったり、ポストリーディングの活動として意見を言わせたりするなどの工夫の余地があった。

・生徒の学習状況の把握

長文問題を解いているときに机間指導をしたり、授業が終わった後に声かけをしたりしたものの、42人というクラスサイズで全員の学習状況をしっかり把握できていたかということ自信がない。今後は、振り返りシートやポートフォリオなどを用いて一人ひとりの生徒の進捗やニーズをモニターしながら指導にあたりたい。

まとめ・感想

今回の研修・授業改善プロジェクトを通して、生徒の意識の向上も見られたが、何よりも自分自身の英語教師としての意識が高まったと思う。この機会に得たことを今後の教師生活で最大限に活かしていくことで、アカデミアの先生方へ恩返しをしたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

門田修平・野呂忠司・氏木道人(編著).(2010).『英語リーディング指導ハンドブック』大修館書店
田中武夫・島田勝正・紺渡弘幸(編著).(2011).『推論発問を取り入れた英語リーディング指導』三省堂

読むことへの興味を高めるリーディングストラテジー指導

科目名	実践英語発展	学年	3	形態	HR・習熟度・ 小集団
-----	--------	----	---	----	--------------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

第3学年 239名のうち、71名が選択受講する英文読解力を高めるための科目である。難関私大への合格を目指す生徒が多くおり、6単位の共通履修科目(リーディング4単位・ライティング2単位)に加え、この科目2単位を選択履修している。塾などで英語を学ぶ生徒も多い。

解決すべき課題

読解上の課題は語彙・文法・語法などの知識不足にあると生徒は感じているが、指導者の認識では、背景知識(スキーマ)が不足していることに加えて、論理展開への意識、筆者の意見、登場人物の感情を理解するための読解技術を十分に持たないことも大きな要因であると思われる。また、多くの生徒は、入試問題の英語の文章を読む力をつけたいという動機はあるが、英文リーディングに際し、将来も役に立つ知識と技術を身につけるために積極的に取り組もうという意欲までは見られない。6月の時点で、読解活動やテキストの内容の面白さなど環境要因(外的要因)によって生じる「状況的興味」(Schraw, Flowerday, & Lehman, 2001)の高まりは見られたが、これをより持続性のある生徒の内面から生じる「個人的興味」へとつなげていくことが課題である。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

6月に実施したアンケートによると、53%の生徒が英語の文章を読んでいて楽しい(とてもそう感じる・少しそう感じる)と回答した。英語の文章を読む際に困ることとして、76%の生徒が「語彙・文法・語法などの知識が不足していて、語や文の意味がわからない」と答えている。授業で行ったさまざまな認知処理をともなう読解活動(Anderson et al., 2001による改訂 Bloom's Taxonomy に基づき分類)について、「知識」52%、「理解・言い換え」64%、「理解・分類」46%、「応用」56%、「分析」59%、「評価」40%、「創造」52%の割合で「楽しい」(とてもそう感じる・少しそう感じる)と回答した。「理解・分類」と、批判的思考を必要とする「評価」には半数以上の生徒が楽しさを感じていないが、他は半数以上の生徒が楽しいと感じている。

一方、同時期に実施した英文読解テスト(定期テスト中30点相当分の応用問題)では、平均点は13.3点にとどまり、1名は0点であった。

リサーチ・クエスチョン

より深い英文読解をするために必要なリーディングスキルを身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・12月の英文読解試験の平均点が6月時点と比べ有意に向上する。

- ・12月のアンケートで「英文を読んでいて楽しい」と回答する生徒の割合が6月より増える。

改善のための手だて

- 英文読解の前にスキーマを活性化させる活動をすれば、より興味をもって読み進めることができるだろう。

<Pre-reading 活動>

- ・テーマにかかわる意見交換（ペアワーク，グループワーク）
- ・キーワードを使ったビンゴ
- ・画像の活用

- 段落ごとに、さまざまな認知処理をともなうリーディングタスクに取り組みせれば、より深く的確に英文の内容を理解することができるだろう。

<While-reading 活動>

- ・リーディングタスクの例（ペアワーク，グループワーク）
 - 言い換え文の正誤を答える（理解）
 - 文章の複数の情報をつなぎ合わせて質問に答える（理解）
 - 文章の内容と自らの感覚や知識を用いて質問に答える（応用）
 - 文章の内容と自らの知識を系統的に結びつけて質問に答える（分析）
 - 批判的に文章を評価する（評価）
 - 文章の主題に対する自分の意見を表現する（創造）

- 読んだ内容を自分のことばで伝える自己表現活動を行えば、読解活動に対してより積極的に取り組む意欲を育て、より深く継続的な学びを支える動機づけとなるだろう。

<Post-reading 活動>

- ・要約文，物語文，寸劇の作成，発表／提出（個人→グループワーク）

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・Pre-reading 活動への取組状況

- * 自分の経験，考えを述べたり，社会について考えたりし，スキーマを活性化させることで，次につづく読解に対し興味をわいている様子が見られた。
- * キーワードを使ったビンゴにより，語彙を覚えることの苦痛が減るとの感想があった。
- * 画像の活用により，ストレスが軽減され，英語力が低い生徒には積極的な学習態度がより顕著に見られた。また，ビデオを見た後には活発な意見交換が行われた。

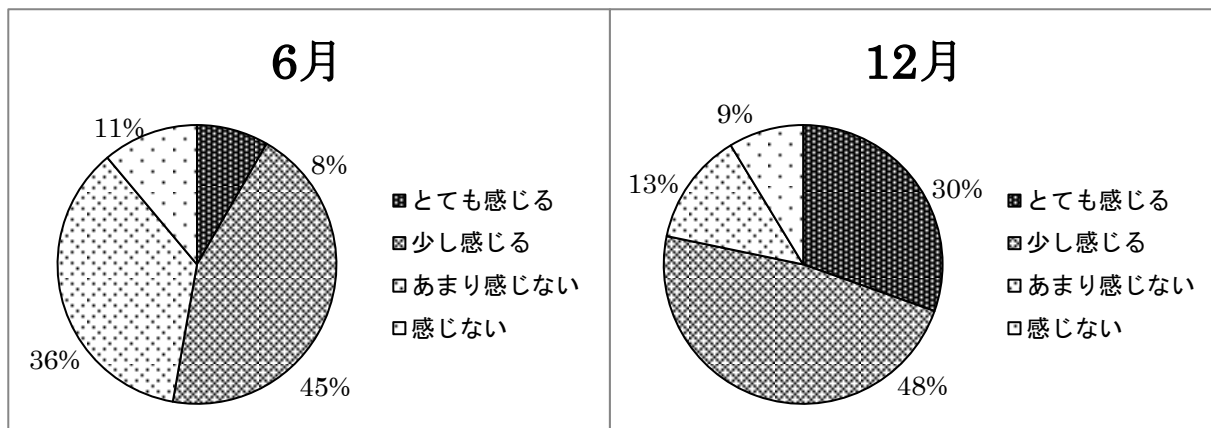
・While-reading 活動への取組状況

- * ペアワークやグループワークのなかで，わからないところを教え合いながら，自分たちの力で積極的に課題に取り組む様子が見られたことから，協働学習から生まれる楽しさや信頼感，刺激や動機づけが，状況的興味を生じさせたと思われる。
- * あらかじめ与えた語彙知識（連語やよく使うフレーズとその日本語訳）は，特に英語力が低い生徒の While-reading 活動への積極的な取組を支えた。

・ Post-reading 活動への取組状況

- * Post-reading 活動を「楽しい」（とても楽しい・少し楽しい）と回答する生徒の割合は、12月のアンケートで77%であった。
- * なかには課題が難しすぎると感じたり、大学受験には不必要だと考え、課題を提出しなかったり、発表を欠席する生徒もいたが、要約文、物語文、寸劇などには独創的な展開を加えた作品もあり、多くの生徒が意欲的に取り組んだ。
- * 「家でも勉強しようという気持ちになれた」、「日常的に英語に親しみたいと感じた」、「最近英語が楽しい」、「以前よりも英語に関心があり、この気持ちを何かにつなげたいと思うようになった」といった感想から、英語の読解活動に対してより積極的に取り組む意欲が育っていることがうかがえる。個人のより深く継続的な学びを支える動機づけが期待できるであろう。

・ 英文を読むことの楽しさについて（アンケート調査）



英語の文章を読んで「楽しい」（とてもそう感じる・少しそう感じる）と回答する生徒の割合は6月の53%から78%に増え、改善の目標が達成できた。

・ 英文読解テスト（定期テスト中の30点分）

	人数	平均点/30	標準偏差	最高点	最低点
6月	71	13.3/30	6.2	27	0
12月	72	18.0/30	6.2	30	0

平均点が13.3点から18.0点に上がった。これについて、両方の試験を受験した71名の得点について、対応のあるデータのt検定を行ったところ、有意差があることがわかり ($p = 0.00 < 0.05$)、改善の目標が達成できた。

<分析・考察>

授業中の読解活動への取組状況の改善、英文読解に対する意識の向上、テスト得点の上昇から、今回の実践が、より深い英文読解をするために必要なリーディングスキルを身につけさせることに寄与したと考えられる。

教師の変化

専門書や論文にあたり、自分の取組に理論的裏づけを得たことにより、授業課題の意義や効果を生徒に説明するようになった。ICTツールを積極的に授業で活用するようになった。インターネットサイト(Just the word, Wordle, COCA コーパスなど)を活用し、連語を示したり、画像を提示したり、課題を作成するようになった。授業での活動をより明確に試験に反映させ、指導と評価の一体化を意識するよ

うになった。指導の効果を、生徒のアンケートや小テスト、定期試験などの資料から客観的に検証することの大切さを再認識し、他の科目でも同様に授業改善を進めるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

自己研さんに継続して取り組み、効果のある指導法を進んで学び、自らの授業に生かしていくことが今後の課題である。今回は英文を読む学習に焦点を当てて取り組んだが、次は英文を書く学習と英語の発音について効果的な指導法を考えていきたい。また、同僚教師と指導法について意見交換をし、ともに取り組み、その効果を議論し合う環境を率先して作っていきたい。

まとめ・感想

アカデミアの指導者が自分の取組を観察し、専門的な助言を与えてくれるおかげで、楽しく自信をもって授業改善に取り組むことができた。研修において、英語教育に真剣に取り組む同僚や一流の教育専門家に会い、自らの専門性が高まり、英語教育についてもっと学びたいと感じるようになった。この機会を得られたことに感謝している。

授業改善にあたって参考にした資料等

Amelsvoort, M. V. (2013). Images and memory: A literature review of issues in the use of images to aid vocabulary acquisition and reading comprehension and recall. 『神奈川県立国際言語文化アカデミア研究紀要 2号』

Anderson, L. W., et al. (2001). *A taxonomy for learning, teaching, and assessing: A revision of Bloom's taxonomy of educational objectives*: Longman.

Hidi, S., Renninger, K. A., & Krapp, A. (2004). Interest, a motivational variable that combines affective and cognitive functioning. In D. Y. Dai & R. J. Sternberg (Eds.). *Motivation, emotion, and cognition* (pp. 89–115). Mahwah: Erlbaum.

大井恭子(編著). (2008) 『パラグラフ・ライティング指導入門 中高での効果的なライティング指導のために』 大修館書店

Schraw, G., Flowerday, T., & Lehman, S. (2001). Increasing situational interest in the classroom. *Educational Psychology Review*, 13(3), 211-224.

COCA: <http://corpus.byu.edu/coca/>

Just the Word: <http://www.just-the-word.com/>

Wordle Word Clouds: <http://wordle.net/>

話すことへの積極的態度を育成する指導

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	---

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は少人数クラス4クラス，78名である。女子が1人もしくはすべて男子のクラスもある。どのクラスも活気があり，授業には積極的に参加するが，家庭学習の習慣はほぼ皆無である。生徒の約8割は就職希望であり，進学希望者はほとんど指定校推薦・AO入試等により，学力試験を受けずに進学することを目指している。

解決すべき課題

中学英語の初期でつまづいている生徒が大半であり，英語に対して苦手意識を持つ生徒が多い。会話の練習では，定型文を読むことはできるが，自分のことばで会話を続けることができない。英語を書くことに関しては，単語のスペリングがわからないため，あきらめてしまう。はじめから英語はできないと思込んでいる生徒が多く，それが自信のなさ，英語嫌いにつながっているのではないかと感じていた。授業を通し，生徒たちに自信を持たせ，英語を楽しんでもらいたいと考えた。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・アンケート調査（6月）

英語に対して苦手意識がある生徒が多いと感じていたが，実際にどのように感じているのか確認するためにアンケートを実施した。（回答数78名）

①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③どちらかといえばそう思わない ④そう思わない

1. 英語の授業は楽しいですか。

①	②	③	④
51人 (65.3%)	23人 (29.4%)	3人 (3.8%)	1人 (1.3%)

2. 将来英語を使えるようになりたいですか。

①	②	③	④
40人 (51.2%)	31人 (39.7%)	5人 (6.4%)	2人 (2.5%)

3. 英語が必要な世の中になると思いますか。

①	②	③	④
43人 (55.1%)	21人 (26.9%)	12人 (15.4%)	2人 (2.5%)

4. 英語を話して伝えることができていると思いますか。

①	②	③	④
13人 (16.7%)	29人 (37.2%)	31人 (39.7%)	5人 (6.4%)

5. 英語を書いて伝えることができていると思いますか。

①	②	③	④
11人 (14.1%)	32人 (41.0%)	25人 (32.1%)	10人 (12.8%)

6. 音読をすることは楽しいですか。

①	②	③	④
27人 (34.6%)	33人 (42.3%)	15人 (19.2%)	3人 (3.8%)

7. ペアワーク, グループワークは楽しいですか。

①	②	③	④
48人 (61.5%)	19人 (24.4%)	7人 (9.0%)	3人 (3.8%)

8. 文法事項の説明を聞くことは楽しいですか。

①	②	③	④
18人 (23.1%)	37人 (47.4%)	16人 (20.5%)	3人 (3.8%)

9. ワークシートを使った作業は楽しいですか。

①	②	③	④
46人 (59.0%)	21人 (26.9%)	8人 (10.3%)	1人 (1.3%)

10. 辞書を使った単語調べは楽しいですか。

①	②	③	④
18人 (23.1%)	28人 (35.9%)	28人 (35.9%)	6人 (7.7%)

1～3は、英語への意識に関する質問である。ここから、94.9%の生徒は英語の授業は楽しいと感じており、90.9%の生徒は将来英語を使えるようになりたいと感じていることがわかった。また、82.0%の生徒が、英語が必要な世の中になると回答しており、英語の必要性を感じている生徒が多いことがわかった。4～5は、生徒自身が、自分の英語（丸暗記ではなく自分の言葉として使う英語）での発信力を振り返るための質問である。英語を話して伝えられると答えた生徒は53.9%、書いて伝えられると答えた生徒は55.0%であった。1～3の英語の意識の高さに比べるとかなり低い結果となり、英語を使える自信がない生徒が多くいると見られる。6～10は、授業の活動に関する質問である。音読やペアワークなど、声を出したり英語を口にしたりすることは楽しいと感じており、ワークシートを使った作業のような、成果が目に見える活動も楽しいと感じていることがわかった。

リサーチ・クエスチョン

積極的に自分の英語を使いながら、自信をもって初歩的な会話ができるようにするにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・以前より自分の英語で伝えることができるようになったと感じる生徒がクラスの8割以上になる。

・自分の英語を使った会話のターンの数が増加傾向を示す。

改善のための手だて

○ 自分のことや身近な話題について、枠組みを与えた会話練習をさせれば、英語で会話することに慣れることで、自信を持たせることができるだろう。

- ・生徒が興味を持っていそうな話題，話が続きそうな話題，教科書の内容と関連した身近な話題などをトピックとして選ぶ。
 - ・会話の枠組みを使って，空所に自分のことに関する語句や文を記入させてから会話させる。
- 疑問文の言い方・答え方を指導すれば，枠組みで決められた受け答えに加えて，自分の聞きたいことを英語で質問したり，答えたりすることができるようになるだろう。
- ・一通りの WH 疑問文の言い方と答え方を指導し，枠組みを与えた会話練習に加えて，さらに聞いてみたいことを考えて書かせる。
 - ・準備した質問を使って会話を続ける練習をさせ，慣れてきたら即興でやらせる。
 - ・会話のターン数を記録させる生徒用ワークシートを作成し，成果を確認することで，会話を続ける意欲を高める。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・会話のターン数の変化

生徒の記録を見てみると，多少の変化が見られた。会話のターン数を数え始めた9月の会話のターン数は，ほとんどの生徒が1回であったのに対し，10月には2回できる生徒が1クラスに3~4人，多いクラスでは半分近く出始めた。ワークシートを使用し成果を可視化したことで，自分のことばで会話を続けようと努力をする生徒や，会話を楽しむ生徒も見られた。

・言語活動時間と生徒の反応の変化

生徒が活動する時間を多くする授業展開を心がけた結果，生徒が発話をする時間や，自分のことばで英語を書く時間が増え，生徒が英語を使用する場面が増加した。生徒同士のインタラクションも増えたため，授業中に発言をしやすい雰囲気ができ，多くの生徒が発言をするようになった。

・アンケート調査（12月）

6月に行ったアンケートと同じ質問を含めたアンケートを行い，生徒の変化があるかを調査した。（回答数 74 人）

①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③どちらかといえばそう思わない ④そう思わない

1. 英語を話して伝えることができていると思いますか。

①	②	③	④
29人 (39.2%)	27人 (36.5%)	14人 (18.9%)	4人 (5.4%)

2. 英語を書いて伝えることができていると思いますか。

①	②	③	④
26人 (35.1%)	27人 (36.5%)	17人 (23.0%)	4人 (5.4%)

①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③変わらない

3. 英語を話すことに慣れたり自信を持ったりしましたか。

①	②	③
20人 (27.0%)	44人 (59.5%)	10人 (13.5%)

4. 英語を書くことに慣れたり自信を持ったりしましたか。

①	②	③
30人 (40.5%)	38人 (51.4%)	6人 (8.1%)

<生徒の発信力の自己分析—事前・事後の比較>

	6月	12月	増減
「英語を話して伝えられる」と自覚している生徒の割合	53.8%	75.7%	△ 21.9%
「英語を書いて伝えられる」と自覚している生徒の割合	55.0%	71.6%	△ 16.6%

1, 2の質問の回答を6月の結果と比べてみると、英語を話して伝えられると答えた生徒が21.9%、書いて伝えられると答えた生徒が16.6%増加し、ともに7割を超えた。また、3の質問に対しては86.5%、4に対しては91.9%の生徒が前向きな回答をしていることから、ほとんどの生徒が英語で伝えることに対する自信を持てていることが確認できた。

・ライティングテストの結果

定期テストのなかで、与えられたトピックについて5文で書く自由英作文テストを行っており、10点満点で評価をしている。スペリングの誤りは減点対象とせず、主語・動詞の文構造を重視して採点を行っている。2学期の2回のテストの結果には、明らかな進歩が見られた。2回目では、1回目にくいつか見られた白紙解答がなくなり、平均点も4.4点から7.3点へと大きく伸びた。授業中、自分のことばで英語を書く機会が増えたことで、英語を書くことに慣れてきたのだと推測する。

教師の変化

- ・生徒の活動を中心とした授業展開を考えるようになった。
- ・生徒の反応や取組状況をより注意深く観察し、レベルに合った活動を考えるようになった。
- ・同僚と意見交換を積極的にするようになり、英語科全体で指導の方向性を共有できた。
- ・今まで以上に自分自身の英語力を高める努力をするようになった。

今後の課題（次の改善点など）

12月のアンケートでの自由記述欄に、発音がわからないので話せない、言いたいことを英語でぱつと言えない、というコメントがあった。今までの授業で深く触れていなかったところをつまづいている生徒がいるということがわかり、指導内容の不足に気づくことができた。今後も、よりの確に生徒のニーズを把握しながら、必要な指導を適切に行って、生徒に自信を与えられる授業を目指したいと思う。

まとめ・感想

今回の取組を通して、生徒がだんだんと英語を話すことに慣れていく様子を見ることができた。間違えてもいいから言ってみる、書いてみるという姿勢を評価することで、生徒たちの気持ちが変わったのだと思う。このような工夫ひとつで力を伸ばせるということがわかり、教材研究、授業改善がいかに大切かを改めて感じた。私自身の変化としては、生徒の可能性を信じるようになったことが一番である。授業改善の過程でさまざまな活動を生徒にやらせてみた。最初は「うちの生徒にできるだろうか」と思っていたが、想像以上の取組をしてくれた。この研修中、そのようなうれしい驚きがたくさんあった。生徒のために行った授業改善だったが、生徒から授業の可能性を教えてもらう結果となった。このような素敵な発見をする機会に恵まれたことに感謝し、今後も授業改善の努力をし続けたいと思う。

生徒の可能性を引き出すスピーキングの指導

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	----------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

- ・男子 21 名，女子 5 名
- ・英語に苦手意識を持つ生徒も多いが，授業を理解したいと熱心に取り組んでいる。全体的にはおとなしいが，発問に対して積極的に答えようとする生徒もいる。8 割以上の生徒が就職を希望している。

解決すべき課題

中学の頃から英語に苦手意識を持っており，英語を話すことに自信のない生徒が多い。教科書中の簡単な単語でも読めなかったり正確に発音できなかったりする。また，簡単な英語の質問に英語で答えることができなかったり，非常に時間がかかったりする。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・英語の授業についてのアンケート（6 月：回答数 25）

英語への苦手意識や授業の理解度を確認するため，6 月にアンケートを行った。

①授業の楽しさ

楽しい 6 人(24%)	どちらかといえば楽しい 13 人(52%)
どちらかといえばつまらない 4 人(16%)	つまらない 2 人(8%)

②学習内容

だいたい理解できていると思う 12 人(48%)	まあまあ理解できていると思う 9 人(36%)
あまり理解できていないと思う 1 人(4%)	理解できていないと思う 3 人(12%)

大半の生徒は授業が楽しく，理解できると感じているようだが，つまらない，理解できないと答えた生徒も数名いた。

- ・ALT と共同でのインタビューテスト（7 月：受験者数 18）

現状で生徒がどのくらい英語の質問に英語で答える力があるかを測るため，インタビューテストを行った。あらかじめ与えられた 10 個の英語による質問の中からランダムに 6 個を ALT が選んで質問し，その質問について生徒が英語で答えるというものである。生徒はテスト中に何も見ることはできない。満点は 20 点である。この時点では，答えがなかなか出てこなかったり文章で答えられなかったりする生徒が多かった。

(得点分布)

13点	14点	15点	16点	17点	18点	19点	20点
3人	2人	0人	2人	4人	2人	3人	2人
17%	11%	0%	11%	22%	11%	17%	11%

最高点 20 最低点 13 平均点 16.6

・授業観察

授業が楽しいと感じている生徒は英語を話すことに抵抗がなく、授業時の発問にも積極的に答えるが、授業をつまらないと感じている生徒は苦手意識が強く、声を出して練習することやペアワークなど、英語を話すことに積極的でない。

リサーチ・クエスチョン

内容や場面に合った基本的な英語でのやりとりを、英語らしいリズムやイントネーションで行うことができるようになるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：ALT と共同で行うインタビューテストで生徒の評価平均が 1 点以上上がる。

改善のための手だて

- 毎回の授業の導入時に簡単な英語による Q&A を行えば、英語で答えることに慣れるだろう。
 - ・前時に学習した内容に即した答えやすい質問をする。
 - ・単語で答えることができれば、文の形で答えるよう促す。
- 新出単語や発音の難しい語をくり返し声に出して練習すれば、発音に慣れ、会話のなかで使いやすくなるだろう。
 - ・教室を巡回し、全員が声を出す雰囲気を作る。
- 教科書の内容や場面の理解を深めたうえで音読活動をすれば、英語らしい話し方（読み方）ができるようになるだろう。
 - ・ Read & Look up やペアリーディングなど、生徒が飽きないよう多様な音読方法を工夫する。
 - ・ペアでのプレゼンテーションを課すことで全員に責任感をもたせ、取組を確実にさせる。
 - ・上達した生徒やうまくできた生徒はクラス全体の前でほめ、達成感や向上心を持たせる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・授業導入時の英語による Q&A

英語の質問を理解することに非常に時間がかかり、はじめは日本語でしか答えられなかったが、英語に直して言うてみるよう根気強く励まし続けることで、積極的に答える生徒も出てきた。しかし生徒の積極性には差が見られた。

・授業中の単語の発音練習と教科書の音読活動

発音の難しい語についてはゆっくりとくり返し練習させた。全員に声を出させることに毎回苦労したが、机間指導を行い、声を出すようを粘り強く促し続けた。音読活動を好まない生徒もいたが、そのような生徒もペアでの音読には楽しそうに参加していた。また、ペアでのプレゼンテーションがうまくいくと自然と拍手が起きることもあり、全員が授業に一体となって参加していることを感じられる場面も見られた。生徒が楽しく参加でき、達成感を味わえる活動を授業に取り入れることが大変重要であることを実感した。

・英語の授業についてのアンケート（11月：回答数22）

①授業の楽しさ

楽しい 10人(45%) どちらかといえば楽しい 9人(41%)
 どちらかといえばつまらない 2人(9%) つまらない 1人(4%)

②学習内容

だいたい理解できていると思う 7人(32%) まあまあ理解できていると思う 14人(64%)
 あまり理解できていないと思う 1人(5%) 理解できていないと思う 0人(0%)

③これまでの英語の授業で身についたと思う力（複数回答可）

英語を聞く力 10人(45%) 英語を話す力 9人(41%)
 英語を読む力 6人(27%) 英語を書く力 6人(27%)
 文法の知識 6人(27%) 単語や熟語の知識 10人(45%)

①については、6月に実施したもの比べると「楽しい」「どちらかといえば楽しい」と答えた生徒の割合が増え(76%→86%)、「どちらかといえばつまらない」「つまらない」と答えた生徒の割合が減った(24%→13%)。②については、「だいたい理解できていると思う」と答えた生徒の割合は減ったものの、「だいたい理解できていると思う」と「まあまあ理解できていると思う」を合わせた回答数は増えている(84%→96%)。また、「あまり理解できていないと思う」「理解できていないと思う」は大幅に減少した(16%→5%)。③については、特に「英語を話す力」を向上させることがねらいではあったが、「英語を聞く力」や「単語や熟語の知識」が身についたと感じている生徒も多く、総合的に英語力が向上したと生徒が実感できたのではないかと考えられる。

・ALTと共同でのインタビューテスト（11月：受験者数23）

7月に実施したものと同様の形式でレベルもほぼ同じ質問を20点満点で行った。

（得点分布）

13点	14点	15点	16点	17点	18点	19点	20点
1人	1人	1人	1人	6人	7人	2人	4人
4.3%	4.3%	4.3%	4.3%	26.0%	30.4%	8.6%	17.3%

最高点 20 最低点 13 平均点 17.5

（前回との比較）点数が上がった生徒 11人 変化しなかった生徒 3人 下がった生徒 2人

最高点と最低点は7月と同様であったが、平均点は1点程度(0.9)上がった。また、2回のテストを両方とも受験した16名の生徒の点数をそれぞれ比較すると、前回より点数が1点以上上がった生徒は11人(69%)いた。点数の変化以外にも、生徒が自信をもって答える様子やアイコンタクトをしながら答える姿勢が見られた。

教師の変化

昨年度までは、学力の低い生徒や意欲の低い生徒でも取り組めるよう、活動の内容を簡単なものにしたたり、レベルを極力下げたりしがちであったが、もっと難しい内容のものに取り組んだり、英語を話したりしてみたいと思っている生徒がいたのも事実である。しかし今年は、生徒によっては少し難しいと感じる活動や責任感をともなうペア活動なども課し、粘り強く続けてみた。途中であきらめて取り組まなくなる生徒も出てきたが、極力一人ひとりに声かけを行い、教師も一緒に活動に加わるなど意欲を喚起するよう努めた。また、時々生徒たちにプレゼンテーションの機会を与えることで、個々のスピーキング力を把握することができた。

今後の課題（次の改善点など）

今回の授業改善では、少しでも英語を話すことに慣れ、英語を使ってやり取りができるようになることを目標に実践を重ねてきた。しかし、やはり英語への根強い苦手意識をもつ生徒も少なくない。今後は、英語が好きではない生徒や苦手意識が強い生徒に対し、英語学習に対する意欲を喚起し、英語を学ぶ楽しさや必要性をいかに伝えていくかが課題である。

まとめ・感想

この研修を通して、他の受講者の先生方のユニークな取組やアカデミアの先生方の模擬授業などから授業に生かせるヒントをたくさんいただくことができた。2回の研究授業では客観的な分析やアドバイスをいただき、自分では気づけなかった授業の長所や足りない部分も知ることができた。また、活動の準備や教材研究を重ねるなかで、一方的に生徒に努力させようとするのではなく、まず自分自身が生徒たちと一緒に授業を楽しむことができるようになり、その姿が生徒にも伝わっていったのではないかと思う。教師も生徒も楽しみながら努力するクラスの雰囲気づくりの大切さを改めて感じることもできた。

対話力を高めるためのストラテジー指導

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	---------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

40名（男子20，女子20），39名（男子20，女子19），40名（男子20，女子20）の3クラスで，英語への興味・関心が高く，基礎力を持つ生徒と，そうでない生徒が混在している。音読など実技的な活動には積極的に取り組む。進路希望先は，4年制大学，短期大学，専門学校，公務員，就職と多様である。

解決すべき課題

- ・円滑に英語で日常的な話題について会話をする力が不足している生徒が多い。
- ・自信を持って音読する力が不足している生徒が多い。
- ・学んだ語彙や文法を正確に使って表現する力が不足している生徒が多い。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・意識アンケートの結果（7月実施） 調査対象は3クラス（116人）

英語の得意／不得意

とても得意だ	1人(0.9%)	どちらかといえば得意だ	35人(30.2%)
どちらかといえば得意でない	39人(33.6%)	不得意だ	41人(35.4%)

「ぜひ／どちらかといえば伸ばしたい」力・知識

聞く力	116人(100%)	話す力	115人(99.1%)	読む力	115人(99.1%)
書く力	115人(99.1%)	文法の知識	114人(98.3%)	語彙の知識	114人(98.3%)

音読に対する自信

とても自信がある	7人(6.0%)	どちらかといえば自信がある	33人(28.5%)
どちらかといえば自信がない	56人(48.3%)	まったく自信がない	20人(17.3%)

「とても／どちらかといえば意味がある」と思う学習活動

スピーキング活動	79人(68.1%)	リスニング活動	110人(94.8%)
リーディング活動	110人(94.8%)	ライティング活動	101人(87.1%)
音読活動	111人(95.7%)	文法説明（文法学習）	111人(95.7%)
単語テスト	108人(93.1%)		

<考察>

音読などを含めて英語への苦手意識が強く，ほぼ全員が4技能と言語知識（語彙・文法）を伸ばしたいと望んでいるが，他の活動に比べてスピーキング活動に意義を感じていない生徒が多い。自信を持てるように支援しながらスピーキング活動に意義を感じさせる工夫をすることが必要である。リスニングをとともう双方向的なスピーキング，すなわちインタラク션을重視し，英語でやりとりをする能力の育成に焦点を当てて授業改善することが課題解決につながるのではないかと考えた。

リサーチ・クエスチョン

生徒が、生徒同士あるいは教師と英語で活発にインタラクションができるようになるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：他の生徒や教師と英語で活発にインタラクションできる生徒が全体の 70%以上になる。

<判断基準> 指示の理解と行動の適切さ／発問に対する応答の適切さ／やりとりの積極性

改善のための手だて

○ 基本的会話ストラテジー（CS）を習得させれば、円滑に英語で日常的な話題について会話できるようになるだろう。

・対話練習のなかで基本的な CS を習得させる。

<CS の具体例> Openers/Closers (会話の始め方と終わり方), Rejoinders (相づち), Fillers (間つなぎ), Statements (意見や主張), Follow-up Questions (関連質問)

・教科書本文に関する技能統合型タスクに取り組み、ペアによる答えの確認やグループによる発表準備の際に CS を使わせる。

<技能統合型タスクの例>

*本文を読む→ターゲット表現を用いた例文やスキットを作る→発表する

*本文を読む→ストーリーの続きを書く／登場人物のコメントを聞いて誰かを当てる
／物語文を会話文にするなど、本文の形式を変えて発表する

○ 発音練習の質と量を高めれば、自信を持って音読できるようになるだろう。

・語彙や本文の発音練習において、意味理解を伴う段階的指導を取り入れる。

<実践例>

*音と文字を関連づけながら、語句の発音を全体へ提示する。

*ペアで blanked text reading を行い、本文の内容を頭のなかで視覚化させる。

○ 語彙を増やし基本的文法を習得させれば、正確に自己表現できるようになるだろう。

・使用場면을重視した語彙学習、協働的文法学習などを通して、語彙や基本的文法を習得させる。

<実践例>

*単語集に基づく小テストを実施し、画像や使用場面に関連づけて教科書の語句を導入する。

*目標文法について、ペアで確認をさせたり、グループで作文やスキットを作らせたりする。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

<検証方法>

I. 意識アンケート（7, 12月実施） 調査対象は3クラス 7月（116人）、12月（112人）

II. 会話テスト（7月, 12月実施） 調査対象は3クラス 7月（116人）、12月（118人）

*月ごとに異なるテーマで Writing を行った後、ペアで会話テストを実施した。

III. 使用場面ごとの CS 選択テストと CS の筆記テスト（空所補充）（12月実施：118人）

IV. 会話テストの振り返り（12月実施：118人）

*録音した会話テストのサンプル数種をクラス全体で分析し、フィードバックを行った。

- ・「円滑に英語で日常的な話題について会話すること」にかかわる変化

会話の持続時間（会話テスト）

	N	1分以上2分未満	2分以上
7月	116	68人(58.6%)	30人(25.9%)
12月	118	△80人(67.8%)	△38人(32.2%)

Fluency の評価（会話テスト：教師による全体的評価）

*評価項目：言いよどみ・沈黙の量、話題展開の自然さ、質問・応答の回数

	N	Very good または Good
7月	116	75人(64.7%)
12月	118	△106人(89.8%)

CS の習得状況（使用場面ごとの CS 選択テストと CS の筆記テスト（空所補充））

*それぞれの CS に関わる問題ごとの正解率の平均

選択テスト	72.9%	筆記テスト	83.9%
-------	-------	-------	-------

会話テスト後の生徒の振り返り（例）

- *くりかえし、相づち、疑問詞で始まる疑問文などを使うことで、会話が深く広がっている。
- *高校で習った表現がよく使えていて、会話が弾んでいて、滑らかに長く続けられている。
- *Uh-huh などを入れて会話が途切れないようにして英語ペラペラ感が出ていた。（原文まま）

CS の使用頻度（ペアまたはグループ活動）

	N	よく使う	どちらかといえば使う
7月	116	12人(10.4%)	63人(54.3%)
12月	112	△22人(19.7%)	▼60人(53.6%)

CS の使用頻度（会話テスト）

	N	3～4回	5～6回	7回
7月	116	12人(10.4%)	2人(1.7%)	3人(2.6%)
12月	118	△50人(42.4%)	△29人(24.6%)	△22人(18.7%)

- ・「自信をもって音読すること」にかかわる変化

音読についての意識

	N	とても自信がある	どちらかといえば自信がある
7月	116	7人(6.0%)	33人(28.5%)
12月	112	△13人(11.6%)	△45人(40.2%)

発音の評価（会話テスト：教師による全体的評価）

*評価項目：発音、アクセント、イントネーション、リズム、ポーズ、声量、スピード

	N	Very good または Good
7月	116	32人(27.6%)
12月	118	△44人(37.3%)

- ・「学んだ語彙や文法を使って正確に表現すること」にかかわる変化

Accuracy の評価（会話テスト：教師による全体的評価）

*評価項目：時制、主語と動詞の整合性、文法や語彙の正確さと使用場面の適切さ

	N	Very good または Good
7月	116	31人(26.7%)
12月	118	△40人(33.9%)

<考察>

基本的 CS の習得は、fluency と accuracy を向上させ、インタラクションの活性化に貢献した。CS が会話に余裕をもたらしたことが、accuracy が向上した理由の一つではないかと推察する。発音練習による苦手意識の軽減については、音読に自信を持つ生徒が増えたことから多少の成果が見受けられるが、自律的学習を促して量を増やし、練習の質をさらに高める必要がある。Accuracy の向上については、使用場面への意識やインタラクションのなかでの使用を重視した指導により、語彙・文法にさらに注意を向けるようになった結果かもしれない。受容語彙サイズテスト（相澤・望月, 2010）の平均も 1686.8 語（9月）から 1704.7 語（12月）に伸びてきている。今後も生徒に達成感を与えながら、言語活動のなかで、使える文法・語彙の知識が蓄積していくような指導を心がけたい。

教師の変化

- ・生徒の現状を把握し、インタラクションを重視した skill-based approach を指導に取り入れた。
- ・話題を生徒にとって身近なものにして、英語でコミュニケーションを図る機会を増やした。
- ・発音と文法の指導方法や時間管理を工夫した。
- ・活動の目標や評価基準を明確に伝えることへの意識が高まった。
- ・技能統合型のタスクと生徒の自己または相互の振り返りの機会を増やした。

今後の課題（次の改善点など）

- ・CS を活用したインタラクションをとまなう技能統合型の協働的な言語活動をさらに考案する。
- ・より発展的な活動に取り組みせながら、生徒の即応力や創造性を高める。
- ・発音、語彙、文法の体系的指導を通して英語への苦手意識を軽減し、accuracy を向上させる。
- ・まだ 2 割強の生徒（335 人中 73 人）が使用場面ごとの CS の選び方に難しさを感じているので、今後もさまざまなコンテキストを与えて継続的に練習させる必要がある。

まとめ・感想

本研修は、生徒や自分自身を省察し、明確な目標を持って授業を改善するよい機会となった。コミュニケーション活動と言語学習の両方にかかわるテーマを選んだことで、両者にとって有効なインタラクションについてさまざまな気づきを得ることができた。国際言語文化アカデミアの先生や研修に参加した先生がたに深く感謝している。勤務校の先生がたと協力しながら、研さんや授業改善に励みたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

Kehe, D., & Kehe, P. D. (2013). *Conversation Strategies: Pair and Group Activities for Developing Communicative Competence*. USA: Pro Lingua Associates.

相澤一美・望月正道. (2010). 『英語語彙指導の実践アイデア集—活動例からテスト作成まで』大修館書店

上達を実感させるスピーキングの指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

クラスの人数は38名（男子19名、女子19名）である。このクラスは活発な生徒が多く、さまざまな活動にまじめに取り組む様子が見られる。ただし、英語については苦手意識を持っている生徒が多い。生徒の多くは4年制大学への進学を希望しているが、家庭学習の習慣が身につけていない。そのため、授業時間内でいかに意欲を高めて学習内容を習得させることができるかが重要であると考えられる。

解決すべき課題

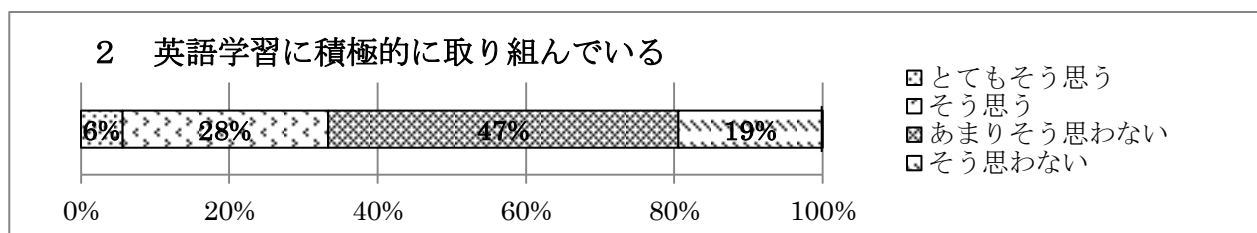
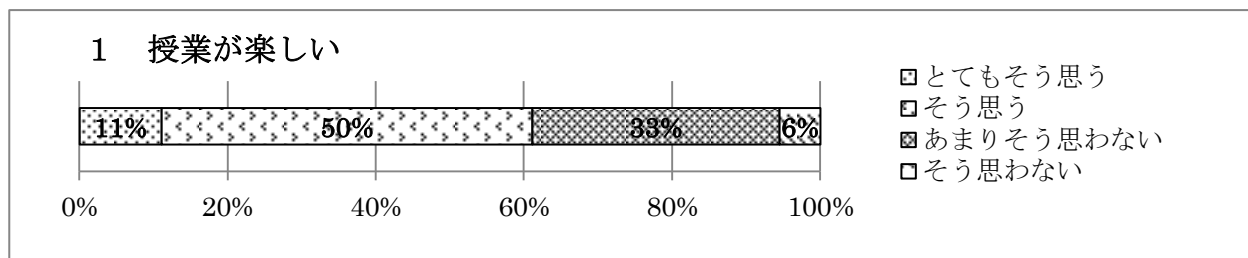
入学時から「英語が嫌い」「不得意である」と感じている生徒が多く、新しい表現や複雑な文に遭遇するとやる気をなくしてしまい、最初から取り組もうとしない様子がしばしば見られる。既習語句の発音練習などではある程度声が出るが、授業時間全体を通して受け身になりがちで、すすんで英語で発話したり、英語を使って自分から何かを伝えようとしたりする生徒はきわめて少ない。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

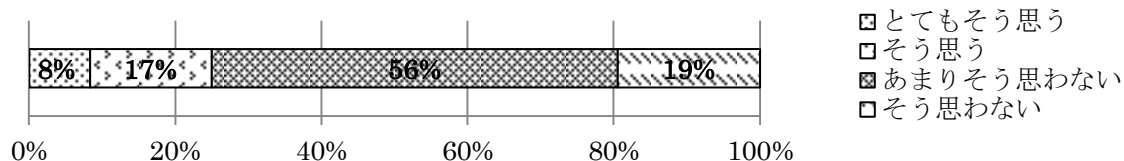
- ・事前アンケートの実施（6月：回答数36）

授業の評価も含め、英語学習への意欲や自信に関してどのような状況にあるかを調べた。

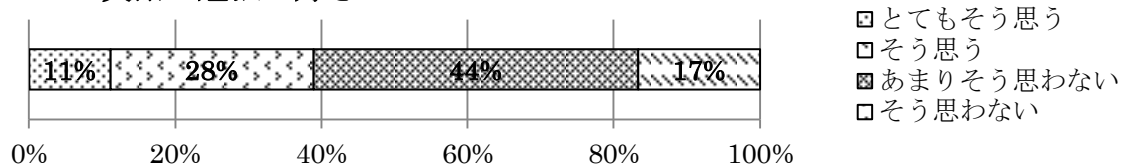
1. 授業は楽しいか。
2. 英語の学習に積極的に取り組んでいるか
3. 毎日の授業を通じて、英語を話す力が伸びていると思うか。
4. 英語の勉強は好きか。



3 毎日の授業を通じて、英語を話す力が伸びている



4 英語の勉強が好きだ



授業が楽しいと感じる生徒は61%であり、楽しいと感じている生徒が過半数であったが、6%の生徒は、そう思わないときっぱり否定しており、この生徒たちにどのように英語の楽しさを伝えられるかが課題である。英語学習に積極的に取り組んでいる生徒については34%にとどまった。個々の授業で生徒が積極性を見せることがあっても、学習意欲を持続させていくことは難しいということがあらためてわかった。また、毎日の授業を通じて、英語を話す力が伸びていると感じる生徒はわずか25%であった。これはスピーキングの訓練をほとんどしていなかったことが原因であると思われる。英語の勉強が好きだと感じる生徒は39%であったが、好きでないと思っている生徒に対する手当が必要であることはもちろんのこと、この「好きである」という生徒の力をさらに伸ばすことにも気を配らなければならないと思った。

・生徒の取組状況の観察

ウォームアップ（あいさつ等）やオーラルインタラクションにおいて、自分から英語を使って話してみようとする生徒は数名いるが、全体的に英語を使って自己表現をしようという雰囲気にはならず、単発で終わってしまいがちであった。

<考察>

アンケートの自由記載欄に、「英語を話す力をつけたい」「将来英語を使用したい」という意見も複数見られ、英語の苦手意識を持ちながらも、英語の必要性に関しては肯定的な考えを持っている生徒が多いと思われる。授業が楽しい、英語で話すことが楽しいと思える雰囲気づくりをすれば、意欲的に授業に取り組む生徒が増えていくのではないかと感じた。

リサーチ・クエスチョン

生徒が授業を楽しみながら積極的に学習に取り組み、英語を話す力の向上を感じられるようになるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・英語の授業が「とても楽しい」、「楽しい」と感じる生徒の割合が70%を超える。

・英語で話す力が「とても伸びた」、「伸びた」と感じる生徒の割合が70%を超える。

改善のための手だて

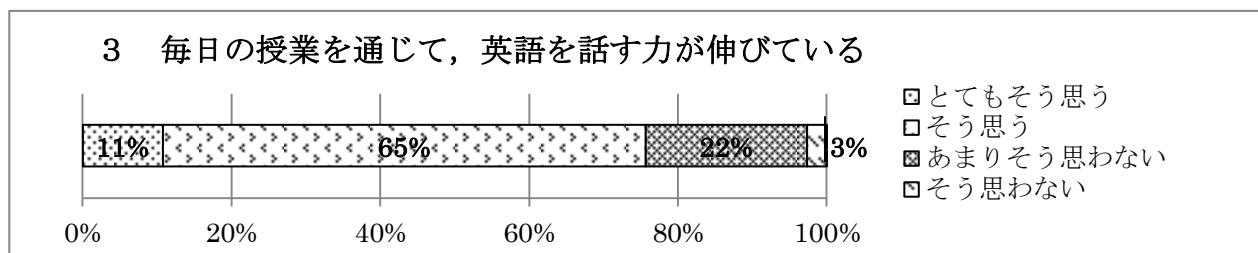
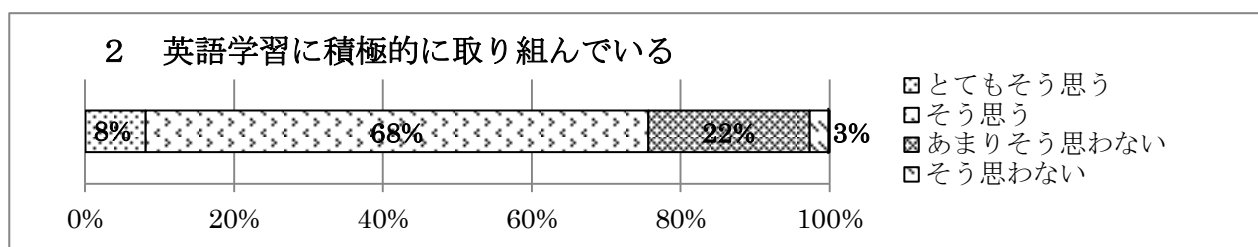
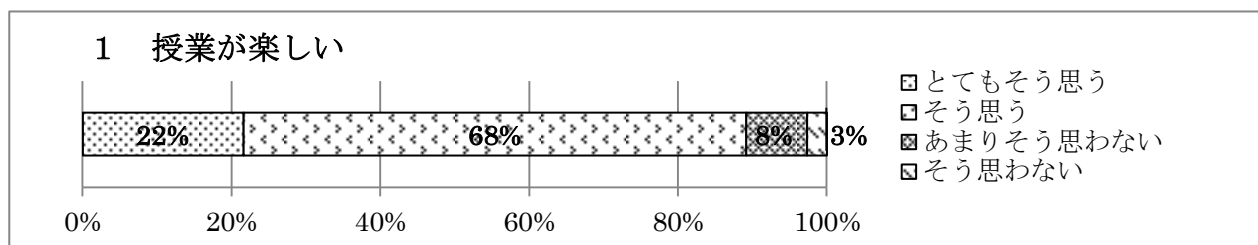
- ICT を使った活動を取り入れれば、学習への関心が高まり、楽しんで授業に参加するようになるだろう。
 - ・画像とともに語句を提示することで使用場面を意識させる。
 - ・暗唱活動の支援としてプレゼンテーションスライドを使う。
- 毎回の授業で、英語でやり取りする時間を設ければ、抵抗感がなくなり、話す力の伸びを感じることができるだろう。
 - ・ウォームアップとしてペア、グループで簡単な会話活動を行う。
 - ・教科書の英文を読む前のオーラルインタラクションのなかで生徒の発話を促す。
- 毎時間の授業への取組を振り返らせれば、達成感や課題意識が高まることで、学習意欲も向上するだろう。
 - ・自己評価リスト「Yes! I can do it! リスト」に活動を達成することができた回数等の数値の他、できるようになったことや課題などについて記述させる。

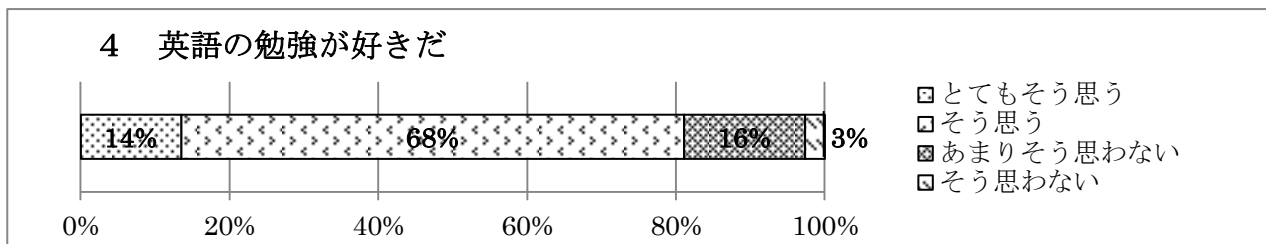
生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・自己評価リスト「Yes! I can do it! リスト」の分析（7月以降の毎授業後）

当初はほとんどの生徒が数値のみを書いて提出していたが、記述欄にしっかり記入して提出する生徒が多くなってきたことから、自己評価活動の意義が浸透してきたことが感じられた。とくに英文暗唱・スピーチの伸びや達成感を感じている生徒が多かった。
- ・事後アンケートの実施（12月：回答数37）

授業改善後、事前アンケートと同内容の項目で調査を実施した。





どの項目も肯定的な回答が増加し、改善の目安とした目標値に達した。「毎日の授業を通じて、英語を話す力が伸びた」と感じた生徒の増加については、発音練習やペアワーク、英文暗唱やスピーチを含むスピーキング重視の授業のなかで、ある程度話すことへの自信が高まった結果であると思われる。また、「授業を通じて英語が好きになった」と感じる生徒の増加については教師主導の授業から生徒の言語活動中心の授業にしたことで、生徒がやりがいを感じていることの表れではないかと思われる。

教師の変化

以前は授業を計画的に組み立て、しっかりと教材研究をして臨めば、生徒は自然とついてくるものと思っていた。だが、教師の理想とする授業が生徒のニーズと合致するとは限らず、場合によっては学習意欲を奪ってしまうこともあった。この研修を通じて、アクション・リサーチの手法での授業改善のしかたを学ぶことができ、授業を通して感じたことや反省点を毎回記録し、次回以降の授業に役立てることができるようになった。また、アカデミアのかたがたをはじめ、他の受講者の先生がたに刺激を受け、教材研究や教材作成に意欲的に取り組むようになり、毎回の授業が以前にも増して楽しみになった。

今後の課題（次の改善点など）

アンケートの結果は改善されたが、まだまだ英語をうまく話すことができない、英語が苦手だと感じる生徒は多数おり、引き続き授業改善を進めていく必要がある。また、授業のみならず、家庭での英語学習の必要性や英語を使って交流することの楽しさを伝えられる方法を考えていきたい。

まとめ・感想

今回の研修を通して、授業改善の手だてがはっきりするようになっただけでなく、授業の組み立て方が総合的に見えるようになった。アンケートを通して、生徒の意見を数値化することにより、これまで生徒のためにと考案した活動の数々が自己満足に終わっていたことが明らかとなり、生徒に考えさせ、主体的に活動させることがいかに大切かということをあらためて考えさせられた。今後は自分の授業を改善することにとどまらず、学んだことや得られたことを現場に還元していくことで、教科や学校全体としての授業改善につなげていきたい。最後に、非常に多くのアイデアやヒントを与えて下さったアカデミアの先生方、他の受講者の方々、そして今回の授業改善において、新たな試みを多数取り入れ、正味半年のなかでめまぐるしい変化を与えてしまったにもかかわらず、非常に好意的に取り組んでくれた生徒たちにこの場を借りて感謝したいと思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

横溝 紳一郎・柳瀬 陽介.(2010).『生徒の心に火をつける—英語教師田尻悟郎の挑戦』教育出版
木村達哉.(2010).『ユメ勉～夢をかなえる英語勉強法&参考書』アルク

生徒の意識を変えた英語スピーチ活動

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・ 習熟度 ・小集団
-----	--------------	----	---	----	--

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は習熟度別応用クラス2クラスの52名である。男女比はほぼ5:5で、英語に苦手意識を持つおとなしい生徒が多い。大学受験に英語が必要だという生徒は少ない。教師に対しては協力的であるが、全体的に受け身の姿勢で授業を受けており、積極的に発言することはあまりない。

解決すべき課題

- ・生徒が英語を使って自己表現する機会を与えられていない。
- ・生徒が英語学習に目的意識を持っていないように感じる。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・授業アンケート（9月：回答数45人）

「英語の4技能で一番役に立つのはどれだと思うか」

聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと
7人(15.6%)	26人(60.0%)	6人(13.3%)	5人(11.1%)

「授業内で英語を話す機会は多くあった方がよいと思うか」

必要だし 話す機会がほしい	必要なのはわかるが できれば話したくない	必要ないし 話す機会はなくてよい
6人(13.3%)	35人(77.8%)	4人(8.9%)

「英語を勉強する必要性を感じるか」

大いに感じる	まあまあ感じる	どちらともいえない	あまり感じない	ほとんど感じない
16人(35.6%)	15人(33.3%)	12人(26.7%)	2人(4.4%)	0人(0.0%)

<考察>

多くの生徒たちは「話す力」が一番役に立つと考え、英語を話す必要性を感じているが、人前で話すことに抵抗感を持っていた。この心理的負担を取りのぞき、話すことに対して前向きな姿勢を持つ指導と環境づくりが必要であると感じた。明確に英語を勉強する必要性を感じていない3割以上の生徒にも、自分の英語で話し伝える体験を通して、その必要性を感じさせたいと思った。

リサーチ・クエスチョン

生徒に英語を学ぶ必要性を理解させ、口頭での自己表現に対する抵抗感を減らすにはどのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：・「英語を勉強する必要性を感じる」という生徒の割合が 8 割を超える。
・全員の生徒が原稿を準備してスピーチテストでスピーチを行うことができる。

改善のための手だて

- 原稿作成を手厚く支援しながら、自己表現への意欲を高めれば、英語によるスピーチを行うことができるだろう。
- ・生徒が興味を持ち、クラスメイトに情報を伝えたいようなテーマを設定する。
 - ・モデル文、フレーム、文例を与え、無理なく原稿作成ができるようにしながら、できるだけ自分の英語（暗記や丸写しではなく自分で考えた英語）を使うことを促す。
 - ・複雑な翻訳作業に陥ることを避けるため、日本語での下書きはさせない。
- 負担の少ない形式でスピーチをさせれば、無理なく全員の生徒がスピーチをすることができるだろう。
- ・5名1組のグループにし、別室にてそのメンバーの前でスピーチをさせる。
 - ・原稿を見ることを許可しながら、できるだけ聴衆を見ることを促す。

<スピーチテストの評価基準>

	構成	内容	態度
A (3点)	与えられたフレームを使っている。	与えられた例文以外に、自分で考えた文を3文以上入れている。	原稿を一度も見ず、かつアイコンタクトもできている。
B (2点)	フレームを使おうとしているが内容伝達に支障をきたす誤りが1・2箇所ある。	与えられた例文以外に自分で考えた文を1文か2文入れている。	原稿をたまに見ているが、適度にアイコンタクトができている。
C (1点)	フレームを使おうとしているが内容伝達に支障をきたす誤りが3箇所以上ある。	与えられた例文以外は使っていない。	原稿を読んでいるだけで、アイコンタクトはほとんどない。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・スピーチ活動への取組状況

- *ふだんはつまらなそうに授業を受けている生徒も、スピーチ原稿を作成する際には、自分の言いたいことをどう英語で表現したらよいかを興味深そうに質問してきた。
- *ふだんは与えられた活動をまったくしようとしなない生徒もいるが、スピーチ活動に関しては、原稿作成から発表まで、まったく取り組まない生徒は一人もいなかった。
- *スピーチテストをすると聞いたとたんに猛反発する生徒が多数見られたが、実際に発表する段階になると、そのような生徒たちも含め、ほぼ全員が緊張しながらも生き生きと発表していた。
- *多くの生徒がスピーチ中に原稿を何度も見ており、言い間違いをすることも多かったが、なんとかアイコンタクトをとろうとするなど、「英語で伝えたい」という想いが感じられた。

・授業アンケート（12月：回答数 45）

「英語を勉強する必要性を感じるか」

	スピーチ活動後	(スピーチ活動前)
大いに感じる	△ 18人(40.0%)	16人(35.6%)
まあまあ感じる	△ 25人(55.6%)	15人(33.3%)
どちらとも言えない	▼ 2人(4.4%)	12人(26.7%)
あまり感じない	▼ 0人(0.0%)	2人(4.4%)
ほとんど必要ない	0人(0.0%)	0人(0.0%)

「スピーチテストについての意見・感想（テスト後）」

できればもうやりたくない。
発表するときは先生と二人だけでよい。
もっと授業でたくさん話したほうがよい。
このままのやりかたでいいと思う。
少人数で別の教室でやったのはよかった。
あんまり恥をかくものはやりたくない。
丸暗記しなくてもいいならやってもよい。
原稿を見ながらなら発表できる。

<考察>

「英語の勉強の必要性を感じる」と回答した生徒は、スピーチ活動前の 68.9%から 95.6%に増加した。一連のスピーチ活動のなかで、自分の英語を使って自分自身のことを伝えるという体験をすることで、英語を学ぶ意義を実感できたのかもしれない。テスト後の感想からは、まだとまどっている様子も見受けられるが、ある程度の達成感や英語を話すことへの前向きな姿勢もうかがえる。

教師の変化

- ・生徒の英語力から考えて自己表現活動は難しいだろうと思っていたが、実施してみると思った以上に反応はよく、英語に対する苦手意識が強いなかで、英語の授業を楽しいと思わせる鍵は自己表現にあると感じた。
- ・今回は自分が担当クラスのみでスピーチの指導とテストを行ったが、実施している様子を見た他の教師もスピーチテストの実施に関心を示してくれた。今後、学年、学校共通の自己表現活動を指導計画に位置づけられる可能性を感じた。

今後の課題（次の改善点など）

- ・今回は原稿作成から手厚い支援を行い、あまり目標を高く設定せずに、英語に苦手意識が強い生徒でもなんとか英語でスピーチができるということに主眼を置いたが、今後は生徒が自主的に取り組みながら自分の持っている言語知識を使えるような自己表現活動を、生徒の力に応じてデザインできるようになっていきたい。
- ・今回の取組を踏まえ、教材・指導法・テスト・評価法からなる、より質の高い「自己表現活動の指導モデル」を開発・提示し、学年全体・学校全体を巻き込みながら、生徒の学習意欲を高めるシラバスづくりに貢献していきたい。

まとめ・感想

この研修に参加することで自分の授業に欠けていた「生徒による自己表現活動」と向き合うことができた。今回のスピーチテストはほんのきっかけに過ぎないが、自分の授業を見つめ、改善する勇気を与えてくれたと思う。また、「この生徒にはこの活動は無理」ということはなく、目の前の生徒に合わせて活動を調整し、生徒にとって有意義な活動にできる力こそ重要なのだとあらためて実感できた。

授業改善にあたって参考にした資料等

ELEC 同友会英語教育学会実践研究部会.(2008).『中学校・高校 英語 段階的スピーキング活動 42』三省堂

会話を継続させる能力を高める指導の工夫

科目名	英語表現 I	学年	1	形態	HR・習熟度・ 小集団
-----	--------	----	---	----	--------------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

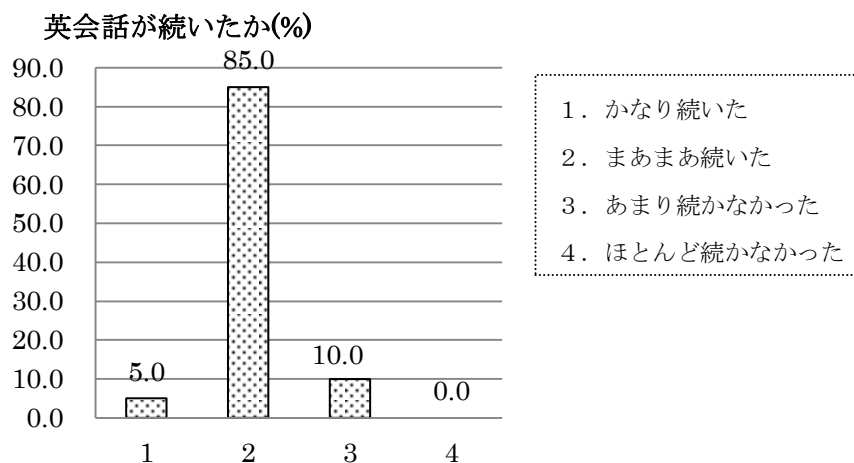
対象生徒は小集団クラスの20人（男子11人，女子9人）である。どの生徒もまじめで一生懸命授業に取り組む。また英語が好きな生徒が多く，ペアやグループでの発表を自発的に行う生徒も多い。人間関係も良好で，話を素直に聞くことができる。95%の生徒が4年制大学・短期大学進学希望である。週2時間のうち，1時間はALTとの授業を実施している。定期テストの結果から見ると，クラス全体の学習到達度は学年のなかでも平均的なものであると考えられる。

解決すべき課題

多くの生徒が英語を話せるようになりたいと思っているが，実際はなかなか自分から話すことができない。暗記した英文は発表することができるが，ALTに積極的に話しかける生徒はほぼ皆無である。生徒同士の会話練習では，ある程度形が決まった質問とその受け答えが一通り済むと会話が止まってしまう傾向にある。自分たちで質問を考えたり答えたりしながら，困難なく会話を続けられるかどうか課題である。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・会話活動の振り返り（アンケート：回答数20）



英会話が「まあまあ続いた」という生徒が多数を占めてはいるが，「かなり続いた」という達成感を持たせた生徒はわずか5.0%であった。「あまり続かなかった」1割の生徒に気を配りながら，より多くの生徒に，会話を継続できた達成感を持たせたいと考えた。

リサーチ・クエスチョン

英語で自主的に会話を続けられるようにするにはどのような指導をすればよいか。
改善の目安：「(会話が) かなり続いた」と実感する生徒が 5 割以上になる。

改善のための手だて

○ 「聞き返す」「時間をかせぐ」「話題を変える」などの会話を続けるための方略を学べば、会話が続くようになるだろう。

・方略の英語表現を音読で導入し、短い会話例を用いてペアで練習させる。

(例) 「聞き返す」: I beg your pardon?/ I'm sorry?/ Could you speak more slowly?

「時間をかせぐ」: Well, / Let me see.

「話題を変える」: Let me ask you another question. /May I ask another question?

○ 疑問文の作り方を復習し、疑問系の定型表現を学べば、会話を続けられるようになるだろう。

・平叙文から疑問文を作る練習を段階的にさせる。

(例) <第1段階> I bought a T-shirt yesterday. (下線部をたずねる疑問文を作る)

<第2段階> I went to Yoyogi last Sunday. (思いつく限りの疑問文を作る)

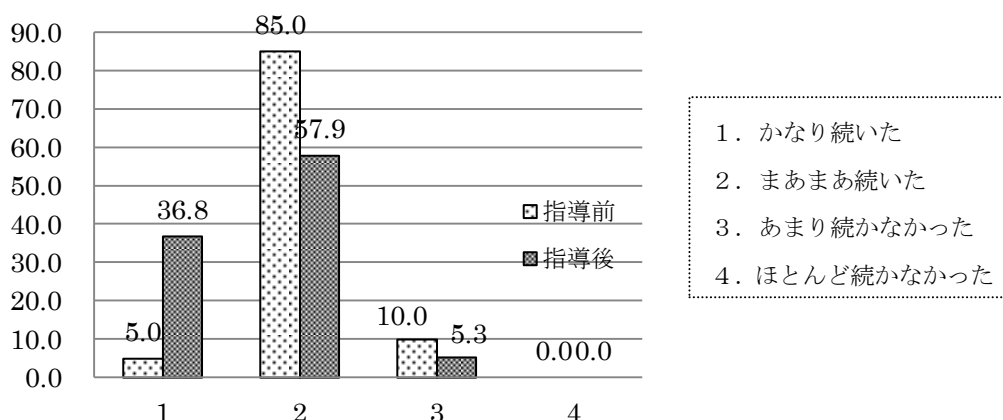
* 発話のカウント方法

ペアワークの際、各ペアにピンク色の細長い紙が 30 枚入った封筒と、同数の黄色の長細い紙が入った封筒の 2 つを渡す。生徒は相手に質問したらピンク色の紙を封筒から取り自分の手元におく。答えたときには黄色の紙を取る。6 分間の会話が終了したら、それぞれの色の紙の枚数を数え疑問文とその答の数を集計する。

生徒の変化 (事後の検証結果)

・会話活動の振り返り (アンケート: 「指導前」回答数 20 / 「指導後」回答数 19)

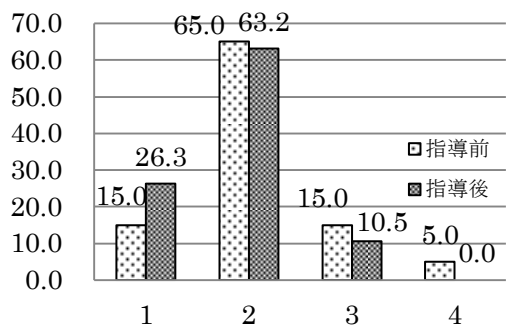
英会話が続いたか(%)



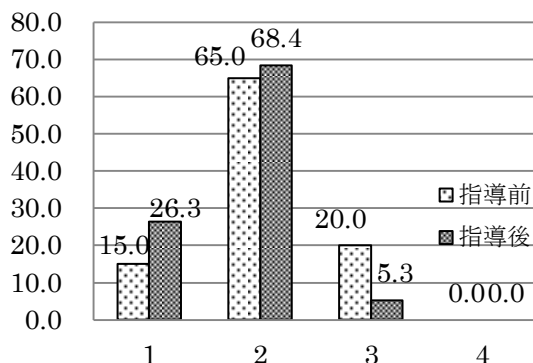
会話が「かなり続いた」と答えた生徒の割合が指導前に比べて 7 倍に増えた。指導がある程度の成果を上げたと考えられるが、改善の目安とした 5 割には届かなかった。しかし指導後のアンケートの自由記述欄では、74%の生徒が、「英会話力が向上した」「練習していくうちにいろいろな質問ができるようになった」「質問のレパートリーが増えた」「英会話が楽しくなった」等の肯定的なコメントを

書いていた。英語を話すことに対する達成感や意欲が高まったと考えられる。

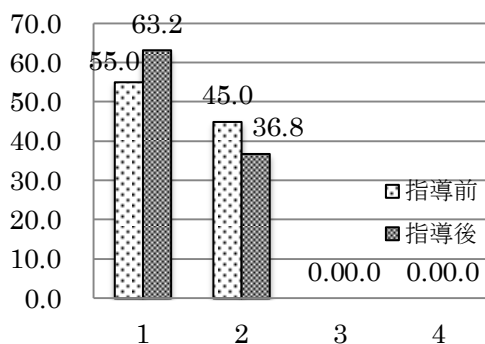
質問を思いついたか(%)



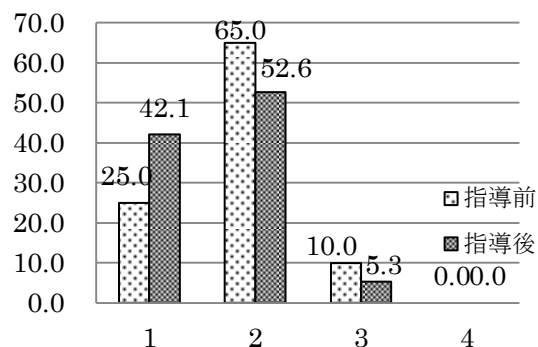
質問を英語で言えたか(%)



答えを思いついたか(%)



答えを英語で言えたか(%)

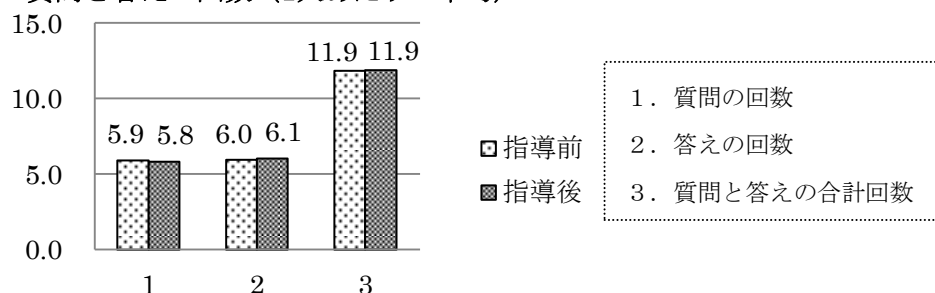


- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1. かなり思いついた／言えた | 2. まあまあ思いついた／言えた |
| 3. あまり思いつかなかった／言えなかった | 4. ほとんど思いつかなかった／言えなかった |

「質問」については、「あまり／ほとんど思いつかなかった／言えなかった」という生徒の割合が減り、一定の指導効果はあったように思えるが、「かなり思いついた／言えた」というレベルではともに 15.0%から 26.3%に増えてはいるものの、まだ 3 割に満たない。これが「会話がかなり続いた」という達成感をさまたげていると思われる。一方、「答え」については、「かなり思いついた」という生徒の割合は 63.2%まで上がったが、「かなり言えた」と答えた生徒は、増えたものの 42.1%に留まった。日本語では答えを言えるが、英語では表現できない状況が想像できる。答え方について授業中に指導をする時間がほぼ取れなかったことがその原因と思われる。

・質問とその答えの回数

質問と答えの回数 (1人あたりの平均)



質問，答えともに回数が増加するだろうと予想していたが，実際には増加は見られなかった。生徒に確認したところ，「質問されなくても自分から話し始めた」，「ひとつの質問に対して以前よりも長く話せるようになった」ということがその理由として考えられる。このことから，回数は増加しなかったが，自発的な発話が増え，一つひとつの発話の情報量が多くなっていることが推測される。

教師の変化

- ・ アンケートを取ることにより，生徒の実態をよりよく把握できるようになった。生徒からのフィードバックがないと自分勝手な生徒理解に陥ってしまう可能性があることに気づいた。また，アンケートに回答することで，生徒自身が自分の学習態度や意欲を再認識できるということがわかった。
- ・ 会話を続けるうえで，コミュニケーションの必然性が重要であることに気づいた。毎回同じペアで会話をしたために，会話練習を行えば行うほど相手のことを知ることで，質問したいことが減ってしまったと生徒が言っていた。
- ・ これまでは，指導やワークシートの内容を自分の経験知で決定していた。しかし質的・数量的なデータを活用したアクション・リサーチによる省察的授業改善によって，授業の受け手である生徒の気持ちや意識を知ることができるようになり，それを理解したうえで授業の準備をするようになった。

今後の課題（次の改善点など）

- ・ 学校行事の関係で改善策である指導・活動を本格的に始めたのが10月中旬となってしまう，指導に十分な時間を割くことができなかつたので，今後，授業に改善の必要が生じた場合は，より計画的・継続的に行う必要がある。
- ・ 今回は質問に対する答え方の指導をする時間が十分には取れなかつたので，今後は指導時間を確保する工夫が必要である。次の機会には疑問文だけでなく，多様な答え方についても指導したい。
- ・ 会話中に，“How about you?”を何回も使っている生徒が見られた。会話の場面に応じた，多様な表現を指導していきたい。
- ・ 6分間の自由英会話中に日本語で話す生徒が多少いた。会話中に日本語の使用を禁止はしなかつたが，活動の目的を十分に理解させて取り組ませる必要があるだろう。

まとめ・感想

アクション・リサーチの手法での授業改善を始める前は，あまり期待はしていなかつた。しかし実際始めてみると，授業中の生徒の反応が改善し，アンケート調査からも生徒の状況をよりよく理解することができた。その結果，生徒とのコミュニケーションがさらに充実したものとなった。相手を知ることがいかに大切か実感した。

授業改善にあたって参考にした資料等

森沢洋介.(2010).『どンドン話すための瞬間英作文トレーニング』ベレ出版

森沢洋介.(2009).『ポンポン話すための瞬間英作文パターン・プラクティス』ベレ出版

横山吉樹・大塚謙二.(2014).『英語教師のためのフォーカス・オン・フォーム入門』明治図書

佐野正之(編著).(2005).『はじめてのアクション・リサーチー英語の授業を改善するために』大修館書店

即興での対話力を高めるスピーキング指導の工夫

科目名	英語表現Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・ 小集団
-----	-------	----	---	----	--------------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2年生少人数クラス4クラスの78名（男子28名，女子50名）である。習熟度別クラスではないので，英語が得意な生徒もそうでない生徒もいる。ほとんどの生徒が四年制大学への進学を希望しており，英語の学習には前向きである。

解決すべき課題

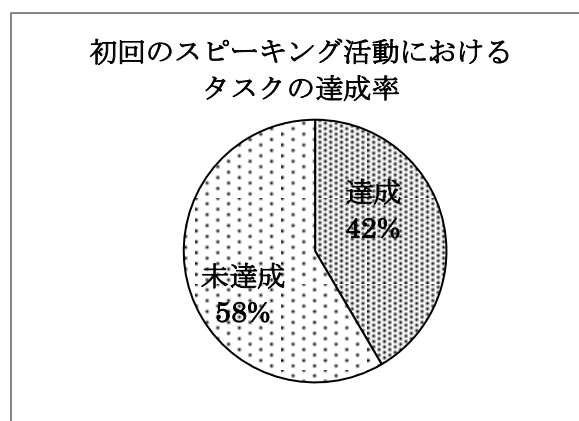
生徒が即興性の高いインタラクションのなかで英語を話す能力を身につけられていないことが課題である。あらかじめ準備されたモノログ形式のスピーキング活動であれば，多くの生徒が英語で発話することができる。しかし，即興でのスピーキングではことばに詰まってしまい会話が進まず，多くの生徒がつい日本語を使ってしまう。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第1回スピーキング活動後の生徒の振り返り（9月実施）

生徒が即興性の高いインタラクションのなかでスピーキングをどの程度行うことができるのかを検証するために，授業内でスピーキング活動を行った。この活動は，例えば「2つのアルバイト先のうち一緒に働くならどちらを選ぶか？」のように，生徒が2人で会話をしながら協力して問題を解決するというものである。

活動後に，タスクを達成し問題解決に至ることができたかを「Reflection Sheet（振り返りシート）」に記入させた。データを得ることができた生徒65名のうち，27名が会話を行って問題を解決できたと感じており，その割合は42%であった。



また、「Reflection Sheet」の自由記述から、一部の生徒はスピーキングの上達を目指す前向きな姿勢を示しているものの、多くの生徒がスピーキングに困難を感じているということがわかった。

プラスのコメント	マイナスのコメント
<ul style="list-style-type: none"> ・難しい。もっと自分の知識を十分に使えるようになりたい。 ・会話するのが苦手なので難しかったけれど、これから何回かの speaking で少しでも上達したいと思った。 ・相手にばかり話してもらったので、今度は自分が話さないといけないと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全然自分の言いたいことが言えなかった。 ・話している時間よりも考えている時間の方が長かった。 ・お互いに意見の主張をただけで会話らしいものではなく、これでよかったのか疑問である。

リサーチ・クエスチョン

より多くの生徒が、即興性の高いスピーキングによる問題解決型タスクを達成することができるようになるためにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：会話方式のスピーキングテストで、問題解決型タスクを達成することができる生徒の割合が 90%以上になる。

改善のための手だて

- 生徒が会話に役立つ定型表現や方略（単純化・省略・フィラー）を身につけることができれば、より流暢に会話を進められるようになるだろう。
 - ・ 36 個の定型表現を機能別に 4 種類に分け、1 回の授業につき 1 種類の定型表現を生徒にくり返し発音して練習させた後、次の授業で復習させる。
 - ・ スピーキングの方略（単純化・省略・フィラー）を 1 回の授業につき 1 つ指導する。
 - ・ 「① スピーキング活動，② 定型表現およびスピーキング方略の学習と練習，③ スピーキング活動（①と同じもの）」という流れで授業を行い，学習項目の定着を促す。
- 会話練習にくり返し取り組ませ，活動の振り返りを続けさせれば，英語で話すことに慣れるとともに，意欲も高まるだろう。
 - ・ スピーキングテスト実施までに授業内で問題解決型タスクの会話練習を 10 回程度実施する。
 - ・ 「Reflection sheet」の記入を継続し，毎回の進歩と課題を意識させる。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

- ・ 問題解決型タスク活動後の振り返り（11月実施）

最後のスピーキング活動（第4回）の後に生徒が記入した「Reflection Sheet」の自由記述は、その多くが肯定的なコメントだったが、依然困難を示しているものも見られた。

肯定的なコメントからわかったことは、生徒が形式に過度にとらわれず内容を大切に話せるようになったこと、定型表現や方略を学んだことでよりスムーズに会話ができるようになったこと、会話に慣れたことでスピーキングへの抵抗感が軽減され以前より前向きにスピーキングに取り組める

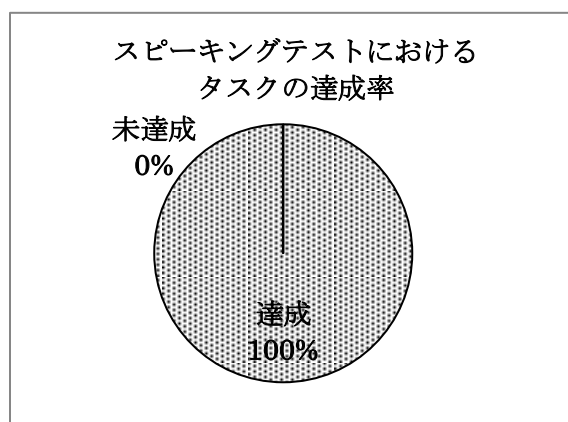
ようになったことの3つである。

そうでないコメントからわかったことは、定型表現や方略を学んでも自分の意見をまとめることの難しさから会話を進められない生徒がいること、定型表現や方略の定着が不十分な生徒も少なくなかったということ、スピーキング活動において2人の意見がはじめから一致しているとやりとりをする時間が短くなってしまふことの3つである。

プラスのコメント	マイナスのコメント
<ul style="list-style-type: none">・話したいことのすべてを話すことはできないが、何となく意見を伝えることができるようになった。・最初の頃は互いにスピーチのように一方的に話すだけだったが、今は意見交換をして会話ができるようになった。・だんだん自分で覚えたことばを使って会話をするのが楽しくなってきた。	<ul style="list-style-type: none">・会話中になるとなかなか意見が思いつかない。・定型表現については前に習ったものを忘れてしまっていて使えなかった。・相手の意見と一緒にしているとあまり話すことがなくなる。

・スピーキングテストの結果（12月実施）

これまで取り組んできたような問題解決型タスクをスピーキングテストとして実施した。データを得ることができた生徒78名の全員がタスクを達成することができた。



また、流暢さを目指した定型表現と方略の指導の成果として、生徒の取組状況からおもに次の3点が観察できた。

- * 定型表現と「フィラー」を積極的に使っている場面が最も多く見られ、言いよどみや沈黙のある生徒もなんとか会話を最後まで続けることができていた。
- * 「単純化」についてもその活用を確認することができた。客観的な観察は難しかったが、何人かの生徒が一度言いかけた内容を別のことばで言い直した。
- * 「省略」については、その活用を多く確認することはできなかった。依然多くの生徒が完全な文で発言する必要性を感じているようである。

教師の変化

会話のためのスピーキングの指導法をある程度確立することができるようになった。今までは授業で生徒に会話をさせることはあっても、事前にその指導をしたことはほとんどなく、そのアイデアを持っていなかった。しかし、今回の授業改善を通して自分なりの指導法を持つことができた。これを改善しながらよりよい指導を目指していきたい。

また、教師間でスピーキング指導について議論できるようになったことも嬉しい変化である。今回のスピーキングの授業では、教材を他の教師と共有し、学年全体で一致した指導を行った。指導の流れや教材については自分が決めたが、スピーキングテストについては他の教師と事前打ち合わせをし、意見交換をすることができた。こうした機会はあまり多くなかったので、これをきっかけにこれまで以上に他の教師との協力体制が進んでいくことを願っている。

今後の課題（次の改善点など）

今後は長期的な計画を立ててスピーキングの指導ができるようにしたい。指導する期間が長ければ、定型表現や方略を十分に定着させられるし、いろいろな場面・機能の会話パターンなど、多くの実用的な内容を扱うことができる。スピーキング指導について知識を深め、今回見つかった課題を踏まえながら計画を立て、よりよいスピーキング指導を目指したい。

まとめ・感想

今回のスピーキング指導にかかわる授業改善は、すべての生徒が問題解決型タスクの達成感を感じることができたという点で、成果を上げることができたといえるだろう。

授業改善を通じて感じたことは、指導者がまず目標を設定し、その達成のために十分な指導計画をすることの大切さである。指導する内容が精査され、最終目標に至るまでの足場組みが十分になされれば、生徒が無理なく活動に取り組むことができ、小さな成功体験を多く得ながら自らの力を伸ばすことができる。生徒が前向きに英語学習に取り組めるようにするために、今後もよく練られた指導計画を立てることを心がけていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料など

小林敏彦.(2004).『3パターンで決める日常英会話ネイティブ表現』語研

小林敏彦.(2005).『3文型で広がる日常英会話ネイティブの公式』語研

小林敏彦.(2006).『ネイティブならこう言う！英会話フレーズ600』語研

富田かおる(編著).(2011).『リスニングとスピーキングの理論と実践——効果的な授業を目指して』大修館書店

自己表現英作文を用いた使うための文法指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2学年の2クラス合計80名（男子20名，女子60名）である。ほぼ全員が4年制大学への進学を希望している。塾に通う生徒も多く、「受験英語」に関心が高い。しかし，進路指導の一環として行った学習調査の結果によれば，ふだんの授業の予習復習をやってきたり，日常的に英語を学習したりしている生徒は少ない。塾に通うことで勉強した気になってしまっている印象が強い。両クラスともおとなしいが，音読やペアワークなどは積極的に行う。

解決すべき課題

- ・文法項目について授業で詳しく説明し，問題演習にも取り組ませているが，それを使って自己表現をさせる機会が少ない。
- ・授業には積極的に参加し，また，塾に通って英語を学習している生徒も多いが，授業で学んだことを家や図書館等で自主的に復習する生徒は少ない。

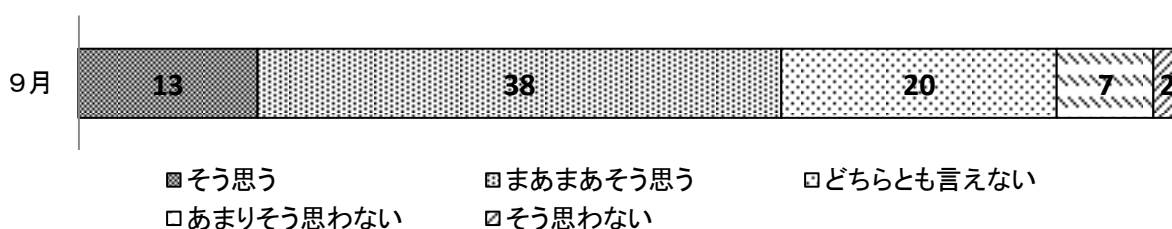
事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・英語学習への取組状況

英文を暗記することは比較的得意であり，音読などの活動を通して多くの生徒が教科書本文を暗記することができる。定期考査においては，暗記した英文の一部を再現する問題が多く，生徒は「英語は暗記」と思っていて，「覚える」ことに対する執着が非常に強いようであった。一方で覚えた文に含まれる文法事項を使った英作文などを定期考査に出してみると，多くの生徒が誤った文を書いたり，使うべき文法事項すらわからなかったりする生徒もいた。定期考査や小テストが終われば，暗記したことをすぐに忘れてしまって，定着に至っていない生徒が多く見られた。英語が使えるようになるために言語知識を蓄積しようという意識で勉強している生徒は多くないように感じられた。

- ・アンケート調査（9月：回答者数80）

1. 授業の活動を通して英語が使えるようになると思う。（人数）



「授業の活動を通して英語が使えるようになると思う／まあまあ思う」と回答した生徒は 51 人(62%)であった。しかし、実際には、そのなかにもテストが終われば学習内容を忘れてしまう生徒が多いと思われる。なにより、4 割近くが「授業の活動を通して英語が使えるようになる」という意識を持っていないことが課題であると感じた。

2. 授業後、その日学習したことを授業以外の時間で復習している。(人数)



「その日学習したことを授業以外の時間で復習している／少ししている」と回答した生徒は 30 人(38%)であった。半数以上の生徒が、授業で学習した内容を復習していないことがわかった。

リサーチ・クエスチョン

英語を使う機会を増やし、生徒が授業を通して英語が使えるようになると思えるようにするにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安:「授業の活動を通して英語が使えるようになる」と感じる生徒の割合が 75%以上になる。

改善のための手だて

- 学習した文法事項を使って、自己表現活動としてまとめた内容の英文を書かせれば、英語を使っている実感を持てるようになるだろう。
 - ・ 授業で学習した文法事項を使った 1 文に、それに関連したもう 1 文を付け加えて書かせる。
 - ・ ディスコースマーカーの使い方を指導して、つながりを意識して書けるようにする。
- 英作文を家庭学習課題とし、生徒の作品を使って成果と問題点をクラス全体で共有すれば、授業以外での学習動機が高まるだろう。
 - ・ 添削では、誤りの訂正だけでなく、伝えたいことをより簡潔に表現できるように指導する。
 - ・ 毎回、よく書けている文を見本として生徒に提示する。
 - ・ 多くの生徒に見られた誤りをとりまとめ、クラス全体に指導する。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・ ライティング活動への取組状況
 - * 生徒作品に頻出する誤りを全体指導したことによって、自分の作品をより注意深く見直す生徒が見られ、同じ誤りをする生徒が減ってきた。
 - * ディスコースマーカーの明示的な指導によって、多くの生徒が積極的にディスコースマーカーを使って作文するようになってきた。はじめは 2 文のつながりがわかりづらいものも見られたが、

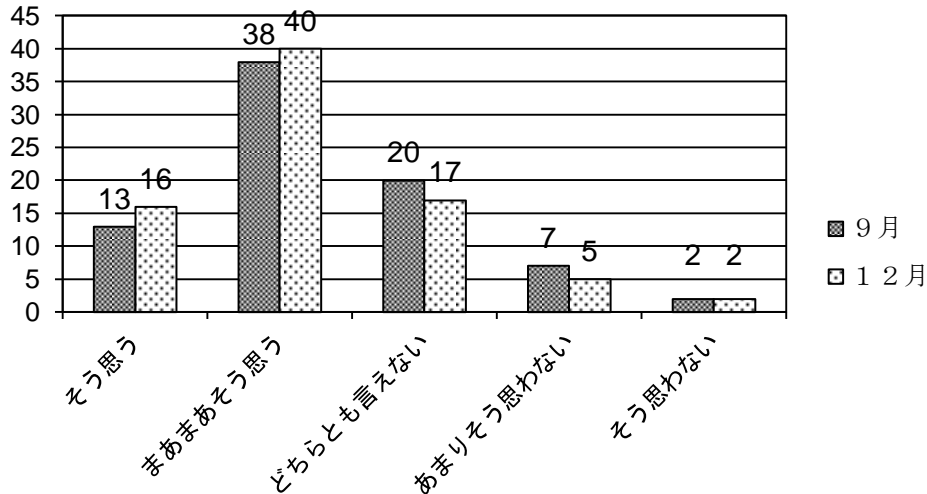
次第に減っていき、ほとんどの生徒が論理的につながりのある2文を書けるようになった。

* 英語で表現することの楽しさから、2文にとどまらず5文、6文と書いてくる生徒もいた。

* 指定された文法事項に加え、授業で学習した単語や構文を積極的に使おうとする姿勢が見られた。

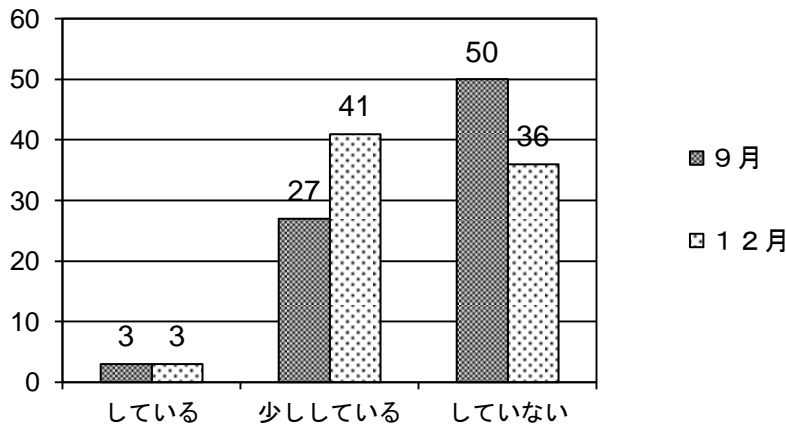
・アンケート調査（12月：回答者数 80）

1. 授業の活動を通して英語が使えるようになると思う。（人数）



9月では「授業の活動を通して英語が使えるようになったと思う／まあまあ思う」と回答した生徒は51人(64%)であったのに対し、12月では56人(70%)となった。目標の75%には達しなかったが、わずかではあるが「授業を通して英語が使えるようになる」という感覚を覚え始めた生徒が出てきたということがわかる。

2. 授業後、その日学習したことを授業以外の時間で復習している。（人数）



「その日学習したことを授業以外の時間で復習している／少ししている」と回答した生徒は、9月には30人(38%)であったが、12月には44人(55%)になった。指定された文法項目を使ったライティング課題に取り組むために、学習内容を家などで再確認した生徒が増えたのかもしれない。

教師の変化

客観問題とは異なり、生徒が自由に書いてくる英作文を添削するには膨大な時間がかかるうえに、どの程度修正したらよいかも疑問だったため、ライティングの活動は実施してこなかった。しかし、いざ書かせてみると、たった2文でも思わず微笑んでしまうようなものがあったり、切実さを感じさせるようなものがあったりして、添削するのがとても楽しくなっている自分に気づいた。文法や語彙の誤りは少なくないものの、精一杯自分のことを英語で表現しようとする姿勢を垣間見ることができた。大事なことは伝えようとする姿勢であると生徒に教えられた気がした。また、添削項目も2つぐらいに絞ってみれば、意外に時間がかからないということもわかった。英語を使えるようにするためには、教師が積極的に授業のなかで使う機会を与えていかなければならないということ再認識した。

今後の課題（次の改善点など）

今回のアンケート結果からは、「授業の活動を通して英語が使えるようになる」ことが実感できるかどうかに関し、自己英作文活動実施前後で回答の割合に大きな変化は見られなかった。原因のひとつとして実施回数の少なさが挙げられる。今後もこの活動を継続していくことで生徒の気持ちと表現力にどのような変化が表れるか検証を続けていく必要がある。また、来年度はアンケートや生徒の作品の分析を随時行いながら、1年間を通して省察的に授業改善を進めたい。

今回は2文の自己表現作文を実施したが、分量を増やしたり、会話文を作らせたり、スピーキング活動に発展させたりすることもできるだろう。生徒の力に応じて適切なタスクを与えられるように、活動のレパートリーを増やししながら、継続的に指導力を高めていきたいと思う。

まとめ・感想

生徒の関心に応えようとするあまり、文法や語彙の知識をいかに楽しく「覚えられるか」ということに自分自身が傾倒していたことにこの研修を通して気づいた。「知識」としての英語ではなく「道具」としての英語を教えていかなければならないと痛感する日々であった。いかに使うということにつなげるかをベースにしながら今後の授業研究を行っていきたい。

ルーブリックを活用した英作文の指導と評価

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象クラスは2年生の1クラス41名（男子20名，女子21名）である。ほとんどの生徒が大学進学を希望しているが，AO入試や指定校推薦での進学希望者が多く，一般入試を意識する生徒は少ない。生徒は全体的に明るく，積極的に学習活動に取り組んでいる。

解決すべき課題

学習指導要領で明示的に述べられている「英語の授業は英語で」という観点から，できる限り英語による内容理解ができるような授業を進めてきたが，「読む」「聞く」という受動的な活動が多く，教師主導の授業になりがちである。英語力を実際に運用する機会もほとんどなく，学習した内容を応用して表現する能力が養われていない。そのため，英語を用いて自分の意見や考えを「書く」「話す」という主体的な自己表現活動を増やす必要があると思った。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・これまでの指導方法の見直し

「コミュニケーション英語Ⅱ」の授業では，教科書本文に書かれていることを理解する読解活動が中心となり，「話す」・「書く」という自己表現活動をする機会をあまり与えていなかった。そのため，「読解力」は徐々に身につけてきているものの，授業を通じて「話す」・「書く」といった実践力は養えていない。読解力と表現力をともに高められるように，自己表現活動につながるより深い読解活動に取り組ませたいと思った。

- ・アンケート調査（7月：回答数41）

この授業でもっとも伸ばしたいと思う英語の力（複数回答可）

技能	人数 (%)	技能	人数 (%)
Listening	9 (22.0%)	Reading	17 (41.5%)
Speaking	21 (51.2%)	Writing	22 (53.7%)

半数以上の生徒が「話す」・「書く」といった表現力を伸ばしたいと思っていることがわかり，授業のなかに自己表現活動を取り入れる必要があるとあらためて思った。

書く力の自己診断

言いたいことを英語で書くことができると思うか	人数 (%)
かなりできると思う	0 (0.0%)
少しできると思う	17 (41.5%)
あまりできないと思う	20 (48.8%)
まったくできないと思う	4 (9.8%)

半数以上の生徒が自己表現力としての書く力に自信を持っていないことがわかり、適切な指導によってより多くの生徒に自信を持たせたいと思った。

・ライティングテスト（7月：受験者数 41）

トピック：「環境によいこととして取り組んでいること・取り組みたいと思うこと（身近な事例や経験などを取り上げ 5 文以上で）」

これまでにまとまった英文を書く機会はほとんどなく、多くの生徒が具体的に何をどのように書けばいいのかかわからない様子だった。主語＋動詞の構造が確立していない文や、おおむね正しい英語で書いてはいるものの、箇条書きでまとまりのない英文を書く生徒が多くみられた。また、実施後のアンケート結果からも、英文を書くことに抵抗感を持っている生徒が 7 割近くいることがわかった。

英文を書くことに対する抵抗感	人数 (%)
まったく抵抗はない	4 (9.8%)
ほぼ抵抗はない	10 (24.4%)
少し抵抗がある	21 (51.2%)
かなり抵抗がある	6 (14.6%)

リサーチ・クエスチョン

生徒がまとまった英語で自分の考えを表現できるようになるにはどのような指導をすればよいか。
改善の目安：評価ルーブリック（自作）による総合評価 A の生徒がクラスの 7 割以上（41 人中 29 人）になる。

評価項目	評価
内容	4 点 内容に一貫性があり，例・理由などの示し方が優れている。
	2 点 内容に一貫性がある。
	1 点 内容に一貫性がない。
構造	3 点 主題文－支持文－結論文の構成ができています。
	2 点 主題文と支持文が書かれている。
	1 点 主題文と支持文が不明瞭である。
文法・S+V 構造	3 点 S+V 構造が適切で文が整い，意味が伝わる。
	2 点 S+V 構造などに少し誤りがあるが，意味は伝わる。
	1 点 S+V 構造などに少し誤りがあり意味が伝わらない。
評価	A：10～7点 B：6～4点 C：3点以下

*このルーブリックで7月のライティングテストを再評価し，指導後の結果と比較する。

改善のための手だて

- 授業中に英文を書く活動を頻繁に行えば，書くことに慣れ，抵抗感が少なくなるだろう。
 - ・ 読んだ教科書の英文に関して自分の考えや意見を書く活動をできるだけ多く実施する。
 - ・ 書くことを整理するためのマッピングのしかたを指導する。
- 英問英答の課題で，「主語＋動詞」の構造を使うことを促せば，その構造を意識した文が書けるようになるだろう。
 - ・ 教科書の英文の読解活動としての Q & A において，答えに必ず S+V を含んだ英文を書くように継続的に指導する。

○ パラグラフの構造を明示的に指導すれば、より論理的な英文を書けるようになるだろう。

- ・まとまった英文を書く第一歩として、主題文－支持文－結論文からなるパラグラフのしくみを理解させる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・「書くこと」に対する抵抗感の変化

英文を書くことに対する抵抗感	7月人数 (%)	12月人数 (%)
まったく抵抗はない	4 (9.8%)	△ 6 (14.6%)
ほぼ抵抗はない	10 (24.4%)	△ 17 (41.5%)
少し抵抗がある	21 (51.2%)	▼ 14 (34.1%)
かなり抵抗がある	6 (14.6%)	▼ 4 (9.8%)

「抵抗がある」という生徒は 65.8%から 43.9%に減少した。授業で各パートの英文を読んで、英語で感想を述べる活動や目標文法を用いた英作文などに取り組ませた結果、書くことにだいぶ慣れ、抵抗感が減少したと考えられる。

- ・「書くこと」にかかわる達成感の変化

言いたいことを英語で書くことができると思うか	7月人数 (%)	12月人数 (%)
かなりできると思う	0 (0.0%)	0 (0.0%)
少しできると思う	17 (41.5%)	△ 21 (51.2%)
あまりできないと思う	20 (48.8%)	▼ 15 (36.6%)
まったくできないと思う	4 (9.8%)	△ 5 (12.2%)

自らの意見や考えを英語で書く表現活動を継続した結果、自分の言いたいことを英語で表現できるようになったと感じている生徒は、1割ほど増えたが、まだ半数近くの生徒が自分のライティング力について否定的な診断を下している。また4技能のなかでこの授業で伸びたと思うものをたずねたところ（複数回答可）、19人(46.3%)が書く力を挙げていた。今後も書く活動を継続し、生徒がより主体的に、かつ達成感を味わいながら表現活動に取り組めるよう指導していきたい。

- ・ライティングテストのルーブリック評価

<第1回ライティングテスト（7月）の結果>

トピック：「環境によいこととして取り組んでいること・取り組みたいと思うこと（身近な事例や経験などを取り上げ5文以上で）」

項目	4点	3点	2点	1点
内容	7人(17.1%)		12人(29.3%)	22人(53.7%)
構造		4人(9.8%)	5人(12.2%)	32人(78.0%)
文法・S+V構造		11人(26.8%)	18人(43.9%)	12人(29.3%)

	A	B	C
総合評価	11人(26.8%)	17人(41.5%)	13人(31.7%)

<第2回ライティングテスト（12月）の結果>

トピック：「My Dream（仮定法、群動詞を使って6～8文で）」

項目	4点	3点	2点	1点
内容	22人(53.7%)		13人(31.7%)	6人(14.6%)
構造		20人(48.8%)	16人(39.0%)	5人(12.2%)
文法・S+V構造		12人(29.3%)	22人(53.7%)	7人(17.1%)

	A	B	C
総合評価	30人(73.2%)	6人(14.6%)	5人(12.2%)

ライティングタスクのトピックは異なるものの、「内容」「構造」の面ではかなりの進歩が見られた。書く機会の増加、マッピングによる内容整理、パラグラフ構造の学習によって、生徒の書く力が向上したと言ってよいだろう。1回目に多く見られた箇条書き文も2回目ではまったくなくなった。しかし、文法・S+V構造の「正確さ」については、1点の生徒は減ったが、他の評価項目に比べて大きな進歩は見られなかった。今後も、既習の文法をより正確に使いこなせるようにする指導や言語活動の工夫が必要であろう。総合評価については、Aの生徒の割合が26.8%から73.2%に増え、改善の目標値に達した。

教師の変化

- ・英作文の評価ルーブリックを作成することにより、生徒の作品を分析的、多角的に評価できるようになっただけでなく、指導の焦点も明確になった。
- ・詳細なアンケートを行うことで、生徒のニーズを踏まえた授業をすることを心がけるようになった。
- ・今回の授業改善をきっかけに、授業の進め方など、同じ科目を担当している先生方と話し合いをする機会が以前よりも増え、意見交換や教材の共有などをしながら、より密接に連携を図ることができた。

今後の課題（次の改善点など）

- ・ライティングテストは2回しか実施できなかったもので、生徒の自己表現の機会を充実させるような年間の指導計画を立てる必要がある。
- ・生徒のライティングで正確さに課題があることがわかったため、文法については言語活動とセットで指導し、使えるまでに定着を促す必要がある。
- ・ルーブリックについては、他の先生方とともに使いながら、英作文の指導や言語活動の充実に役立てるとともに、その改善にも取り組んでいきたい。

まとめ・感想

この1年間のアドヴァンスト研修に参加して、アカデミアの先生方の有益な演習や講義をはじめとし、一緒に参加した先生方からよい刺激を受け、自分自身と授業を見つめ直す機会を得たことに心から感謝を申し上げたい。今回に限ることなく、つねに生徒の意識や能力を把握しながら、今後もさらに自己研さん、授業改善に努めていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

大下邦幸.(2014).『意見・考え重視の視点からの英語授業改革』東京書籍

書くことへの自信を育てるサマリーライティング

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象生徒は2年3クラスの120名（男子58名，女子62名）である。大半の生徒は大学，短大，専門学校への進学を希望しているが，例年の傾向として4割は推薦で決まり，一般受験をする生徒は6割程度である。中堅大学希望者が多いが，ワンランク上を目指す生徒もいる。全体的にまじめで落ち着いた雰囲気であるが，英語に苦手意識を持つ生徒も少なくなく，どのクラスでも能力差が大きい。

解決すべき課題

- ・使用している教科書のレベルが少し高すぎることに加えて，基礎的な語彙・文法の知識が定着していないことから，自力で初見の英文読解に取り組むことが難しい生徒が多い。
- ・英語を書くことが苦手な生徒が多く，教科書英文にかかわる英語による質問に対する答えを書く際にも，文法操作に苦勞し，該当箇所をそのまま抜き出してしまう生徒が多い。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・授業アンケート（9月：回答者数113人）

Q1. はじめて読む本文の内容を理解し，グループディスカッション前に自力で問題に答えることができていると思いますか。

	思う	少し思う	あまり思わない	思わない
9月	9人(8%)	48人(42%)	47人(42%)	9人(8%)

Q2. 与えられたサマリーの課題に自力で取り組むことができていると思いますか。

	思う	少し思う	あまり思わない	思わない
9月	21人(19%)	64人(57%)	25人(22%)	3人(3%)

Q1の結果より，自力で本文の内容を理解できていると感じている生徒と，そうでない生徒は同数であった。グループディスカッション後に，グループとして解答を求めると，英語の得意な生徒が主導し，苦手な生徒は聞き役になりがちである。答えを待つのではなく，自力で読解できるようになるための支援が必要であると感じた。

より正確な英文を書くための力を身につけさせるために，全員で共有した日本語によるサマリーを自分の英語で英訳する活動を始めた。Q2の結果を見ると，内容を自分のことばで表現できると感じている生徒は72%であった。しかし，この活動は和文英訳の段階であり，まだ自己表現の活動と呼べるものではない。

リサーチ・クエスチョン

英文をより深く理解し、その内容を自分の英語で適切に表現できるようになるためにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：英文を読み、その内容を自分のことばで表現することに自信を持って取り組める生徒が全体の8割以上になる。

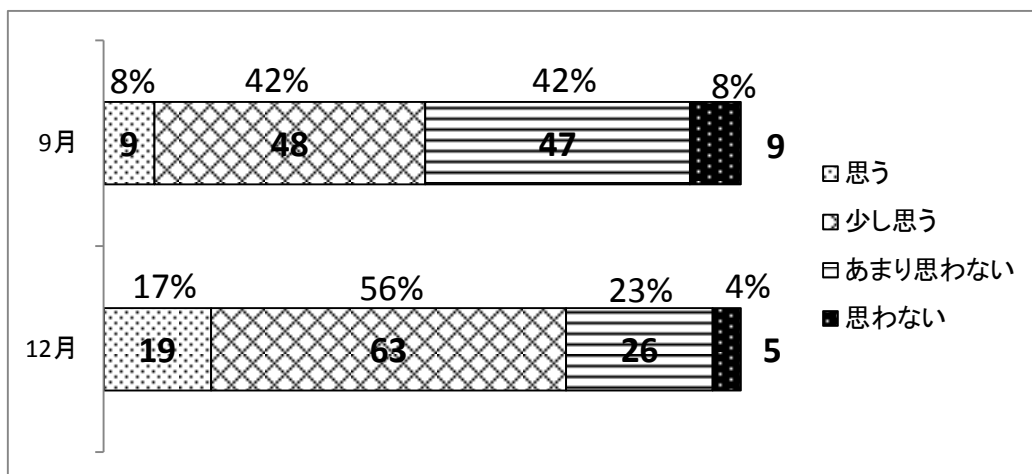
改善のための手だて

- プレリーディングの活動を行ったうえで、より深い思考を必要とする内容理解の質問を与えれば、自力で英文を読めたことを実感できるようになるだろう。
 - ・ オーラルイントロダクションを活用し、語彙知識を与え、内容を簡潔に提示することで、英文を読む準備をさせる。
 - ・ 教科書の英文からそのまま抜き出せば答えられるものではなく、文法操作の他、複数の情報からの判断を必要とするものなど、深い内容理解を問う質問を与える。
- パートごとのサマリーを自分の英語で書かせれば、自分の理解したことを主体的に表現することで、英語で書くことに自信が持てるようになるだろう。
 - ・ サマリーライティング活動の難易度を徐々に上げ、最終的に自分の英語で書けるようにする。
(共有した日本語サマリーの英訳→キーワードを指定したサマリー→Q&Aによる誘導作文からのサマリー→自作日本語サマリーからの英訳→自分の英語によるサマリー)

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・ 授業アンケート（12月：回答者数 113 人）

Q1. はじめて読む本文の内容を理解し、グループディスカッション前に自力で問題に答えることができていると思いますか。



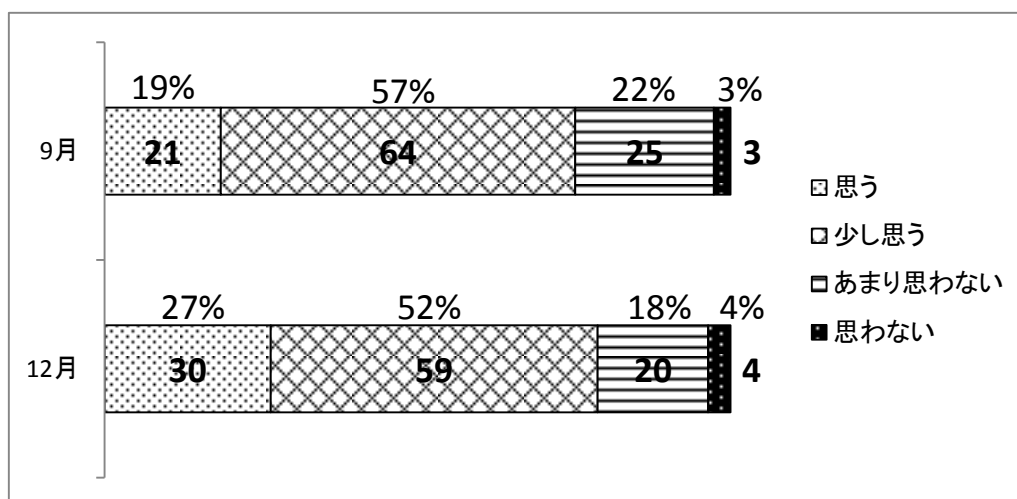
改善の目標値には届かなかったが、「思う」・「少し思う」の合計が 50%から 73%になった。9月と12月の回答結果についてノンパラメトリック検定 (Wilcoxon の符号付き順位検定) を行ったところ、有意な向上が認められた ($p = 0.00 < 0.05$)。

必要な語彙のインプットを含むプレリーディング活動としてのオーラルイントロダクションについては、ほとんどの生徒が「役に立った」と思っていることがわかった。

【参考 Q. オーラルイントロダクションは本文を読むために役に立っていると思いますか。】

	思う	少し思う	あまり思わない	思わない
12月	52人(47%)	51人(49%)	7人(4%)	0人(0%)

Q2. 与えられたサマリーの課題に自力で取り組むことができていると思いますか。



数的に大きな変化はないが、サマリーライティング活動の難易度を徐々に上げていったにもかかわらず、目標値にはわずかに届かなかったものの、およそ8割の生徒が自力できていると感じていた。今後さらに適切な支援を行いながら、より多くの生徒のスキルと自信を高めていけるように継続指導していきたい。

【参考 生徒が書いたサマリーの一部抜粋】

ELEMENT ENGLISH COMMUNICATION II (啓林館) Lesson4 Life in a Jar , Part2

- ① It was difficult for Irena to separate children from their parents because their mother didn't agree.
- ② Telling to the parents to separate from their children was a horrible task and the unfortunate families who disagree with her opinion had been taken to the death camps.
- ③ Children without parents were going to new families and given new names.
- ④ Children who was separated from their parents were given new names and taught Christian prayer.
- ⑤ After saved some Jewish children, Irena hoped one day that she could reunite with their families, so she kept lists of the names of all children she saved.

*原文のまま

まだ本文を暗唱したものをそのままの形で書く生徒もいるが、これらの例のように、自分のことばで本文とは異なる表現をしようと努めている生徒が増えてきた。その結果、内容理解の段階で行う英語の質問にも、より多くの生徒が、主語＋動詞の形式に注意して答えを書けるようになってきている。

教師の変化

- ・一つひとつの活動のねらいを生徒に理解させて取り組ませるようになった。ことばで伝えたり、板書したりしてゴールを明確にするよう努めている。さらに、活動の効果やつながりも意識しながら、授業の効率化を考えるようになった。
- ・ペアワークやグループワークが苦手な生徒の取組状況に以前よりも気を配り、声かけなどを密に行うようになった。
- ・生徒が英文の内容についてより深く考え、また読んだことについて自分の英語で表現できるように、ワークシートの構成を工夫するようになった。

今後の課題（次の改善点など）

- ・英語学習そのものに興味を持たない生徒への対応。
 - *教科書の英文の意味を追うことに終始するのではなく、文化的背景や言語の働きなどにも焦点を当てながら、多面的な動機づけを工夫する。
- ・深い内容理解に必要な語彙・文法知識が定着していない生徒への対応。
 - *内容理解やライティングなどの機会をとらえて、基礎的な語彙や文法の理解の確認をする。
 - *生徒の学力差に留意しながら進度を考え、個に応じた支援をしていく。
- ・ライティングの力を伸ばしていくための長期的な指導。
 - *長期的なゴールを設定したうえで、時間的制約があるなか、生徒同士の **peer editing** なども取り入れながら、できる限りライティングの機会を保障する。

まとめ・感想

自分一人では授業改善のための問題点の焦点が定まらず、さまざまな課題に悩むことが多かった。しかし、バラバラに思えた課題も、アカデミアで指導してくださる先生がたからの的確なアドバイスにより、つながりを持っていることがわかり、改善の方向性が定まった。私が抱える課題を解決できるヒントになる具体的な指導法や言語活動を学べたことで、それらを実際の授業に反映することができた。今回の研修で取り組んだ方法を活用して今後も授業改善に取り組んでいきたい。また、研修内容の一つとして、さまざまなトピックでディベートをするなかで、自分のスピーキング力の課題を感じた。使える語彙力を増強するとともに、発音も磨いていきたいと思う。また生徒の思考力・表現力向上のために、授業でも簡単なディベートを取り上げていきたい。

論理的思考力育成のための読む、書く力の統合的指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

担当クラスは、41名（男子22名・女子19名）と40名（男子22名・女子18名）の2クラスである。進路については、ほぼ全員が進学先として四年制大学を考えている。ペアワークなどの授業中の活動や予習などにもしっかりと取り組んでいる。

解決すべき課題

教科書の内容に関する英語の質問に答える際、質問の意図に沿った回答ができなかったり、表面的な読解しかできていないと感じられたりすることがある。情報検索的な読みに終始するのではなく、本文の内容を深く読み、それについての自分の感想や意見を文章で、あるいは口頭で表現できる力を身につけさせたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・事前調査（6月実施）：教科書の英文（「国境なき医師団」）の内容について意見を書かせ、下のルーブリックで評価した(評価対象人数：81)。

What do you think of Dr. Kanto's decision about the five-year-old boy?

(Write more than one sentence.)

	内容	構造	正確さ
A (5点)	内容に一貫性があり、例・理由などによって議論が深められている。	主題文・支持文・結論文が明示され、結論文が主題文の言い換えとなっているなどの工夫がある。	内容伝達に支障をきたす誤りがない。
B (3点)	内容に一貫性がある。	主題文・支持文・結論文が明示され、まとまっている。	内容伝達に支障をきたす誤りが1か所（/パラ）ある。
C (1点)	内容に一貫性がない。	主題文・支持文・結論文が不明瞭で、まとまりを欠いている。	内容伝達に支障をきたす誤りが2か所（/パラ）以上ある。
運用付帯事項	内容の面白さではなく、与えられたトピックに関して首尾一貫しているか、付加情報があるかなどを判断する。	主題文がはじめに述べられ、理由や関連情報などの支持文が続き、最後に結論文があるものを合格とする。	SV構造の欠如、語順の誤り、時制の誤りを含むものなどに加えて、意味が通じないものも含む。

	内容	構造	正確さ
A	21人 (25.9%)	5人 (6.2%)	15人 (18.5%)
B	31人 (38.3%)	50人 (61.7%)	22人 (27.2%)
C	29人 (35.8%)	26人 (32.1%)	44人 (54.3%)

*合格点(9点)以上：32人 (39.5%)

生徒の作品例：(原文のまま)

I think her decision is right. We all die someday. In my opinion, I want to die happy feeling. I think that the boy also want to die easily; he doesn't want to die hard.

(評価 … 内容：C, 構造：C, 正確さ：C)

<考察>

- *教科書英文の内容について、表面的な読解に終始している回答が多かった。
- *主題文、支持文、結論文が不明瞭で、まとまりを欠いている回答が多かった。

リサーチ・クエスチョン

英文をより深く的確に読んで理解し、その内容に関する自分の意見や考えたことを適切に英語で表現する力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：ループリックによる評価で合格点（9点）以上になる生徒が全体の7割を超える。

改善のための手だて

- 教科書英文の内容について、より多くの質問を自分で作らせれば、内容理解が深まるだろう。
- 教科書英文の内容について、行間を読んだり推察したりして答える質問や、自分の考えを答えるような質問を増やせば、内容理解が深まるだろう。
- セクションごとにタイトルをつけさせたり、要約させたりする活動を増やせば、英文全体の論理構成を把握するような読みにつながり、論理構成を意識した英文が書けるようになるだろう。
- パラグラフ構造や必要となる英語表現を明示的に指導すれば、英文読後の感想や意見を適切に書いたり、口頭発表したりできるようになるだろう。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・自作読解問題の作成

9月からのワークシートのQ&Aの活動のなかで、自分で作る質問の数を1つから3つに増やした。情報量が増えたことでペアワークがより活発になり、そのやりとりの内容から、英文をより深く読みこんでいる様子うかがえた。

・推論質問・評価読みの活動

9月からのワークシートのQ&Aの活動のなかで、教科書英文のなかに直接答えとなる部分が明示されていないなかったり、いくつかの情報を統合して答えを導きだしたり、自分の考えを答えるような質問を増やしていった（全8回）。

質問例：

① Q: What is used to create a new effect?

A: All types of features such as logograms, acronyms, and leaving out letters are used together.

(=複数箇所を統合させて答えさせる質問)

② Q: What is the most important point in using texting language?

A: It is that people must learn when to use texting language and when not to.

→ Q: Give me a few examples where we should not use texting language.

A: We should not use it when we send messages to elderly people.

(=本文には明示されていない内容に関する追加の口頭質問)

最初とはまどっていた生徒も多かったが、回を重ねるにしたがって適切に答えられるようになる生徒が増え、全体的にはより深い内容理解ができるようになってきたと思われる。しかし、一方で表現のしかたがわからず、答えるのに苦労している生徒もいた。

・タイトル決め・要約の活動

セクションごとにタイトルをつけさせたり、要約させたりする活動を行った。要約活動については、最初の単語や文の数を指定する段階から始めて、「なるべく簡潔に」とするなど、徐々に自由度を上げていった。タイトルをつける活動は生徒に好評で、毎回工夫を凝らし、楽しそうに取り組んでいた。要約文もはじめのうちは、教科書の表現をそのまま使う生徒がほとんどであったが、回を重ねるうちに本文以外の表現を選んで、主題文・支持文・結論文の論理構成を意識した文章を書く生徒も増えていった。しかし、一方で教科書の表現をつなぎ合わせることで精一杯の生徒もいた。

・論理構成・英語表現の指導

主題文・支持文・結論文の論理構成の組み立て方や段落をつなぐ英語表現などを明示的に指導した。その後、本文の中心的主張について、自分の意見や考えをまとまりのある英語で書かせ、4人のグループ内での発表を経て、グループごとに一番よいと思う作品をクラス発表させた(全4回)。

各回のテーマ

① Take one thing that we humans have created so far, and describe it in English from the following points of view: (教科書英文のトピック: Biomimicry)

1. What has the creation enabled us to do?

2. Is the creation environmentally-friendly?

(Example) Cars have enabled us to go wherever we want. However, cars can increase global warming by emitting a lot of carbon dioxide into the air.

② Select an animal or a plant and discuss its special ability by answering the following questions: (教科書英文のトピック: Biomimicry)

1. What can that animal or the plant do that we humans can only dream about?

2. What can we humans do differently in the future by learning from that animal/plant?

③ Write a few (four to five) sentences discussing what you learned about mines in Section 1 and 2. (教科書英文のトピック: 地雷除去活動)

④ Write a few (four to five) sentences discussing what you learned about mines in this lesson and what we can do about this problem. (教科書英文のトピック: 地雷除去活動)

生徒の作品例 (原文のまま)

I was surprised at the ravages of war and mines. Mines remain under the ground for a long time, so it is important for us to think about the emotion of living victims. However, we don't understand the fact in detail. We can and must be interested in this problem.

(評価 … 内容: A 構造: A 正確さ: A)

- 事後調査（11月実施）上の④の結果をルーブリックで評価した。（評価対象人数：81名）

	内容	構造	正確さ
A	28人（△34.6% ← 25.9%）	19人（△23.5% ← 6.2%）	22人（△27.2% ← 18.5%）
B	43人（△53.1% ← 38.3%）	56人（△69.1% ← 61.7%）	31人（△38.3% ← 27.2%）
C	10人（▼12.3% ← 35.8%）	6人（▼7.4% ← 32.1%）	28人（▼34.6% ← 54.3%）

*合格点(9点)以上：58人（△71.6% ← 39.5%）

- アンケート調査（11月実施 回答者数：81名）

自分の感想や意見を書くことによって内容理解が深まったと思うか。

- | | | | |
|---------------|-----------|----------------|------------|
| 1. とても深まったと思う | 8人(9.9%) | 2. 深まったと思う | 64人(79.0%) |
| 3. あまりそうは思わない | 9人(11.1%) | 4. まったくそうは思わない | 0人(0%) |

[自由記述の例]

内容について自分で考える機会になってよい／内容について理解が深まるし、教科書の内容以外のことも知ることができて楽しい／自分で書いたり、話したりすることでより英語の勉強が楽しくなった／英作文の練習になってよい／書きたくても、表現がわからなくて難しかった。

<考察>

授業での活動を重ねるにしたがって、自分の考えや意見を英語で書くことに慣れていく様子が見えてきた。まだまだ文法的な誤りはあるものの、内容、構造、正確さの各項目において多くの生徒に進歩が見られた。合格点に達した生徒の割合も目標とした7割を超えた。また、アンケート結果から、ほぼ9割の生徒が、感想・意見を書くことで英文理解が深まったことを実感していることがわかった。

教師の変化

- 生徒に身につけさせたい力を明確にし、それを意識した授業内容を考えるようになった。
- 生徒の表現活動をより豊かなものにするため、指導する自分自身の英語力向上によりいっそう努めるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

- 書く活動にかかわる課題／改善点
限られた授業時間のなかで、効率的・効果的・継続的に表現活動を取り入れられる指導計画を、学校全体として考える必要があるだろう。
- 発表活動にかかわる課題／改善点
プレゼンテーション等の発表活動にかかわる音声指導を、指導計画の中に明確に位置づけることが必要であると感じた。それに合わせて、生徒の発話に対する適切なフィードバックのしかたや評価方法なども研究していく必要があるだろう。

まとめ・感想

今回の授業改善はふだん抱いていた思いをテーマにしてみた。教科書本文の内容に対して自分の感想や考えを表現できるような、主体的な読解を促すにはどうしたらよいのだろうか、とつねづね考えていたが、今回の試みによって、表現活動を取り入れていくことが深い読解につながっていくということがわかった。まだまだ課題も多く残っているが、ぜひ、この試みを継続しながらさらに改善していきたい。

平成 26 年度 英語教育アドヴァンスト研修 担当講師 (50 音順)

ヴァン・アメルズフォート、マルセル (VAN AMELSVOORT, Marcel)

江原 美明 (えはら よしあき)

クマザワ、ジョージ (KUMAZAWA, George)

パリセ、ピーター (PARISE, Peter)

村越 亮治 (むらこし りょうじ)

本柳 とみ子 (もとやなぎ とみこ)

平成 26 年度 英語教育アドヴァンスト研修
授業改善プロジェクト 報告書
－アクション・リサーチによる高等学校英語授業の実践－

発行日 平成 27 年 3 月 31 日

編集 神奈川県立国際言語文化アカデミア
(担当) 村越 亮治 江原 美明

発行 神奈川県立国際言語文化アカデミア
横浜市栄区小菅ケ谷 1 丁目 2-1
TEL 045(896)1091
